

〇二五三 島津吉貴・同継豊江御目見一卷帳
(冊子)

(表紙)

享保五年庚子六月朔日

於 御城 吉貴公江弥五左衛門

御目見一卷

享保六年辛丑正月五日於御假屋弥五左衛門五兵衛

継豊公江初而

御目見一卷

子五月十七日
一伊東五次右衛門より御役所宛書之書状并我等宛書之状、

桑畑孫七殿より夜前被為持、致披見候處、明十七日、

從 兵庫様御用候間鹿兒島江可罷越旨被 仰出候間、

弥五左衛門へ其段可被申渡候也、我等江之状ニ茂御用

之儀有之候間、天氣之吉悪ニ無構、船之通融無之候共、

陸地より長上下・ちいさ刀取揃、明十七日八ツ時分ニ

参着仕候得ハ相濟儀ニ候、此旨者五次右衛門より直ニ

弥五左衛門江可申遣通御意候由申来候、依之今日船よ

り罷越、直ニ田之浦江参上仕候得者、奥御座ニ被召寄、

御側ニ詰居候女房衆なと被召除、

御夫婦様より、御隠蜜ニ被 仰聞候ハ、弥五左衛門儀

祖父新左衛門・父仁左衛門事、從

寛陽院様難有被仰付候一筋、且又

寛陽院様 太玄院様加治木江被遊 御光儀候節、弥五

左衛門御太刀進上仕、 御目見被仰付候、就夫五兵衛

茂

太玄院様江加治木ニ而御太刀進上仕

御目見仕、将亦 太守様加治木江

御光儀之節者、弥五左衛門・五兵衛御太刀進上仕

御目見被 仰付候、然者弥五左衛門家茂新納仲右衛門

同前ニ於 御城御太刀進上仕、 御目見仕候様ニ御願

可被仰上与、久敷被懸 御思慮、此節右之由緒段ニ被

仰出、於 御城ニ御太刀進上 御目見可被仰付之御願、

谷山角太夫殿・山田源之允殿を以、比志島隼人殿江御頼被成、隼人殿より被達 貴聞候得者、例ニ可相成候間難被成通被仰出候旨、隼人殿より源之丞殿ニ而被聞召候、然共此儀者是非共与 思召儀ニ候故、又々御申被成候者、御意之段者御尤ニ奉存候得共、被遊やすき儀を被仰付候者、何ぞ詮茂無御座候、私年罷寄、私代ニ難被遊儀を被仰付候得者社、私之規模ニ者罷成事ニ候間、何とそ願之通ニ被 仰付可被下之旨、段々被仰上候得者、為左様事ニ候ハ、兵庫より依頼被仰付与被 仰出候而者、例ニ可相成儀ニ候条、兵庫家来之内今吉人 御目見可被仰付与 御前より可被仰出候之間、其節名を書出可申候、僭此段ハ別而重キ儀ニ候条、能々其意を兵庫被為得心候様ニ可申聞旨 御意候通、隼人殿より源之丞殿ニ而御承被成、至極御大慶ニ思召候、弥五左衛門ニ茂、別而冥加之儀ニ奉存候得、乍此上若御太刀者無用ニ仕、別品を進上可仕与共於有之ハ、左様ニ御座候ハ、御目見ハ申付間敷由可被申通、源之丞殿江被仰聞置候間、其段隼人殿より可被申候、此御願

最前不相濟又々被仰上候ニ付而ハ、角太夫殿病氣快氣を御待被成候ニ付、御滞留茂相重ミ、其内別而御世話ニ 思召候故、方々うらなひまでも被仰付候へとも、余程難達様ニ被聞召、御氣毒ニ被 思召候、其内養仙院卜為被申通ニ逢候而、御願相濟、御仕合 思召候、先他言ハ不仕、御目見之格護、内々可仕由被 仰聞候ニ付、委細承知仕候、此段ハ私より奉願儀者不罷成事ニ候處ニ、不存寄儀被附 御氣ヲ御願ニ被仰上被下候段、冥加不淺仕合、別而難有次第ニ奉存候旨御禮申上候、

写

明十八日四ツ時分被仰渡、御用之儀有之候間、麻上下御着用ニ而御登 城可被成候、以上、

五月十七日

島津内記

島津兵庫殿

十八日 一御用候間、田之浦江可参旨、伊東五次右衛門より御假

屋へ被申越候故罷出候處、五次右衛門ニ而被 仰渡候ハ、内記殿より昨日御手紙ニ而御承被成候ニ付、今日

御登城被成、内記殿より御直ニ御承被成候御書付拜見可仕由ニ而、

写

島津兵庫殿

右者、家来新納仲右衛門御太刀進上仕

御目見被仰付事候、兵庫殿儀候ニ付而御太刀進上仕

御目見仕候者、今老人可被仰付候間、相しらへ可被申

出候、以上、

五月

内記

拜見被仰付、右之通ニ被仰渡候、役人中何れ茂同前之

儀ニハ候得共、前方より御太刀進上仕

御目見仕来候家筋ニ而無之候へハ、御書出被成儀難被

成候、弥五左衛門家之儀者、

御三代様江於加治木御太刀進上仕

御目見仕来候家筋ニ而候間、此節弥五左衛門儀被仰付

筋ニ御書出被成候間、此旨承知可仕候、此段ハ今日五

次右衛門替合、加治木江罷帰候間、役人中江茂五次右

衛門ニ而被仰聞候旨被仰渡候、

十八日
一夫より奥ニ被召寄、兵庫様御意候ハ、委細為承ニ而

可有之候、御太刀進上之儀を如何与被思召候處、

思召儀ニ被仰出、御大慶被遊候、弥御目見之支度

仕、首尾能相仕舞候様ニ、内ニ随分立願をも可相立候

御念遣之儀ニ被思召之由、段々難有被仰聞候、

廿日
一右通難有被仰渡儀ニ候故、早速十八日ニ御樽・肴を茂

差上度儀ニ有之候得共、急ニ不相調、且亦鎌田藤四郎

殿御父子御見廻、御子之儀者初而御出故、別而御取持

有之候半之儀ニ候故、致延引、今日御重一組・御看一

折・御手樽一酒八盃入、田之浦江持參ニ而差上候、則

御肴ハ晚御膳御料理ニ被仰付、其外御ひらき被仰付候、

幸伊集院弥八郎殿・柏原市右衛門殿被參、此來へも御

寄合被成候、左候而此節御願之儀、段々御沙汰共有之

候處、弥八郎殿より對我等被申候者、足下此節之仕合

たくいなき事ニ候、江戸社々様成儀者屹涯之相立所ニ

而候得共、終ニ不承及候、増而御國ニ而者曾而無之事

ニ候、當々結構成仕合可申様無之候、

殿様ニ茂弟子丸休得江御意候ハ、兵庫殿より不成事

を成而くれよといわれ候ニ付、必至と御あまし為被遊

事ニ候、休得なとケ様之儀申候ハ、能遠流かもものハ有

之候与、為被遊 御意由承候ニ付、税所弥五太夫江其
段申聞せ候得者、備ハ左様成儀かと申、舌まき候と被

申候、 兵庫様江茂別而御機嫌能被 聞召候、

御口上書 写

私家来新納仲右衛門、御太刀進上ニ而

御目見仕候、今老入御太刀進上仕、

御目見仕候様ニ可被仰付者見合、願可申上由被仰渡、

別而難有仕合ニ奉存候、曾木弥五左衛門と申者、加治

木居宅江

御光儀之節、御太刀進上ニ而 御目見仕来候者ニ而御

座候間、此者江被仰付被下度奉願候、此等之趣可然様

御申頼存候、以上、

五月廿一日

島津兵庫

右御口上書、福永重右衛門より高橋七郎右衛門殿御取次ニ而差上候、

写

明廿三日、被仰渡御用候間、麻上下ニ而四ツ時分ニ御

出可被成候、以上、

五月廿二日

島津内記

島津兵庫殿

写

此内段々之御願ニ付、明日何そ進上被遊候ハ、可然之
旨、私より御知せ可申上之由、今晚被

仰出候間、宜御申可給候、尤右ニ付而御進上之品、此

方ニ而相談仕候得ハ、御肴一折・御樽一荷、何そ御野

菜之類一臺、右之外ニ磯鯛ニ而御行器一組、御次ニ被

下由ニ而御上候ハ、是又可然之由相談候、左候得者、

右御進上品 於須磨様御方江茂御上ケ被遊候ハ、可然

と相談候、右之趣を以宜御申可被成候、以上、

五月廿二日

富満伊太夫

老山彦右衛門殿

追而、御肴・御酒・御野菜之儀者、其方ニ而御調可被

成候、其外之儀ハ此方ニて相調可申候、若又相替事候

ハ、御報いか様と可承候、以上、

右ニ付而、翌廿三日、木原休八御使ニ而伊太夫殿

迄被差上候品、左之通、

一御肴一折

一御手樽一荷十六盃

一御野菜一折積交

右 太守様江兵庫様より

一御重一組

一御肴一折

一御手樽一荷十五盃

右 於須磨様江從 兵庫様

一昨日内記殿依御手紙、今日御登 城之後御假屋江被成

御入、老山彦右衛門を以被仰渡候へ、

今日御登 城被成、御承被成候、此内御太刀進上仕

御目見仕候者相しらへ可被仰上通御承ニ付、弥五左衛門

門江被仰付可被下通被仰上置候、然處弥以弥五左衛門

江可被 仰付旨被 仰出候間、其旨承知可仕由承候、

一早速田之浦江參上仕、 御夫婦様江御礼申上候、

一此御訴訟、山田源之丞殿江始終御相談ニ而、隼人殿へ

之御使を茂源之丞殿被成候處ニ、 御目見可被 仰付

与被 仰出候故、先為一礼柏原市右衛門殿・福永重右

衛門致同心、樽・肴致持參候、源之丞殿被為違、何欵
挨拶之後被仰候へ、

兵庫様依御願相濟候と申觸候事へ、上ニ差支事ニ候、

殿様ニ茂兵庫殿より無理成事を被謂候得共、兵庫殿い

わる事ニ候故、脇例ニ不成様ニ 御前より被遊可被

仰出との 御意ニ而有之候、然共御機嫌ハ不悪して、

此儀ハ別而不輕事ニ候間、兵庫殿江も其心得有之度旨、

隼人殿より源之丞江可申聞旨、 御意之通隼人殿より

承候条、其段 兵庫様江申上候、左様可相心得候、於

廳府茂屹立候家筋之人何そニ付而御太刀進上一代中絶

茂候得へ、如何様ニ申立いたし候而茂不被仰付御大法

ニ候、就夫ハ御記録所迄茂しらへ被仰付不相達等ニ被

申上候得共、 兵庫様より押返シ御申分強有之候ニ付、

殿様ニ茂難被成 思召為被相濟儀ニ候、能く此旨を存

可罷居通被仰候、

口上覺

私家来之内御太刀進上仕 御目見仕候者、今老人可被

仰付候間、相しらへ可申上由被仰渡候ニ付、曾木弥五

左衛門と申者ニ被仰付被下度旨奉願候處、願之通可被仰付旨承知仕、難有次第奉存候、然者此節以御序何とそ御目見被仰付被下度奉願候、此等之趣宜御申頼存候、以上、

五月廿七日

島津兵庫

此御口上書、廿七日八ツ以後ニ罷成候故、かけニ不逢、廿八日ニ福永重右衛門より高橋七郎右衛門殿江差出候、

曾木弥五左衛門

右新納仲右衛門同前、御太刀進上仕

御目見可被仰付旨被仰出趣有之候、依之弥五左衛門事、此節御太刀進上仕、御目見被仰付度旨被申出、来月朔日御太刀進上仕、御目見可被仰付候、仲右衛門儀、繼目之節計、御目見被仰付事候ニ付而、弥五左衛門事茂右同前ニ被仰付候、然共弥五左衛門儀ハ、御目見被仰付折目無之故、此節右之通被仰付事候、尤以後之儀ハ、繼目之節計被仰付筈候条、此段兵庫殿江申達候様ニ假屋守へ可申渡候、以上、

五月

内記

右、五月晦日、高橋七郎右衛門殿御取次ニ而、福永重右衛門へ相渡り候、

島津兵庫殿家来

曾木弥五左衛門

右者、朔日御太刀進上ニ而

御目見被仰付筈ニ候間、支度長上下着用候而、朝五ツ時ニ罷出、御目附江取合、其首尾可申出候、若當病差合共ニ而難罷出候ハ、其訳無遅滞可申出候、以上、

五月晦日

奏者月番

高橋七郎右衛門

島津左仲

右御觸状之写、本書ハ星さし相返候、

六月朔日

一今朝五ツ時、御城ニ参上仕、溜之間江相話候有川幸

右衛門殿・市来茂左衛門殿・二渡半左衛門殿・川上助八殿江引廻シ相頼、必至と相附被居候、兵庫様より柏原弥太右衛門殿始終被召附置候、尤挿箱江長上下・ちいさ刀取揃もたせ、傳兵衛・与十郎挿箱ニ相附、溜之間ニ罷居候、

同日則

一御目見ニ付、御書院拜見之儀者、御奏者番御番頭島津左仲殿より御用之由ニ而拜見被仰付、御目見之仕様

被成御覽、其通ニ御禮可申上由被仰候、

同日則

一四ツ半時支度可仕由 御目見之惣人数へ仰渡有之、其

後御書院ニ可罷通由候而、梅之間ニ何れ茂同前ニ相詰

候、然處諸御役月次之 御目見相濟、初而之 御目見、

家督繼目之 御目見相濟、我等儀御太刀進上ニ而首尾

能 御目見仕候、尤麿嶋來進上之御太刀之席、御目見

之席不相替、御奏者川上縫殿久盤殿、

同日

一兵庫様より、此節之儀者各別之事ニ被 思召上由ニ而、

御家老衆・若御年寄衆・大御目附衆・御奏者被成候縫

殿殿江、柏原市右衛門殿御名代之御使御頼ニ而、弥五

左衛門 御目見被仰付御大慶被成候由御礼被仰入候、

左候へハ弥五左衛門儀茂市右衛門殿与同心ニ而何れ茂

へ罷出、自分御礼可申入由被仰渡、其通ニ御礼相仕舞

候、

同日

一直ニ田之浦江参上仕御禮申上候処ニ、市右衛門殿、弥

五左衛門江御寄合被仰付候、左候而從

兵庫様被成 御意候ハ、 御目見之仕廻御念遣ニ思召

候處、早晚より宜有之候通 御意ニ而、難有奉存候、

妻女事も此内より相詰居候故、為御礼田之浦江罷出候、

同日

一御假屋中居付之人数、加治木より詰合之面々迄、五兵

衛新六ニ而於旅宿吸物・酒相振舞候、

同日

一山田源之丞殿江罷出、昨日 御目見首尾能被仰付難有

次第ニ奉存候、早竟以御蔭右仕合忝存申候旨申入置候、

同日

一鹿兒府一門中江祝候而、料理於旅宿相振廻候、

同日

一種子島彈正殿より昨日御禮ニ参上仕候為御礼、今日此

方御番所迄御使被下候故、御宅江罷出、御礼申上置候、

且又昨日於 御城御目附衆伊集院善太夫殿、別而丁寧

同日

一鹿兒嶋座頭三人為祝儀今日参候間、取肴ニ而酒出候、

同日

一此方座頭城礮座市挨拶申付候、

同日

一金子百疋 右座頭中江可取之由ニ而城礮座市江相渡候、

同日

一右一卷首尾ニ付而、今日 御膳進上仕候故、田之浦よ

りハツ半時ニ御假屋江被遊

御入、奥之御書院ニ而 御膳差上候、御相伴山田源之

丞殿・伊集院弥八郎殿・柏原市右衛門殿・兒玉宗因老

・坂元養伯老、

御献立

一御熨斗

塗三方

御薄茶

一御指身

鯛生姜酢

一御吸物

ひれ
ゆす

御押ゑ 巻するめ

御本膳

御鱧きす
若はし

御汁塩鴨
大名なは
赤木なは
糸うり

赤貝
金かん

かうの物

御煮和はいり子
小あひ
わりらう
山升

御食

御二

杉はん焼へん
黄せつ玉つ子
春きく

御汁干鱈
春こんの布こ

浸物根うと
薄みやうやか
氷こんにやく

御三

なんでんかい敷
大指身志とめ
志めかい

生か酢
青酢

御汁しよめ貝

御四

塩ふた なんばんねき

御引て

一色あち附焼鮎

御引て

一かばやき
折こん布

御肴あわひでんかく

御吸へきふし
小梅干ゆんさい

御嶋臺士器御盃

御押ゑ花からすミ

御茶菓子美作もち
釣柿はもこんきり

御後菓子有へいとう
卷せんべい

御間菓子焼まんちう
高麗まらちう

御後段

白砂糖 西國米

淺漬

御吸ものも魚
水山升

間御吸もの・御肴時宜次第

御籠飯一組

やうかん
雪めし

上盛

玉椿
まつかせ
人しんとう
小みとり
唐いちこ

拜領物

一金子五百疋 御目錄

兵庫様より弥五左衛門江

一同三百疋 右同

奥方様より弥五左衛門江

一同三百疋 右同

兵庫様より妻江

一同貳百疋 右同

奥方様より妻江

一金子貳百疋 御目錄

兵庫様より五兵衛江

一同百疋 右同

奥方様より五兵衛江

一同百疋 右同

兵庫様より五兵衛妻江

一同百疋 右同

奥方様より五兵衛妻江

進上物

一御腰物一腰

但白鞆、淺黄日野袋ニ入、

無銘長式尺四寸七分半

直双作、佐藤ニ而可有之、

位ハ老枚五両之札兜而可出候、福嶋正左衛門殿見

分之上被相究候、使山上源八、

兵庫様江弥五左衛門より

一金子五百疋 御目錄

奥方様江弥五左衛門より

一御籠飯一組

やうかん

雪めし

上盛

玉樽
まつかせ
人參とうり
小みとり
からいちこ

一御着二折

一御樽一荷 十六盆

右 御夫婦様江母并妻・五兵衛夫婦・仁左衛門・新

六相中より

右拜領物・進上物迄、御取次披露仁礼休右衛門、

一御掛物 寿老人

常信筆

一御立松

右御料理、御嶋臺被召上候節、小謡三篇 曾木五兵

衛・法元休左衛門、御臺直シ柏原弥太右衛門殿へ相

頼、御酌織田甚七、

羽生檢校夜入元より参り、御遊興被申上候、

一進上之御菓子・御酒・肴御ひらき有之、被召上候、

一御機嫌能御祝相濟、何れ茂暁八ツ時ニ退出、其後 御

夫婦様より御前江被召出、先月十七日内記殿御手紙写、

翌十八日御登 城ニ而御承被成候御書付之写、同廿二

日内記殿御手紙之写、同廿三日御登 城ニ而内記殿よ

り御口達ニ而御承被成候趣書、同廿七日 兵庫様御口

上書写、同晦日福永重右衛門 御城江御用之由ニ而高

橋七郎右衛門殿御取次を以 兵庫様江可申上之旨ニ而

内記殿より御書付之写、右数通一紙ニ被相記、仁礼休

右衛門ニ而於 御前被仰下候ハ後年之重寶ニ可相成候

間、右之通被仰付被下之由ニ而拜領被仰付、其外段、

御直ニ難有 御意共有之候、

一田之浦より御供之人数、且又人足迄ニ至り、二汁一菜

之料理出シ候、

一別而御機嫌能、夜明七ツ半時ニ

御夫婦様・亀千代様、田之浦之様ニ被成御帰宅候、

一今日為御禮何れ茂田之浦江参上仕候、

同日 一金子百疋 目錄

右、羽生檢校江手紙相添遣候、

同日
一御相伴之人数江一札申入候ニ付、源之丞殿を始見廻候

而申入置候、

一我等儀五日迄ニ相仕廻、六日ニ罷帰、御精進日廻、

慈照院様・助左衛門様・左膳様御方江兩日ニ相懸り、

御樽肴致進上候、尤夫婦罷出候、從 助左衛門様御上

下、從 奥方様金子百疋御目録被下候、

一一門中并心易面々江二汁五菜之料理相振舞候、

一其後同役中・御使役・物奉行・御南戸役・御役所筆者

中、何連茂江二汁五菜之料理相振舞候、

右 御目見之儀者、久季公長々被掛 御尊慮御頼

為被仰上事ニ候處、例ニ可相成事ニ候間難被成由被

仰出候、然共又々強而被仰上候ニ付、乍此上ハ例ニ

不成様ニ 御前より可被遊との御事ニ而、新納仲右

衛門同前ニ、今一人御太刀進上仕 御目見仕候者相

しらへ可被仰上旨被 仰出候故、從 久季公被仰上

候者、弥五左衛門事、

御三代様江御太刀進上仕、加治木ニ而 御目見仕来

候者ニ而候間、御目見可被仰付旨被仰上、六月朔

日段々首尾能 御目見相濟、冥加不淺仕合難有次第
候、依之妻女并五兵衛・同姓新六、五月廿七日より

六月六日迄、皆共ニ鹿兒島御假屋ニ相詰、一首尾相

濟候、我等家之儀者、重治代より於飯野 義弘尊公

江御奉公仕候御厚恩故、相續 家久尊公江奉仕候處

ニ、 忠朗公江懸命之高三百老石六斗八升共ニ被召

附候、從 忠朗公、我等幼少之節不願ニ 光久尊公

綱貴尊公江御太刀進上ニ而、於加治木 御目見被仰

付候、其故を以此節御願被仰上、右之通首尾能被仰

付、至已後繼目之御禮迄茂可被 仰付与被 仰出候、

從 忠朗公 久季公御厚恩、至子孫忘却有之間敷候、

尤此節被仰上ニ付而ハ、菱刈家之庶流ニ而 義弘尊

公江於飯野永祿年間重治御奉公ニ被罷出候而より、

重治・重公・重松三代之軍忠、重知・重澄從

光久尊公難有被仰付候一筋、

御三代様江我等事、御太刀進上仕於加治木御目見、

且亦 綱貴尊公 吉貴尊公江五兵衛御太刀進上ニ而、

於加治木 御目見被仰付候儀迄茂被達 上聞候、將

又此節一首尾ニ付而、御月番御家老島津内記殿より之御書付之写・御口上書等迄写被仰付、後年之見合、重寶ニ可仕旨ニ而、六月四日之夜、仁礼休右衛門御取次ニ而、於御前被下之候、柏原弥太右衛門殿被相詰候、早竟久季公最前より別而思召為有之事候条、甚暑之砌態々鹿兒嶋江数十日御滞在、折々御登城ニ而仰渡をも御承、前後有之間敷御世話被遊、殊更最前被差上候由緒書両通之地取、七月廿三日、紙原弥太右衛門殿ニ而拜領被仰付候、御目見之節中御奏者川上縫殿久盤殿、御捻并進上仕候御太刀之目錄ニ御南戸藏役人衆より名印ニ而相渡り候、此方之押山谷角太夫殿江罷出候故、御手紙脇々より之手紙等数通、紙袋ニ入置候、

覺

一 曾木弥五左衛門家之儀、菱刈家之庶流ニ而、数代曾木ニ為罷居由候、左候而弥五左衛門五代之祖曾木播磨重

治と申者、永祿年間飯野ニ罷出 惟新様御家臣ニ罷成、別而御心安被召仕候、元龜三年五月四日

惟新様於飯野木崎原伊東家と御合戦、御難儀之節

惟新様御馬前ニ而、鎌田大炊・野田越中坊・富長刑部左衛門・播磨四人、究竟之場ニ而致戦死候故、 惟新様御勝利ニ為罷成由候、

一 右播磨嫡子播磨重公、幼少より 惟新様へ致勤仕、九州御発向之戰場致御供、軍勞為仕由候、

一 右播磨嫡子五兵衛儀、 又市郎様相州小田原御出陣之節十六騎之騎馬御撰被召列候ニ、五兵衛事茂其内ニ而御座候、 惟新様高麗御渡海之節、五兵衛儀御南戸奉行ニ而致御供候、左候而 久保様於朝鮮御卒去被遊、御遺骸御帰朝之御供仕罷帰候而、 中納言様朝鮮へ御

供仕、又々罷渡、於彼地相應之軍忠茂有之候故、御感状并知行百弍十石拜領為致由候、左候而 惟新様致御供、関ヶ原御合戦昼夜御側を不離致粉骨候故、御下向之後御感状・知行百石為致拜領由候、其後御姫様為御質江戸へ御登り御供被仰付、相詰罷居候内、從 惟新

様被成下候御書兩通格護仕候、此外 惟新様 又市郎
様拜領物多々被仰付候、 惟新様別而御心安為被召仕
由候、

一 弥五左衛門祖父新左衛門事

寛陽院様能御存被遊、御心易折々 御前江茂被召出、
難有以 御意拜領物等毎々被仰付、殊拜領物被仰付候
砌、御自筆之御書致頂戴候、委細先年系圖并由緒御記
録所江差出候、

一 弥五左衛門親仁左衛門、弥五左衛門と申候節、祖父新

左衛門ハ役人申付置候處、役儀断申出、

寛陽院様被 聞召上、弥五左衛門江役儀被仰付相勤申

候、左候而一旦役儀断相違罷居候、又々役儀相勤候砌、

弥五左衛門、新左衛門と改名可致旨

寛陽院様御意ニ而候旨、市正殿より被仰渡候、其後嶋

織木綿老反ツ、両度拜領被仰付候、新左衛門より茂每

年年頭為御祝儀御樽代百疋ツ、献上仕、歳暮之御祝儀

ニも毎年肥後織木綿老反ツ、献上仕、歳暮年頭ともニ

御城通番所迄参上仕候、

覺

寛文十一年三月朔日

(島津光久) 寛陽院様 大玄院様一度ニ被遊

御光儀候節、新納仲左衛門・曾木弥五左衛門、御太刀

進上ニ而 寛陽院様為 御名代 大玄院様江御目見被

仰付候、

大玄院様江者翌日小村御假屋江参上仕、御太刀進上仕

御目見仕候、元禄二年三月五日 大玄院様御光儀之節、

弥五左衛門嫡子五兵衛儀茂御太刀進上ニ而 御目見仕

候、同九年正月廿六日 太守様御光儀之節、弥五左衛

門并五兵衛御太刀進上仕 御目見仕候、

但右両通御地取故、日付無之由、弥左衛門殿より承候、

於御書院御禮之次第写

島津平次郎

右 御直元服、奏者川上縫殿

一月次之御札

右奏者島津藤次郎

一 御太刀

川上瀬兵衛

右奏者新納左京

一御太刀

右奏者川上縫殿

右家督之御礼

一御太刀

右奏者新納左京

右養子成之御礼

一御太刀

右奏者川上縫殿

一御太刀

右奏者新納左京

右初而之 御目見

一御太刀

右奏者川上縫殿

右嫡子成之御礼

一中紙

森喜平次 町田七郎左衛門

兵衛 福崎伯悦

(分) 紛陽茂右衛門

右奏者嶋津又七

野村小左衛門 星野理兵衛 白濱八郎右衛門 押川

彦兵衛 大馬場諸右衛門

右奏者肝付典膳

川上嘉左衛門 大山源左衛門 田実彦八 森新助

右奏者嶋津藤次郎

山路伊兵衛 新納權右衛門 肝付彦兵衛 石神源左

衛門 愛甲源之允 税所市左衛門

右奏者桂太七郎

山田次郎左衛門 伊十院勘助 有馬休兵衛 有田為

右衛門 伊十院武助 川俣作右衛門

右奏者嶋津又七

納殿座附士

永田孫右衛門

右同 福永長左衛門

右奏者肝付典膳

一天井折拾貳合

一御樽五荷

一御太刀馬代

右元服之御礼

右奏者川上縫殿

右着座仕、御引渡被下候、

一 御太刀

島津周防殿

右世倅元服之御禮

右奏者新納左京

右終而

一 御太刀

嶋津兵庫殿家来

曾木弥五左衛門

右奏者川上縫殿

右終而

一 御目附

六月朔日

一 享保六年辛丑正月五日

繼豊公初而 御下向、依之脇御方江者 御光儀無之事

ニ候得共、 兵庫様御事ハ格別之御間柄故、依御願同

二月九日魔嶋御假屋江被遊 御光儀候、我等家初而

御目見仕候節者、御太刀進上被仰付事ニ候故、此節弥

五左衛門・五兵衛同前ニ御太刀進上ニ而 御目見被仰

付候、御披露御奏者番新納左京、但此節者右式故役目

ニ不構事ニ候間、餘役人ハ御着目録進上ニ而、何れ茂

并之席ニ而候得共、新納仲右衛門・我等父子者、御廣

間御座より二番目之平敷居ヲ越、其席ニ而御禮被仰付

候、御太刀之目録、両通共ニ御蔵役人名印ニ而相渡リ

候、

○二五四 島津吉貴・同繼豊江御目見一卷帳

草案

(本文書ハ二五三号文書ノ草案ニツキ省略ス)

○二五五 島津吉貴江御目見次第外覽書草案

(本文書ハ二二七号文書ノ草案ニツキ省略ス)

○二五六 島津吉貴江御目見次第外覽書草案

(本文書ハ二二七号文書ノ草案ニツキ省略ス)

〇二五七 曾木弥五左衛門御目見書付

子五月十七日

一伊東五次右衛門より御役所宛書之書状并我等宛書之状、

桑畑孫七殿より夜前被為持、致披見候處、明十七日從

兵庫様御用候間、鹿兒嶋江可罷越旨被 仰出候間、弥

五左衛門江其段可被申渡由也、我等江之状ニも御用之

儀有之候間、天氣之吉悪ニ無構、船之通暢無之候共、

陸地より長上下・ちいさ刀取揃、明十七日八ツ時分ニ

参着仕候得ハ相濟儀ニ候、此旨者五次右衛門より直ニ

弥五左衛門江可申遣通

御意之由申来候、依之今日船より罷越、直ニ田之浦江

参上仕候得者、奥御座ニ被召寄、御側ニ詰居候女房衆

など被召除、御夫婦様より御恩蜜〔隠〕ニ被 仰聞候者、

弥五左衛門儀、祖父新左衛門・父仁左衛門事、從

寛陽院様難有被仰付候一筋、且又

寛陽院様〔島津綱實〕 太玄院様加治木江被遊 御光儀候節、弥五

左衛門御太刀進上仕 御目見被仰付候、就夫五兵衛も

太玄院様江加治木ニ而御太刀進上仕 御目見仕、将亦

太守様加治木江 御光儀之節ハ、弥五左衛門・五兵衛

御太刀進上仕 御目見被 仰付候、然者弥五左衛門家

茂新納仲右衛門同前ニ於 御城御太刀進上仕 御目見

仕候様ニ御願可被仰上与、久敷被掛 御思慮、此節右

之由緒段ニ被仰出、於 御城ニ御太刀進上 御目見被

仰付可被仰付之御願、谷山覺太夫殿・山田源之丞殿を

以隼人殿江御頼被成、隼人殿より被達

貴聞候得者、例ニ可相成候間難被成通被 仰出候旨、

隼人殿より源之允殿ニ而被 聞召候、然共此儀者是非

共与 思召儀ニ候故、又々御申被成候者、 御意之段

ハ御尤ニ奉存候得共、被遊やすき儀を被仰付候ハ、何

そ詮茂無御座候、私年罷寄、私代ニ難被遊儀を被仰付

候得者社、私之規模ニ者罷成事ニ候間、何とそ願之通

ニ被 仰付可被下之旨、段々被仰上候得者、為左様事

ニ候ハ、兵庫より依願被仰付与被 仰出候而者例ニ

可相成儀ニ候条、兵庫家来之内今老人 御目見可被仰

付与、 御前より可被 仰出候之間、其節名を書出可申候、當

写

此段者別而重キ儀候条、能ク其意を兵庫被為得心候様ニ可申聞旨 御意候通、隼人殿より源之允殿ニ而御承被成、至極御大慶ニ思召候、弥五左衛門ニも別而冥加之儀ニ奉存候得、乍此上若御太刀者無用ニ仕、別品を進上可仕旨共於有之ハ、左様ニ御座候ハ、御目見ハ申付間敷由可被申通、源之丞殿へ被仰聞置候間、其段隼人殿より可被申候、此御願最前不相濟、又々被仰上ニ付而ハ、覚太夫殿病氣快氣を御待被成候ニ付、御滞留も相重ミ、其内別而御世話ニ 思召候故、方々うらなひまでも被仰付候へとも、余程難達様ニ被 聞召、御氣毒ニ被 思召候、其内養仙院卜為被申通ニ逢候而、御願相濟、御仕合思召候、先他言ハ不仕、御目見之格護内ニ可仕由被 仰聞候ニ付、委細承知仕候、此段ハ私より奉願儀者不罷成事ニ候處ニ、不存寄儀被附御氣ヲ御願被仰上被下候段、冥加不淺仕合、別而難有次第ニ奉存候旨、御禮申上候、

明十八日四ツ時分、被仰渡御用之儀有之候間、麻上下御着用ニ而御登 城可被成候、以上、

五月十七日

嶋津内記

島津兵庫殿

十八日
一御用候間田之浦江可参旨、伊東五次右衛門より御假屋

へ被申越候故、罷出候処、五次右衛門ニ而被 仰渡候

ハ、内記殿より昨日御手紙ニ而御承被成候、右御手紙ニ付、今日御

登城被成、内記殿より御直ニ御承被成候御書付拜見可仕由ニ而拜見可仕由ニ而

写

嶋津兵庫殿

右者、家来新納仲右衛門御太刀進上仕 御目見被仰付事候、兵庫殿儀候ニ付而、御太刀進上仕 御目見仕候者、今老人可被仰付候間、相しらへ可被申出候、以上、

五月

内記

拜見被仰付、右之通ニ被仰渡候、役人中何れ茂同前之

儀ニハ候得共、前方より御太刀進上仕 御目見仕来候
家筋ニ而無之候へハ、御書出被成儀難被成候、弥五左
衛門家之儀へ、御三代様江於加治木御太刀御太刀進
上仕 御目見仕来候家筋ニ而候間、此節弥五左衛門儀
被仰付筋ニ御書出被成候間、此旨承知可仕候、此段ハ
今日五次右衛門替合加治木江罷帰候間、役人中江も五
次右衛門ニ被仰聞候旨被仰渡候、
十八日
一夫より奥ニ被召寄、兵庫様御意候へ、委細為承ニ而
可有之候、御太刀進上之儀を如何と被 思召候處、思
召候ニ被(後欠)

〇二五八 手鑑収載文書作者略伝(卷子)

足利尊氏將軍御判物

山城国住人

小枝三郎敦康申状

久輝者安藝守久雄ノ子也、延宝二甲寅ヨリ寶永七庚寅
正月迄勤職三十七年、

光久公・綱貴公・吉貴公迄御三代相勤、

光久公御家老

永吉五代目

嶋津中務久輝

初又七郎 久英

佐土原之城主嶋津右馬頭久雄後夫人

興正院殿、後廣照院ト号ス、

右、実者永吉領主嶋津中務久茂女ニ而、

光久公為御養女、明曆三酉年往江都嫁于久雄、

宝永五年子五月卒去、以歌道名高シ、

嶋津右馬頭久雄後婦人、光久公為御養女、明曆三酉往江
江府嫁于久雄、實者島津中務久茂女、宝永五子五月卒去、

廣照院殿 初興正院

家久公御家老

川上式部太輔久国

後因幡守

入道商山

久国者初源三郎、左近将監、式部太輔、後因幡守、

寛永七庚午年より慶安二丑年迄在職十五年、

幼少より諸所之軍勢ニ勞シ、武功多難記候、

川上久国、初源三郎、式部大輔、後因幡守ト云、朝鮮其

外諸所之軍勢ニ勞し、後 家久公閣老たり、武功餘多故

詳ニ述かたし、

光久公御家老

諏訪平右衛門兼利

初兼清

兼利ノ傳

諏訪平右衛門兼利、初兼清ト云、和歌を岡元宗好ニ学ひ、後鈴木正三を師とし、禅学を修ス、声名あり、年拾一歳ニして

慈眼公ニ家久公御事仕へ、御小姓たり、後ニ物奉行、大坂蔵

奉行、吟味役、御使役を歴て、慶安二

泰清公綱久公御事の御守役ニ選れ、妻子を携へ江戸ニ往キ、

公の左右ニ仕へテ細大ノ事ヲ謀り、且歌學の御相手を勤

む、明曆四御守役を辞ス、寛文二十一月旅御家老今之若年寄を

拜し、穎娃地頭を領す、同三請テ職ヲ致ス、同六十月十

二日疾ひ漸く快き旨

聞召れ、御用日又者議すへき事のある時、評定所ニ出て

申談せよとの命あり、同二月十六日御家老ニ陞り、谷

山地頭を授らる、時年五十八、能其任ニ稱あはへり、同十一

年吐血の疾を患ひ、仕を致ス、延寶七隠居、六十六、荒

田翁、又老甕子夢現叟庵拂土など云ふ、同八三月法橋山

本春止ノ需によて、年來詠スル所ニ、裏松宰相資清卿・

河野大納言、或飛鳥井、或中院等の點シ給ふ和歌一萬首

を洛陽新玉津嶋明神御社内ニ奉納ス、貞享四丁卯六月十

日、七十四年、兼利著す員外千首和歌集、家ニ藏ム、

義久公御家老

町田出羽守久倍 入道存松

諏訪兼利、初兼清ト云、和歌を岡元宗好ニ学ひ、後鈴木

正三を師とし禅学を修ス、声名あり、年十一歳より

慈眼公ニ仕へ御小姓たり、後物奉行、大坂藏奉行、吟味

役、御使役を歴て、慶安二 泰清公の御守役に選れ、妻

子を携へ江戸ニ往キ、公の左右ニ仕へて細大の事を謀

り、且歌學の御相手を勤む、明曆四御守役を辞ス、寛文

二十一月旅御家老を拜し、同三請て職を致す、同六疾ひ

漸ク快キ旨 聞召れ、御用日又者議スヘキ事ある時、評

定所ニ出テ申談せよとの命あり、同七御家老ニ陞り、谷

山地頭を授らる、時年五十八、能其任ニ稱^ホへり、同十一

吐血の疾を患ひ、仕ヘヲ致ス、延寶七隱居、六十六、荒

田翁、又老蜺子夢現叟庵佛子なという、同八三月、法橋

山本春止の需ニよて、年来詠スル所に、裏松宰相資清卿

・阿野大納言、或飛鳥井、或中院等の點シ給ふ和歌一万

首を洛陽新玉津島明神の社内ニ奉納ス、貞享四六月、七

十四卒ス、兼利著ス員外千首和歌集、家ニ藏む、

文録之初より慶長五庚子年迄在職也、

嶋津久慶、日置四代目ニ而、諸所之軍勞有り、家久公國
老たりといへとも、死後ニ至り、依詛而世代をケツラル、

光久公・綱貴公・吉貴御三代之御家老

伴兵衛尉兼屋男 肝付主殿久兼入道活堂

初彈正兼方ト云

右活堂 家久公御外孫之故をもて、久之字を賜ひ、久
兼と改む、武田の兵學を新納又左衛門久了ニ皆傳ス、

寛文六年七月十二日評定所詰衆、同七閏二月十四日大
目附、同九年三月廿二日御談合役、同十八月廿四日御

家老、同十月十六日家督、同十一月末吉地頭、寶永四

正月十六日中風を患ひ退役、同六月八日剃髮シ、名を

活堂ト更む、同六丑二月八日病死、在職四十年、

肝付活堂者 慈眼公御外孫の故をもて、久之字を賜ひ、久兼と改む、武田の兵学を新納又左衛門久了ニ皆傳ス、寛文六七月評定所詰衆、同七閏二月大御目付、同九御談合役、同十御家老ニ而諸所之地頭を賜、寶永四中風を患ひ退役、剃髮、活堂ト更む、同六卒、世々高名なり、

光久公御家老

島津圖書頭久通

久通者、宮之城領主嶋津圖書家四代下野守久元之子也、正保二年より御家老を拜し、金山の事を兼領ス、又本藩ニ而紙を漉、或諸士高役ニ杉を栽る事ヲ久通より始るといふ、亦 (島津綱久) 泰清公の論を承り征韓録ヲ編修す、又嶋津世禄記等を著ハす、世ニ髭圖書ト呼ぶ、寛文十二仕を致し、延寶二甲寅十二月晦日、年七十二卒、澁水院徳源通智大居士、側ニ石碑を建功業ヲ記ス、林春斎信篤其文ヲ撰ス、
圖書頭久通者下野守久元の子也、正保二御家老ヲ拜シ、金山の事を兼領ス、亦本藩ニ而帑を漉、或諸士高役ニ杉

を栽る事、久通より始るといふ、又 泰清公の論を承り征韓録ヲ編修シ、又嶋津世禄記等ヲ著ス、世ニ髭圖書ト呼ぶ、寛文十二仕を致し、延寶二亥年、七十二卒、石碑ヲ建功業ヲ記ス、林春斎信篤其文ヲ撰ス、

家久公御家老

嶋津下野守久元

初新納新八郎

久元者圖書頭忠長之二男ニ而、新納家為養子、雖然兄河内守久倍早世故、本家ニ帰り家督、元和より寛永廿年迄御家老十四年、幼少より朝鮮其外諸所之軍勢ニ勞し、武功有り、

嶋津久元者宮之城四代目ニ而、初新納新八郎と云、兄河内守早世故本家ニ帰ル、朝鮮其外諸所之軍功、世の知る所なれハ畧ス、 家久公國老ト成、慶長廿癸未年卒、関ヶ原ニも従軍し、嶋原の役ニ豊後守久賀ト大将たり、

光久公御家老

嶋津市正忠廣入道萬山

萬山者 家久公御五男也、嶋津豊後守久賀母養ひ公妾

御辱 為久賀之弟、延宝五丁巳三月十四日去豊州家地

準シ 家久公御三男家、一家ヲ建ラル、是則嶋津助之

丞家之元祖也、 光久公之命ニヨツテ家ヲ立ル、寛文

七丁未ヨリ延宝七丁未迄御家老在職十三年、元和六庚

申十二月生、元禄十六未八月三日死去、年八十四歳、

光久公
御家老嶋津市正忠廣入道萬山

実者 家久公御子ニ而、準御三男初被召建、

嶋津助之丞家元祖也、

新納又左衛門久了者、小畑勘兵衛尉景憲を師とし、軍學

を受、本藩甲州流之開祖也、後其高弟杉山八藏公憲を師

友とす、公憲遂ニ無悔道の三字を傳授して、軍學傳流三

世の證たらしむ、亦犬追物の道ニ長シ、正保四年王子村

台覽の時、検見役たり、又宗真か艸隸を善ス、天和中清

ノ翰林院檢討舟次琉球ニ使スルノ日、觀テ甚贊美スト云、

初寛永六年、十一歳ニ而父ニ従ひ江戸ニ如キ、島津家久

ニ奉仕せしより 島津綱實 大玄公の時ニ歴事シ、寛文三 島津光久 寛陽公

の國老となり、御物座を下知シ、琉球及吳國方の事ニ預

參せられ、兼而諸所之地頭を拝領シ、元禄八乙亥三月五

日、七十七、請テ仕ヲ致ス、凡在職三十三年、是年四月

歿ス、杉山公憲計ヲ聞テ哀惜シ、佛工ニ命シ久了の像を

彫造シ、畧傳ヲ為りて子孫ニ贈、又詩ヲ作、歌ヲヨミ、

哭スルモノ多、

御四代御家老

忠昌公 忠治公 忠隆公 勝久公

肝付

本田因幡守兼親

肝付越前守兼演

伊地知縫殿介重周

桑波田讚岐守景元

久了傳

新納又左衛門久了、初豊三郎、弥七郎、又実名久正・久

仁ト云、

小畑勘兵衛景憲を師とし、軍學を受、本藩甲州流之開祖

也、後其高弟杉山八藏公憲を師友とす、公憲遂ニ無悔道

之三字を傳授シテ、軍學傳統三世の證タラシム、又大追

物の道ニ長し、正保四年王子村 台覽之時檢見の役タリ、

亦宗真か艸隸ヲ善ス、天和中清ノ翰林院檢討舟次琉球ニ

使スルノ日、觀テ甚贊美スト云、初め寛永六年、十一歳

ニ而父ニ従ひ江戸ニ如キ、

慈眼公ニ奉仕せしより 大玄公の時ニ歷事シ、寛文三

寛(陽公カ)の御家老トナリ預參せられ、兼而大口・高岡等之

地頭を轉領シ、元禄八乙亥三月五日、七十七、請テ仕ヲ

致ス、凡ソ職ニ居ル事三十三年、是年四月三日歿す、倍

声軒無悔道龍居士、同月下旬杉山公憲訃ヲ聞テ哀惜シ、

佛工ニ命シ久了ノ像ヲ彫造シ、畧傳ヲ為りて子孫に贈れ

れり、又詩を作り、歌をよみ、哭スルもの多三すムニ抄

載ス、

家久公御家老

山田民部少輔有栄

入道昌慶

北郷佐渡守久賀連名ニ候得共、執筆有栄也、

嶋津助之丞家二代目之人也、葉丸如睡ニ示現流を学、

天和二壬戌より寶永二乙酉迄御三代御家老、在職二十

六年、寶永四亥十二月死去、此一通者葉丸如睡死去ニ

付悔之状、

光久公御家老吉貴公御代迄

萬山子

嶋津大學忠守後助之丞

入道爰云

又慶雲共

家久公御家老

伊勢兵部少輔貞昌

貞昌者 惟新公御家老有川雅樂介貞世入道任世二男也、

家兄平左衛門尉貞成茂同公之御家老と成、貞昌者初弥九

郎ト云、伊勢與三郎貞興後嗣トなれり、天正九年八月、

年十二歳ニ而始而 松齡公水俣の役ニ従軍し、同十四年

豊後の大友を攻給ふ、時十七ニ而御敵を撃、御感ニ遇ひ、
同十五年 太閤西征ニ而下向之折軍功、其外軍勞餘多ニ
而、(島津義弘)松齡公(島津久保)一唯公(島津家久)慈眼公(島津光久)寛陽公ニ奉仕、寛永ノ
十八年辛巳四月江戸ニ卒、七十二、

伊勢貞昌天正九、十二歳ニ而始而、 惟新公水俣の役ニ
従軍シ、小田原の役従軍、十六騎の其一なり、夫より朝
鮮等諸所之軍勢ニ勞し、 家久公國老となり、屢江都ニ
勤勞ス、其功難述、寛永十八辛巳江戸ニ卒、年七十二、

光久公より吉貴公迄
御三代御家老

種子嶋藏人久時、(種)隠居山柄

光久公御家老、後御城代

北郷佐渡守久加

右久加者、北郷左衛門尉久時入道一雲之三男、北郷加
賀守三久之男ニ而、平佐領主家二代目之人也、慶長九
年ニ生、寛永廿年癸未より明暦二丙申迄御家老、寛文
六年八月ヨリ御城代、寛永十六卯十一月より旅御家老

トナル、延宝八申八月晦日死去、年七十九、在職三十
八年也、

國老川上因幡守久国・嶋津弾正太弼久慶之連名候得共、
久加之執筆欵、

喜入撰津守忠續 初忠政

道澄親王御門人ニ而書を善す、慶長五関ヶ原ニ従軍ス、
元和四(島津家久)慈眼公御家老職、寛永十職を致ス、同十五肥

州島原の役御談合衆にて参陣、于時年六十八、正保二
乙酉三月十八日、七十五卒、

阿蘇玄與 俗名新九郎惟永

阿蘇之宮神主ニ而、細川幽斎杯入魂、歌道を嗜、
(島津義久)龍伯公御代被召拘(抱)御側近ク被召仕人ニ候、

阿蘇玄與者俗名新九郎惟永と云、歌道を嗜、細川幽斎
杯と入魂之人ニ而、

龍伯公御代被召拘、世ニ高名故、詳ニ不記之、

伊地知助右衛門重張 初勝八郎 重英

寶曆八年、廿五歳ニ而御文書并御記録奉行、貞享三

内遺レル古書を觀せられし時、河野六兵衛通古ト重

英ニ命シ、是か□伴トナシ、古書を大乘院ニ聚て、

屢故事を論せしむ、時ニ重英三十一、宗淳特ニ其博

識ヲ奇賞ス、後ニ御重書改之命を奉し、徳之島ニ渡

り、

元禄十五年壬午九年四十七ニ而彼島ニ病死、

吉 貴 公 御 代

元禄十五年壬午九年四十七ニ而彼島ニ病死、

土岐次右衛門家二代

土岐半助頼代入道宗林

寛永十年誕生、郡奉行相勤、宗真流之銘筆也、

寛永之比連歌師

八文字屋

宗順

平田民部左衛門宗弘、出家號可竹、

初平六 宗恒 喜角共

大玄公 信州公ニ 祖父宗直・父宗門共ニ日置流射術を東郷重高ニ受

く、宗弘も射術を父ニ受、甲州之軍学を新納久了

ニ學ひ、竝ひニ上達ス、世の知ル所也、亦書を善

シ、和歌を詠す、旁また墨画ニ及ぶ、仕て吟味役

と成、年四十ニシテ潮音院ニ而發心、自ら出家し、

名を可竹ト改む、又幽谷ト號ス、寶永四月廿一

日隱居ス、時ニ四十五、後ニ甫仙和尚弟子と為り、

庵を吉野實方大鞍橋の邊に結び、可竹庵と號ス、

又曾於郡の僧尋亮と善ク俱共ニ企て、四国遍歴の

修行を為せり、享保十三戌申八月朔日六十四歳卒、

木村村右衛門時経 初時員 静隠ト號、

狩野探信ニ画を学、享保廿年上京、閏三月六日 近衛

関白宗熙公長石御好ニ而、大貳ト賜、法橋ニ叙ス、同

十日、門弟押川元春・能勢探龍召列れ、 近衛殿下ニ

席画ス、後ニ雪舟流を学、自ら得る事あり、画名黔羸

・木邨々・斗山・大貳法橋・探元斎・守廣・三晝庵・

静隠・啜茶翁・斗山玄鳳・李膽鱗照・廣瑞居士・在家

僧静隠などあり、又茶事を好、和歌を嗜む、明和四年

十亥二月初三日、浄法堂法輪庵主寿八十九歳、

中西秀長、初弥兵衛と云、能の上手ニ而、慶長之頃虎屋

氏を称ス、禁裏ニ参内シ、正六位ニ敘ス、近衛家より

牡丹紋を賜、従家久公千石をもて拘らる、寛永之初小

幡ト改、又中西ト称ス、慶安三八月卒、

御家御官位等之節、女房奉書此人より初ルト云、

家久公御代

中西長門守秀長

秀長者初弥兵衛と云、能の上手、慶長之比虎屋氏を称

ス、禁裏ニ参内シ、正六位ニ敘ス、近衛家より牡丹

紋を賜、従家久公禄千石をもて拘らる、寛永初の比小

幡ト改、又中西ト称ス、慶長三年八月十一日卒、

屋久嶋安房村本佛寺開山如竹上人、養善院日章と云、大

龍文之和尚ニ就テ宋儒の学を受る事、凡八年、藤堂候ニ

聘用せられ、性直にして屢諫言ス、後ニ

(島津先久)
寛陽公の召ニよて鹿兒嶋ニ帰ル、明暦元乙未屋久嶋安房

村ニ卒、此島平木を取る事如竹より始ルト云、高名世の
しる所なれハ畧ス、

福屋伊賀兼昭、初國分組代官被仰付、後御右筆相勤、正

保四年江戸王子原犬追物之節執筆任、相勤、射手同前ニ

公方様江戸御目見被仰付候事、

〇二五九 三条公修・飛鳥井雅光和歌

(本文書ハ省略ス)

〇二六〇 島津久長和歌

(本文書ハ省略ス)

〇二六一 島津久季和歌

(本文書ハ省略ス)

〇二六二 鎮西下知状写

(本文書ハ一八七号ト同文ニツキ省略ス)

昆布 一折

干鯛 一折

御樽 一荷

以上

〇二六三 森孫三郎書状

一昨日者寛々得貴慮、毎度御馳走被仰付、忝次第奉存候、

倍御安全可被遊御座珍重奉存候、然者其刻被仰付候西三

条殿之義、別紙書付掛御目申候、實隆卿御事者、時代も

能、世上ニ名之高キ御方ニ御座候由承申候、貫隆卿と申

候ハ、西三条家之代々之系圖ニ者相見之不申候、定而實

隆卿之義ニ而可有御座と奉存候、心事近来期拜顔之可申

上候条、以麁筆如此御座候、頓首、

曾木矢五郎
隆員

〇二六五 進藤筑後守添状

(包紙ウハ書)

「前関白公御筆色紙ニ進藤

筑後守殿添状

」

依 基熙公御筆之物願望、此度色紙一枚、郭公之和歌被

染御筆被下候条、可有収納候、為其如此候也、謹言、

進藤筑後守

仲夏十六(真)黃

長(花押)

有幸右衛門様

實下

森孫三郎

曾木新左衛門殿

〇二六四 曾木隆員進上目録

進上

〇二六六 今大路治部少輔達

(包紙ウハ書)

「蓮光院御方 今大路治部少輔」

容候、頃日從東武致上京、為御禮如斯候、恐惶謹言、

今大路兵部大輔

六月十五日

光(花押)

先日曾木新左衛門被相願候色帟、左大臣殿御染筆候間、
從貴院可有傳達之旨候也、

曾木新左衛門様

今大路治部少輔

(花押)

仲夏十一鳥
蓮光院御方

〇二六八 曾木実真進上目錄並添狀

1 曾木実真進上目錄

進上

御太刀

一腰

御馬

一疋

以上

島津兵庫殿家来

曾木五兵衛

實眞

〇二六七 今大路光好書狀

(包紙ウハ書)

「曾木新左衛門様
御報

(墨引)

今大路兵部大輔

光好

先頃 御家門へ祇候、前殿下御移徒、^(徒)右府御轉任之御慶
賀之御使御勤之由、其節御目錄之通被懸御心頭、辱令受

2 毛利権右衛門・鎌田休兵衛連署添狀

此表 御納戸藏

(割印)
一御太刀 沓腰

(割印)
一錢沓貫文

銀ニシテ拾三匁

御馬代

右者、今日初而之御目見被仰付、御礼進上有之、表

御用人座巳五月十五日引付を以上納也、

巳七月廿日

藏役人
鎌田休兵衛(印)

毛利權右衛門

〇二六九 某書狀

(ウハ書)

「(墨引)」

貢様

李之介」

二白、今日御支共ニ御座候、明日八ツ後ニても御待申上候、以上、

此節御出府之由、御家内被為揃御無事候半、珍重存候、

昨日者御土産物送給、忝申謝候、今日者脇方江差越候付、

御支をも候ハ、今夕方より御出ニ成間敷や、些と内用向

も段々有之ニ付、御面上ニ萬端可申述候、御礼旁為可申

入如斯御座候、以上、

九月十五日

〇二七〇 蓮光院書狀

(ウハ書)

「曾木新左衛門様 蓮光院」

猶々、進藤筑後守殿より之御添狀、今明日御法事故、

御取込ニ而調兼申候、乍然何とぞ肝煎進可申候、以

上、

一筆致啓上候、先以此度

近衛様御方江兵庫殿より之御使ニ御登被成候処、首尾好

御勤被成、珍重奉存候、明日ハ天氣能可為御發駕と存候、

依之為御餞別石山三位殿御染筆之富士之繪一枚・紙文匣

一・求肥三箱、乍輕少致進覽之候、猶明日可得御意候、

恐惶謹言、

五月十五日

頼英（花押）

〇二七二 蓮光院書狀

（包紙ウハ書）

「（墨引）」

曾木新左衛門様

蓮光院

〇二七一 蓮光院書狀

（ウハ書）

「（墨引）」

曾木新左衛門様

蓮光院

追啓、御自分御系圖之写可被指上由

前閱白公御意ニ御座候間、御逗留中ニ御写被成候而、拙僧方迄被指越候ハ、上置可申候、且亦、此中拙者へ御見せ被成候御系圖之写、今日入 御覽候、書狀之写も式通共ニ被遊 御覽候、委細之儀ハ面上ニ可申述候、以上、

蓮光院

卯月廿六日

曾木新左衛門殿

〇二七三 菱刈実祐書狀

（包紙ウハ書）

「（墨引）」

曾木貢様

菱刈大炊

尚々、今日者夜ニ懸ケ相仕廻申候而、書狀とも持参可仕候、何とそ明日可被成存申候、今日者いまた不得御意候、弥御仕舞被成候半と奉存候、乍然此方より一首尾仕候儀とも、いまた相仕廻不申候、昨日も 御殿へ罷出、夜更罷帰候、今日ハ御用之義ニ付、進藤刑部殿追付此方へ見廻之筈御座候、何とそ今日中ニ仕廻、兵庫殿御用相達可申候、

一御頼之色紙出来、三ツ式通・御寄合書十三枚持せ申候、尚御暇乞ニ罷出、可得御意候、以上、

五月十五日

一筆令啓達候、弥御無異珍重存候、然者致出立候砌者、
為御餞別品々被懸御意忝存候、拙者も去月十九日致出
府候ニ付、為御禮申達候、恐惶謹言、

麥刈大炊

實祐(花押)

三月八日

曾木貢様

〇二七四 川上市右衛門書状

(ウハ書)

「(墨引)

曾木貢殿

川上市右衛門

明和三年

大御隠様大口筋

御参勤、御屋鋪へ被為入候節

御目見、又者進上等之儀、御家譜江委ク相知レ居筈と存

候間、御書写明日御差出可被成候、来春

御参勤ニ付諸手當向書出候様、御側御用人衆より被仰渡

候処、一卷帳無之、先例難申出候ニ付、此旨申進候、

十月十一日

〇二七五 島津内記達写

写

縁與願

麥刈藤馬

右者、島津兵庫殿家来曾木五兵衛妻藤馬妹ニ而、右之腹
女子致出生候ニ付、幼少之節より娘分ニ而内々召置候間、
此節養娘ニ被仰付、福崎五郎左衛門へ縁与御免被下度旨
被申出、願之通被仰付候、

(島津)
内記

八月

〇二七六 島津主殿達写

写

郷田安左衛門

郷原金太夫

山沢十太夫

壯之助殿家来(重富島津家領主)

別府市郎左衛門

中村助左衛門

肥後運右衛門

善次郎殿家来(加治木島津家領主)

新納仲左衛門

曾木五兵衛

玄蕃殿家来(垂水島津家領主)

川上六郎兵衛

町田助兵衛

右七人者、代々御目見被仰付候付、其身夫婦并嫡子夫婦迄者、手札之帳面年付被成御免候、二男よりハ、先格之通帳面ニハ年付可相記候、且又壯之助殿家来へ先達而被仰渡置候通、右七人之者共より諸士へ縁與仕候儀、惣而

御城下土同前被成御免候、家来之娘、鹿兒島士・外城衆中江致縁與妻札申受候者ハ、妻親之名、人家来等之訳、手札帳面共書記候御法候得共、右肩書之儀茂御免被成候、

右之通御申付候様ニ壯之助殿・善次郎殿・玄蕃殿江可相達旨申渡、可承御役々へも可申聞候、以上、(島津)主殿

八月

〇二七七 蓮光院書状

(ウハ書)

「(墨引)

曾木新左衛門様

蓮光院」

今日昼時分御殿へ進申候、

一此中御頼被成候色紙之内三ツ巻通、葉室大納言殿御染筆被成候而被遣候間為持申候、別而御能書之儀ニ御座候間、御秘藏可被成候、且又右之御禮として御着ニも御菓子成共、御自分よりとして大納言殿江進上可申候間、左様ニ御心得可被成候、其外色紙出来次第被遊候、公家衆へ、御着・御菓子之間、輕キ方一種見合候而御禮進上可申候間、是又左様御心得可被成候、何様下へ移申候而可得御意候、取込早々申入候、

以上、

五月八日

○二七八 菱刈実祐書状

(包紙ウハ書)

「(墨引)」

曾木五兵衛様

菱刈孫兵衛

御状致披見候、弥御無異珍重存候、然者署中為御尋預示、殊珍敷役者繪并番付□^(被)下給、遠境被掛御心頭忝存候、右御挨拶旁申述候、恐々謹言、

七月十一日

菱刈孫兵衛

實祐(花押)

曾木五兵衛様

右者、寶曆十一年巳八月廿一日、於 御城

御当代様江

御目見被仰付候付、此節加治木屋敷江 御入ニ付而ハ、

元禄九年子正月廿六日、加治木屋敷江 御入之節、曾祖

父曾木弥五左衛門・祖父曾木五兵衛、御太刀進上仕 御

目見被仰付候例を以 御目見奉願候、右以前

浄國院様江 御目見被仰付候儀無御座候得共、五兵衛覚

書、尤加治木家跡役所帳留等ニ茂、初而之文字相見得不

申候、以上、

加治木役人

川上慶左衛門

十二月六日

右同

日野五郎右衛門

御記録所

右、杉尾次助被差出候、

○二七九 日野五郎右衛門・川上慶左衛門連

署届書

曾木五兵衛

○二八〇 新納仲左衛門書状

尚々、明日此方御座掛ニ逢候様、日野氏へ被成御

相談度候、不相調候へハ無是非候、以上、

態与致啓上候、弥御堅固被成御座、珍重奉存候、然ハ此節貴様

御目見願之御書物、最早御座江被差出候哉、今日相良弥一兵衛様より承候ハ、私願書ハ明日之間ニ此面様へ被仰上筈之由承候付、曾木五兵衛儀も私同様之願彼所へ相附申出筈候、近日役人中より相同申筈与相考候由申上候ハ、左候ハ、私願書此面様江被差上候儀ハ、御差扣可被成候、五兵衛願差出候節、一所ニ御申可被成候間、早々差出候様今日可申越旨、致承知候、依之態与飛脚差越筈候處、竹下幸左衛門殿御用付被罷歸候間、御座江茂申越候、最早先達而被差上置たる筈とハ存候へ共、此段申越候間、日野氏御相談被成、早々此方へ被差越候様有之度存申候、此段為可得御意、如斯御座候、以上、

新納仲左衛門

十月廿九日

曾木五兵衛様

〇二八一 喜入久甫書状

一筆令啓候、根占八郎右衛門殿家中自分ニ差引ニ付而、被 仰出旨共有之候、依之從御老中其段可申渡由、任御下知、書付別紙いたし差遣候、恐々謹言、

喜入次兵衛

五月五日

久甫(花押)

曾木新左衛門殿

〇二八二 喜入久甫達

(包紙ウハ書)

一(墨引)

喜入次兵衛

久甫

曾木新左衛門殿

」

根占八郎右衛門儀、最早年生ニ被罷成候間、家中之差引等被致自分ニ可然候、左候而一分之不及思慮儀、若於有之者曾木新左衛門へ致相談可然之旨被 仰出候条、若八郎左衛門殿方より被尋儀共候ハ、相談いたすへき旨、御

老中任御下知如斯候、以上、

亥四月十八日
取次
喜入次兵衛

〇二八三 島津内匠口上覚

1 島津内匠口上覚
口上覚

拙者家来曾木五兵衛事隠居、嫡子曾木弥五左衛門江家督

申付候間、以御序御太刀進上仕

御目見被仰付被下度奉願候、此旨宜御申頼存候、以上、

八月廿九日

島津内匠

2 島津豊後達

(ハリ紙)

願之通、御太刀進上ニ而、来ル廿五日

御目見被仰付候、

十二月

豊後

〇二八四 曾木重知書状

(包紙ウハ書)

江戸より

(墨引)

曾木新左衛門

かち木ニテ

新納仲左衛門様

重知

日野内膳様

猶々、内膳殿より八月廿九日之御状相届候、金山今程

ハ明申ましく候と又聞候也、左様ニ御心得有へく候、

此比老山三郎兵衛可被参問、其元御左右相待申計候、

已上、

幸便候条一書令啓上候、其元御無事ニ御座候へん、爰元

無別条候、又三郎様へ若君様被為出来、兵庫様御弓之

御役ニテ、昨日七夜之御祝首尾能被仰上候、然者其元面

々御姫様・又八郎殿へ御給候や、今度阿多勘解由殿ニテ

被仰越候、此禮として宮内助兵衛被相下候筈ニ御座候、

爰元来ル五日ニ可罷立筈ニ御座候間、其節細々可申合候、

先急便故、書大方ニ御座候、御替り物音此比かつて無之候、恐惶謹言、

曾木新左衛門尉

後十月朔日

重知(花押)

日野内膳様

新納仲左様人々御中
まいる

〇二八五 某覚書

覚留

一加治木諸士之儀者、御當家様御代々無別心御奉公為仕者之儀御座候、

貴久公 義久公 義弘公九州御退治之節茂、不離御幕

下多年尽粉骨、高名戦死仕候者之子孫共茂御座候、

一相州小田原御陣ニ者 久保公、高麗御滞陣ニハ 義弘

公 久保公 忠恒公御渡海、濃州関ヶ原御取合ニ者

義弘公御發向、右方々江御供仕、不離御側勵戦功、尽

粉骨戦死仕候者茂御座候、且又御逝去之節殉死仕候者

茂御座候、

一元龜三年五月四日、飯野於木崎原、伊東家与御取合之節、戦死高名仕候者共茂餘多御座候、

一義弘公御家老職 家久公御代迄、御用人・地頭職・諸

奉行役相勤候者茂御座候、且亦 御感状・御書杯頂戴

仕居候者共茂御座候、右之次第ハ、御記録所江茂相知

可有之哉与存申候、

一加治木士之儀者、 義弘公 家久公加治木江被成御座

候故、外城衆中ニ者相替、鹿尾嶋土同前ニ被召仕候、

然処ニ、先年從 家久公、加治木諸士持留之知行、此

方高之内ニ被召加候、右之通、加治木諸士之儀者段々

由緒御座候ニ付、前々より御昵近并ニ被仰付候儀共御

座候、

一加治木諸士被召附候以後、寛永年中、御分国中御引并

御檢地之節、加治木より竿奉行相勤、諸所江罷越候儀

茂御座候、且亦 光久公御在江戸之時分、御大名様方

御振廻之節、御小性衆不足ニ而、此方小性役御配膳被

仰付、同前ニ相勤申候、 光久公御上洛之節、加治木

士之内御供被仰付、相勤候儀茂御座候、

一加治本土之儀、吉野御関狩御馬追ニハ、以前より騎馬

串目下知被仰付、今以相勸申候、

一御上下之節、又者加治木江

御光儀之節者、以前より御中途境目迄御先御供、今以被仰付候、此儀茂餘家中ニ而ハ不被仰付事之由ニ御座候、

以上

九月十八日

(裏書)

享保九年辰十月廿五日ニ出候御口上書ニ添書

〇二八六 新納仲之進達

金子百疋

曾木新之助

右者、今般英艦渡来戦争之節、鹿兒嶋江談合役ニ而早速

駆付、旁致太儀候付、右之通拜領被仰付候、

亥八月

(新納) 仲之進

〇二八七 曾木新左衛門書状

昨二日ニ市正様、從御前直ニ此方假屋ニ被成御出候様子ハ、曾木弥五左衛門儀、新左衛門与名替り可被仰付之旨、中將様御意之由ニ而、兵庫様江御承被成、則御免新左衛門与名替り被仰付候、先以重疊難有仕合無此上候、此等之通、かゝさま・はきさま宿元へ細く可被申達候、此手紙池上九郎殿へ可被持せ候、左候ハ、細く可被為見候、次ニ新納忠左衛門殿へ状一通、八代次左衛門殿へ手紙一ツ、上野八右衛門殿へ手紙一ツ、則可被持せ候、以上、

正月三日

追而申候、明後五日ニ可罷帰候、

(墨引)

かこ嶋より

曾木新左衛門

齋藤坊 まいる

〇二八八 蓮光院書狀

昨日者預御見廻忝存候、併早々之御仕合、何之風情も無之候、

一明日ハ天氣能御使者御勤可被成与目出度存候、相應之御用等御座候ハ、可被仰聞候、随而目錄二通納（後欠）

（切封上書）

（墨引）

曾木新左衛門様

蓮光院

〇二八九 札改奉行所証文写

證文写

新納仲左衛門

曾木五兵衛

親 親

右、仲左衛門・五兵衛事、代々御目見被仰付候付、其身夫婦并嫡子夫婦迄、手札之帳面年附被成御免候旨、先頃被仰渡候付、右兩人親共迄ハ手札之帳面年附御免被成候条、此證文を以帳内年付可相除候、以上、

元文二年巳九月十三日

札改奉行所印

加治木

役人中

〇二九〇 曾木新左衛門書狀

（端裏書）

「午

二月十二日

曾木新左衛門口上書

使

別府久左衛門」

覚

先年愚息翁介、御免を以川上五兵衛様養生被仰付、當春召移申候、養父小身ニ御座候間、買地をも仕高相付、乍恐急度

太守様御耳ニも達申度候へとも難調、近比難申上儀ニ候、乍去御取立被成候与被思召、我等持高之内貳百石翁介へ被相付被下候へかし、左様ニ御座候ハ、爰元ハ次第ニ買地仕、本高ニ可罷成候御高減少ニ成事ニ候、殊ニ我等

ハ加治木ニ而高かさニ而候處ニ、御自分より高五拾石之
加増御高恩ニ存候、御無心かましき儀申かね候へ共、
武庫様御心ニ被入被下候へハ、公儀之外聞不過之候、成
合申儀候ハ、御吟味被成、御申被成候而可給候、已上、
巳

十二月廿四日

曾木新左衛門

新納仲左衛門殿

〇二九一 曾木新左衛門日帳抜書

(本文書ハ一九二号文書ト同文ニツキ省略ス)

〇二九二 島津久季口上覚

口上覚 留

某家之儀者、元和五年祖父又八郎四歳ニ而 (忠節)
中納言様被 (島津家久)

召列致上洛、於伏見

秀忠公江 御目見仕、夫より江戸江參、其節島津下野殿

被召附、江戸於御城從

秀忠公貞宗之御腰物拜領、其後上使土井大炊助様を以御

暇被成下、直々御馬・金銀・時服拜領、從

家光公来國光之御脇指・金銀・時服拜領仕、喜入撰津守
殿被召附致下着候、依之御取分有之、宗門手札御改之節、
末子迄手札御免ニ而候、且亦加治木士共、手札并帳面ニ
茂年附無御座候處ニ、去ル巳年宗門御改之節、某二男よ
り手札被仰付、士共帳面年附被仰付候、依之巳年御改之
節、一通り御訴申上候処ニ御免無之候故、去ル丑之年、
已前之通被仰付被下度旨奉訴候得共、御格を被究候故御
免難被成旨被仰渡候、最早末子より手札被仰付候儀ハ其
通畏入候、士共之儀ニ付而ハ奉訴度存念御座候、祖父又
八郎代 惟新様被召仕候御直士、給地高共ニ此方家ニ直
ニ被召附候節、伊勢兵部少輔殿・下野守殿判印之書付茂
有之、三度ニ御直士都合三百七十人餘被差分、給地高七
千六百石余被附下候、右者共之由緒、委細別紙ニ相記差
出申候、右之通、 惟新様御側ニ被召仕、外様ニ被召仕
候者共茂、方々之戰場ニ御供仕、尽粉骨候人数、直ニ被
召附給地高茂今以家々ニ持来、且亦、去ル子之年札御改
之節、諸家中御法違之女召仕出生之子ハ母方江被召附候
上、兩親江科錢被仰付候得共、加治木士之儀者、右訳を

以御断申上候処、子共父方江被下、親共江科錢之儀茂、御直士同前御免被成候、右之次第ニ而、外之家中士与ハ相替、帳面年附茂無御座候処、近年年附被仰付候付而、筋目慥成者共之子孫故、別而歎申事御座候、然者数年由緒之訳御立置、餘家中与ハ御取分爲被下者共之儀ニ御座候得ハ、不成私子細御座候条、何とそ以前之通被仰付被下度奉願候、右之通、先祖以来無紛筋目ニ御座候処ニ、至私代以前之格式茂相消候儀、面々之存念茂違可申哉与、是又別而氣之毒存申候、代々附来候者共ニ而、他家より召抱候士茂無御座、某家ニ付而ハ一應用達申上度御座候条、由緒之次第得与被聞召分、以前之通被仰付被下度、幾重ニ茂奉訴候、最前、右條々之子細不得申上故、願之通不被仰付儀ニ茂可有御座哉与、残念ニ存申候ニ付、又々奉訴候、此旨宜御申頼存候、以上、

九月十八日

御名

(裏書)

此兩通、享保九年辰九月十八日之日付ニ而、同廿六日、

右膳殿御方江山谷角太夫殿より被差上置候処ニ、表立而御出可被成候筈ニ候間、然者表方より總州様江御伺之節ハ、右膳殿ニ而御伺可有之候、其節右膳殿より委曲御内意可被仰上候、此御申分、餘家之例ニ相成儀ニ而無之、訳有之被仰出事ニ候へハ、此通ニ社可有之候、彈正殿よりも随分御同役中江御相談可被成候、此旨ハ右膳殿江御内談被成たる事ニ候間、日付ヲ相改可差出旨、彈正殿より被仰儀候間、其通ニ可仕由、角太夫殿今日此方へ御出被成、弥五左衛門・孫七へ被仰聞、御口上書御渡被成候故、十月廿五日之日付ニ相改、同廿五日、濱田爲左衛門ニ而差出、於御城角太夫殿被爲請取、中神与五左衛門殿御取次ニ而被差上候処ニ、空殿御月番故御受取被召置候由、角太夫殿より兩人江被仰聞候、右膳殿ニも成程宜御納得被成、随分御肝煎可被成候旨被仰、彈正殿ニも御同前之思召ニて候由角太夫殿被仰候、委曲御夫婦様へも隱密ニ申上候、中神与五左衛門殿御取次ニ而空殿被御取次參候段ハ、伊東五次右衛門申上候、

〇二九三 沢源太兵衛書狀

昨日者、為御礼兩度迄御越之段、越中守被承、御慰勸之儀ニ被存候、此旨、某方より相心得可申述由被申付候間、如斯ニ御坐候、恐惶謹言、

閏五月十日

久 (花押)

(端裏上書)

沢源太兵衛

(墨引)

曾木新助様

久

〇二九四 新納仲右衛門起請文前書

起請文前書之事

- 一對又八郎様・内匠様ニ少茂疎意ニ不奉存、無二心候事、
- 一御為を存申上候儀、少茂偽無之候事、
- 一私之勝手を以、鹿兒嶋婦参望ニ存不申候事、

右之條々偽於申上者、

十月廿二日

新納仲右衛門

〇二九五 柏原幽静達

(包紙ウハ書)
「曾木家傳御家譜ニ被召載候ケ條書趣一紙」

曾木新左衛門重知者、加治木之長臣而且國之大君

光久公愛憐之越群焉、有時昵近終身也、適參候許席、賜酒盃則倒盃、膽大而應對令君心悅、知無便佞而忠貞之志厚故也、仍拜載之品幾多乎、正其質拔群處也、時久住公彙代之家譜拾遺而欲集輯、令其事當予、重知家之事亦委問書錄、正是大君使加治木之臣等許席、如賜盃所無佗家、久住公家格莫類故也、雖然譜錄依繁多略之、記錄重知昵近大君兼家格之由來大要、而欲令其規格連綿傳久住公之御子孫也、此旨趣依予相求、爲小補曾木家傳書、以附與之云爾、

其大要

- 一重知不時鹿兒島御屋形江參候之事、
- 一召御前拜載酒盃之事、
- 一拜載之品數多之事、

一御直御書被成下之候事但作禮文、

一不時賜上使事、

一年々為節禮、從御内證青銅百疋宛被致進上候事、

一光久公被遊御參勤御下國之節、為御祝儀青銅百疋宛被致進上候事、

一重澄事、光久公以御意家老職被仰付、其後新

左衛門与改名被仰付、親新左衛門江不相替進上物等可仕旨被仰渡、青銅百疋宛進上仕候事、

一重喬事、基熙公・家熙公・家久公江使价被仰付、被相勉候事、

一重喬・實興二代者、於鹿兒島御屋形御目見、國之大守公被仕候、實弼事、久住公御直元服被仰

付候事、

右之條、被召載于御家譜候、委細書写可進候得

共、所存有之大底如斯候、已上、

手子

十一月吉日 柏原幽靜(花押)

曾木五兵衛殿

〇二九六 薩英戰爭勲功沙汰書覚書

(本文書八省略)

〇二九七 曾木某覚書

亡祖父新左衛門并亡父仁左衛門御奉公仕候趣、太抵書記申候、

一仙嶋院様御儀御袋様御事ニ付而

寬陽院様、御平日御間御快無御座、此御方様之御進上

物ハ御前ニハ不被召上、何ぞ御疑被遊様ニ御座候

由、何れも傳承候而、別而敷敷事ニ、御家中為奉存事

之由候、亡祖父新左衛門事、不二院様御證人ニ而、

江戸江御詰被遊候ニ付、御役人ニ而御供被仰付、相勤

罷居候處、不二院様へ種子嶋殿御息女内々御縁与之

御取組相濟候、於江戸新左衛門より

寬陽院様上聞ニ相達候様ニと、仙島院様より被仰下候

得共、新左衛門兼而存候ハ、仙島院様不御心、御間

不宜敷段、別而敷敷奉存候故、

寬陽院様御姫様御申請被遊候ハ、御間柄無御隔心御成

被遊、御為可被宜儀ニ候、脇より御縁与被遊候ハ、
當分之御挨拶御直り可難被遊候間、何とそ 御姫様御

申請被遊筋ニ可仕与存、新左衛門了簡を以、御申請之
筋ニ、其節之護摩所善堯院にて申上候へハ、

寛陽院様被 聞召上、御幸ニ思召、御西様御縁与(後欠)

〇二九八 大山三左衛門書状

(本文書ハ省略ス)

〇二九九 大山綱良書状

未残暑堪兼候得共、弥御健勝被成御坐、弥重参せ候、然
者、近比當時柄御面倒千萬之至御坐候得共、當同席江夏
喜蔵与申者、其御地木田村江先祖江夏友賢為墓詣、明朝
日尊船より着越候付、宿手當等之儀全ク手寄無之段ニ付、
御面倒恐入罷候得共、町江宿一軒御手當被成置被下候様
御頼申上候、左候而夫より栗(野)江もユク賦候由御坐候間、
歸り之時分ニも、自然一宿御頼申上度儀も可有之候間、
夫等之処、彼是御手数罷成事候得共、可然様御頼申上候、

此段早々奉得御意候間、可然様返ス(綱良)も奉頼上候、已
上、

六月廿九日

大山格之助

曾木弥五左衛門殿

再伸、船着場等彼是不案内之由ニ付、綱掛橋辺江宿
相知候様、彼是御案内御頼申上候、

〇三〇〇 中江長右衛門書状

(本文書ハ省略ス)

〇三〇一 毛利強兵衛書状

玉状辱拜見、然者先達而弥五左衛門殿御頼入之八田氏歌
并木刀、未出来不申候、何れ早目相調候様、尚又催促い
出し置可申候、左様御得心可有、以此旨貴報迄、艸々不
備、

五月廿日

(墨引)

曾木彌五左衛門様

貴報

毛利強兵衛

〇三〇二 毛利強兵衛書狀

尚、鹿紙御免可被下候、

袂別已來者不承御左右候得共、彌御壯剛奉慶候、借今晚者、泷脇處江一宿候哉、於御閑散者御寬話申上度候、亦一御坐

御來臨奉勸申候、此旨乍大略、以鹿毫艸以上、

九月十一日

曾木彌五左衛門様
用事

毛利強兵衛

(墨引)

〇三〇三 某覚書

重喬江御免地小山田村之内、伊部野之千本桜御覽可被遊与而、享保四年己亥二月廿八日

久住公御二方様、小森一山御同道ニ而 御光越ニ付而、彼地江俄ニ御茶屋ヲ相建、御膳差上候、益御機嫌能、終日被遊御座、御二方様御詠歌、御自筆ニ而御短尺拜領被仰付候、一山茂又一首詠歌有之、及暮小山田村如御假屋被成御入、御一宿在之候、向後為見合如此候、

三月

〇三〇四 曾木五兵衛拜領品目錄

(端裏書)

「享保七年壬寅六月廿二日

繼豊公加治木江御止宿之節、拜領御目錄、御取次御側御用人伊集院權右衛門殿、於御用人座頂戴、翌廿三日被遊御立候、但廿三日之朝、妻・嫡子五兵衛妻、於奥御座 御目見、權右衛門殿御披露」

青銅

百疋

〇三〇五 島津光久書狀

(包紙ウハ書)

明曆二年申三月十三日、光久公加治木假屋江被遊御光儀、御帰城候而、則財部淡路殿御使ニ而、祖父新左衛門江嶋織木綿老端拜領仕候時、御自筆之御書被成下頂戴仕候故、差出申候、以上、

〔裏書〕
「御書貳」

「六」

1 島津光久書狀

今日罷帰候て、汁碗ニ而五盃被下候、其方氣色如何存候、不玳候へ共嶋一端遣候、淡路ニ持せ候而、成程酒ニ酔ぶ候へく候、

十月十三日

2 曾木重皓覚書

明曆二年申十月十三日、光久公加治木假屋江被遊

御光儀、御帰城候而、則財部淡路殿御使ニ而、祖父新左衛門江嶋織木綿老端拜領仕候時、御筆之御書被成下頂戴仕候故、差出申候、以上、

但右通上書ニ付差出申候、

丑四月三日

〇三〇六 曾木重皓覚書

(本文書ハ三〇五の2号文書トシテ収載ス)

〇三〇七 蓮光院書狀

猶々委細ハ得御意度存候得とも、明日江戸へ山口佐右衛門御用ニ付被參候故、御用旁取紛、不被及細筆候、以上、

態一筆致啓上候、先以今度兵庫殿より之御使者首尾能御勤被成、玳重存候、御逗留内、何之風情も不仕、御残多存事ニ御座候、先日者早々大坂へ御着被成候半と目出度存候、追付御乗船被成候哉承度存候、然者兵庫殿へ差上候状之写、為御披見任御約束ニ進申候、且又御無心之義ニ御座候得とも、紙包老急用ニ而飯隈山へ指越申候間、加治木へ御着被成候へ、早々御届被下候様ニ頼入存候、猶又爰元御用等御座候ハ、可被仰聞候、猶期後音之時候、恐惶謹言、

蓮光院

五月廿四日

頼英(花押)

曾木新左衛門様

〇三〇八 今大路治部少輔・進藤刑部大輔連

署書狀

り可被聞召候、以上、

二月廿二日之尊簡忝拜見仕候、先以貴公様并御奥方様

今日者曾木新左衛門殿御暇、御目見首尾克相濟、珍重之

・御子様方、倍御勇健被成御座候由、目出度奉存候、

御支候、就中新左衛門殿御傳語の者共可被召寄之由、御

一前関白公御事、新御殿へ御移徙被遊候御祝義、今度曾

念入被示聞、忝大慶之至候、御逗留中拙者共も緩々得貴

木新左衛門を以被仰上候間、於爰元ニ万端指圖可仕由

意度存候處、此節御用繁、其上十五日前、猶以兩人共難

被仰下御披露狀之写拜見仕候、成就御文歌宜御座候ニ

遁御用共有之候間、御断申入候條、從貴院宜様ニ御傳達

付、認直シニハ及不申、其仮指上申候處、御覽被遊、

奉頼候、已上、

御丁寧之義ニ被 思召候、將又小箱五御銘書之通御献

五月廿一日

上被成候、右同前ニ差上申候處、遠路被懸御心頭ニ、

追而御懇意之段、辱存候段、宜預御傳語候、以上、

珍敷物品ニ御献上被成候段、一入御満悦不淺被 思召

候、就中唐大筆ニ・唐木筆立、別而珍器ニて御座候ニ

(上書)

付、

(墨引)

進藤刑部大輔

左府公御所望被成被進候處、随分御秘藏被遊御事ニ御

蓮光院様

今大路治部少輔

一此度御献上被成候品々、珍敷被 思召候段、拙僧より

能々相心得候而申上候様ニと

〇三〇九 蓮光院書狀

前殿下仰ニ御座候、依之御奉書一通、進藤筑後守名書

尚々、委細之義ハ紙上ニ難達御座候間、新左衛門よ

候て被指越候、

一 御夫婦様御詠草式通、御上せ被成候ニ付、

前関白公へ御直ニ指上申候処、乍早覽御詠歌御褒美被遊候内、此度之御歌ハ一入御名歌も有之候由、就夫ハ御夫婦様平生御信心御慈悲之御心入之様子、御詠歌ニ相顯シ、殊勝ニ被 思召候、別而田浦之風景御浦山敷被思召上候、此旨拙僧より可申達由、御内々御沙汰ニ御座候、依之御夫婦様御詠草、御添削被成候而被進候、且又去年御差上被成候御歳旦之和歌式通、備 御覽置候処、今度御吟味被成被進候間、此便ニ指上申候、

一 曾木新左衛門事、三月下旬大坂へ上着ニ而御座候へと

も、
中将様御着之砌ニて拙僧大坂へ參、其後も御用ニ付罷下候而、先月十八日上京仕、新左衛門被召上候段
三御所様へ御直ニ言上仕候処、御感悅被遊候、就夫御尋被遊候者、新左衛門事、如何様成家筋、代々何役相勤申仁ニ而御座候哉と、前殿下御意ニ而御座候へと
も、由緒しかと存不申候ニ付、新左衛門へ相尋申候処、委細物語仕、系圖之写等私へ見せ申候ニ付、右系圖

前殿下備 上覽候処、宇治頼長公胤流之系圖ニ候得者無餘義家筋之由、御沙汰ニ而御座候、

一 早々御使者御請被遊筈ニ御座候処、関東表御指合之義有之、少々御延引被成、同廿四日ニ新左衛門參上可仕由被 仰渡、伊十院主水同道仕、拙僧も罷出取持仕候処、前関白様 左大臣様 大納言様、御前へ被召出、貴公様より之御口上御直ニ被聞召上、御口祝被下、次ニ新左衛門自分之

御目見被仰付、持參太刀進上仕、御前向キ首尾好相濟、御吸物・御酒被下、無殘所仕合珍重奉存候、

一 前関白公より新左衛門 御目見相濟候以後御意被遊候ハ、先年新納仲左衛門事、御結納之御使者ニ罷登、首尾好相勤候、貴公様御家筋ニて御座候哉、此節新左衛門被指上候処、宜躰ニ相見得、神妙ニ相務候由、御褒美被遊候、

一 去春、拙僧罷上候節、袂百合草三

左大臣公へ御献上被成候ニ付、指上申候処、御満悅不淺被 思召候、然とも花咲不申候、當年も根朽不申候

ハ、

禁裏様へ御進上、可被植由ニ御座候、京都之土相應不仕候哉、度々消申事ニ御座候、

一去春御献上被成候牛根石、硯ニ御用被成候へとも、殊外堅ク御座候ニ付、御重宝ニハ成不申候得とも、玆敷硯石之由御意ニ而御座候、

一関白様より今度御薫物御調合被成、被進度被 思召候へとも、唯今宜沈白檀無之候間、重而可被進旨、私より可申上由御内意ニて御座候、

一侍從殿よりも、堂上方御染筆之物被進筈之由承候、

一今度曾木新左衛門御使者ニ被召上候ニ付、諸事被入御念、肉食をも被下間敷由被仰付候旨、新左衛門より咄承候ニ付、其段

関白様へ御咄申上候処、扱々御正直成御事、弥御感心被遊候由

御意ニ而御座候、

一當月九日、御使者御暇可被下由

前関白様より被仰出、新左衛門 御殿へ伺公仕候処、

御返答被仰出、御料理・御茶迄拜領、其後御使者を以新左衛門へ時服拜領、段々結構成御取持ニて御座候、貴公様より之御使者故、右之通ニ御座候、

一左大臣様 大納言様よりも、當十一日新左衛門被召寄御暇之 御目見被仰付、御料理・御茶迄被下、御返答被仰出、御使者ニて

左大臣公よりも御時服拜領、段々結構成御取持ニて御座候、先年嶋津伊豆殿より之使者北郷源兵衛御取持之様子とハ各別之事ニ而御座候、是又為御心得御内證申上候、

一拙僧事、来春迄在京被仰付候間、相應之御用等御座候ハ、可被仰下候、猶期後喜之時候、恐惶謹言、

五月十七日

蓮光院

鳴武庫様

参尊報

〇三二〇 某覚書

覚

家久様へ從 惟新様之御書案卷通

右御文所へ御用ニ付被召留置候、

二月十四日

〇三二三 貞姫和歌

(本文書ハ省略ス)

〇三二四 曾木隆員覚書

(本文書ハ省略ス)

〇三二一 九州探題在職期間書付

義時六男實泰男

越後守實時三男

上總介實政

〇三二五 拝領品目録

(本文書ハ省略ス)

自永仁六年

至正安元年

〇三一六 拝領品目録

(包紙ウハ書)
「御目録貳通

宝永元年 申五月九日 前関白公より拜領
五月十一日 左府公より拜領

」

實政男

上總介實顯

自正安元年

至乾元二年

1 近衛基熙ヨリ拝領品目録

(端書)
「宝永元年申五月九日

基熙公ヨリ拜領御目録」

〇三二二 貞姫和歌

(本文書ハ省略ス)

〔ハリ紙〕
「宝永元年五月九日

前関白公ヨリ拜領御目録」

以上

御目録

〇三二七 近衛家熙ヨリ拜領品目録

〔本文番ハ三一六の2号文番トシテ収載ス〕

単惟子 三〇

〇三二八 岸本寿賀書状

以上

昨日者御出、殊ニ風早三位公江御寸蔭状被進候、芭蕉布
三端、早々持参仕候處ニ、

2 近衛家熙ヨリ拜領品目録

仙洞様御歌ノ御會ニ而

〔端裏書〕

〔宝永元年申五月十一日

家熙公ヨリ拜領之御目録〕

〔ハリ紙〕

〔宝永元年五月十一日

左大臣様ヨリ拜領之御目録〕

目録

御院参被遊候而、夜ニ入御帰駕、今朝御返事参候故、乍
存御禮延引仕候、先以入御念候御儀、能々貴特ニ候、御
禮拙より申進候様ニ呉々被仰奉候間、可然様ニ例之刻能
々御禮被仰遣可被下奉頼候、殊ニ拙江モ芭蕉布右端被懸
御意、辱奉存候、是又御次而之刻、可然様ニ御禮被仰遣
可被下奉頼候、尤懸御目、三位公より被仰奉候御禮旁可
得御意候へ共、先如此ニ御座候、已上、

季春十九日

単惟子 三領

(裏書)

菊や

源兵衛様

岸本寿賀

宜為

曾木直袈裟
五兵衛

〇三一九 拝領品目録

(本文書ハ省略ス)

安永九子
四月十五日



〇三二〇 天錫書付

此程、予か鷹狩に大鳥を獲し事ありしを、蕉下菴玉筍といへるもの聞傳へ、賀章を贈りけり、みるより一唱三嘆、まことに目を刮て

〇三二三 加冠状
加冠

曾木常太郎

鶴とりし鷹に許しや藤の花

宜為

弥五郎

色香も深き水莖の跡

天錫書

文政十一子
八月十九日



〇三二一 和歌書付(断簡)

(本文書ハ省略ス)

〇三二四 加冠状

加冠

曾木新三郎

〇三二三 加冠状

加冠

宜為

翁助

文化四卯
五月十五日



〇三二七 加冠狀

曾木常袈裟

宜為

五兵衛

〇三二五 加冠狀

加冠

曾木新太郎

寶曆二申
十二月十三日



宜為

弥五郎

嘉永二酉
八月廿八日



〇三二八 曾木隆員進上目録並請取狀

進上

御太刀

一腰

御馬

一疋

以上

〇三二六 加冠狀

加冠

曾木甚吉

宜為

新助

享保九
八月八日



請取

一錢百文

太刀代

一同卷貫文

馬代

曾木彌五左衛門
隆員

右、表書之通槌ニ上納也、

酉
九月朔日

御納戸書役
上村彦兵衛
右同
上野市右衛門〇(印)

〇三二九 曾木隆亮進上目錄並請取狀

進上

御太刀

御馬

以上

一腰

一疋

曾木五兵衛
隆亮

請取

一錢百文

一同三百文

御納戸

御太刀代

御馬代

右者、御役之御礼ニ付御太刀進上被成候間、御役所任

御證文上納也、

辰
十二月朔日

御納戸書役
横内五郎兵衛

上床藤七

伊藤弥吉〇(印)

〇三三〇 曾木隆棟進上目錄並請取狀

進上

御太刀

御馬

以上

一腰

一疋

曾木五兵衛
(隆棟)
實術

此表

一御太刀一腰〇(印)

一錢卷貫文〇(印)

銀ノ拾五匁

御馬一疋代

右之通相受取也、

御納戸藏役人

巳
十月十七日

伊地知八兵衛〇^印

村田仲右衛門

繼豊公加治木江御止宿之節進上、御用人座江持參、伊十院權右衛門殿江差上候、

〇三三二 曾木重昭進上目録並請取狀

進上

御太刀

一腰

青銅

百匹

以上

曾木五兵衛

實興^{重徳}〇^印

〇三三一 曾木重喬進上目録並請取狀

進上

御肴

一折

以上

曾木彌五左衛門

重喬

此表、今日 御目見被仰付進上ニ付、受取申候、以上、

御納戸役人

六月廿二日

帖佐彦右衛門〇^印

^{重徳}此表、昨廿八日 御目見ニ付、御太刀一腰・青銅代錢老貫文進上ニテ相納候、以上、

御納戸藏

岩下三左衛門〇^印

午九月廿九日

奥山源左衛門〇^印

^{端裏書}

享保七年 壬寅六月廿二日

〇三三三 曾木実彌進上目録並請取状

進上

御太刀

一腰

御馬

一疋

以上

曾木彌五左衛門
實彌

青銅

百疋

以上

曾木彌五左衛門
重喬

此表、御太刀一腰・青銅百疋^(印) 御目見ニ付進上被成、受
取申候、以上、

御納戸藏

岩下權兵衛^(印)〇

此表、御太刀一腰・御馬代文銀拾三匁五分、島津善次郎
殿家来家督之為御礼進上有之、相納申候、以上、

子六月朔日

御納戸藏

高柳孝左衛門

内田市左衛門

種子田与右衛門

申
三月二日

中村喜右衛門^(印)〇

〇三三五 曾木重喬進上目録並請取状

進上

御太刀

一腰

御馬

一匹

以上

〇三三四 曾木重喬進上目録並請取状

進上

御太刀

一腰

曾木弥五左衛門
重喬

一同老實文 馬代

右、表書之通儲ニ上納也、

上村彦兵衛

上野市右衛門（印）

（割印）
此錢相納、受取申候、

御下屋鋪御納戸藏

高城半七（印）

丑

二月十日

〇三三七 曾木重堅進上目錄並請取狀

進上

御太刀

一腰

御馬

一匹

以上

曾木五兵衛
重堅

〇三三六 曾木隆昌進上目錄並請取狀

進上

御太刀

一腰

御馬

一疋

以上

曾木彌五郎

隆昌

（割印）
此表相納、受取申候、以上、

御下屋敷御納戸藏

高城半七（印）

丑

二月十日

請取

一錢百文

太刀代

○三三八 葉室頼重和歌

(本文書ハ省略ス)

○三四四 伊勢兵部・町田主計連署達
御太刀

加治木家跡家来繼目之御禮

○三三九 中院通躬和歌

(本文書ハ省略ス)

曾木五兵衛

右者、明廿八日右之通進上ニ而繼目御禮被仰付筈候間、
當日朝六ツ半時長上下着用ニ而罷出候様ニ可被申渡候、
此段申達候、以上、

○三四〇 葉室頼孝和歌

(本文書ハ省略ス)

八月廿七日

○三四一 色紙和歌

(本文書ハ省略ス)

(端裏上書)
(墨引)

相良弥一兵衛殿

町田主計
伊勢兵部

○三四二 色紙和歌

(本文書ハ省略ス)

○三四五 西三条実澄略歴

(本文書ハ省略ス)

○三四三 色紙覚書

(本文書ハ省略ス)

○三四六 某極札

(本文書ハ省略ス)

〇三四七 川宗鑑定手札

(本文書ハ省略ス)

〇三五〇 鎮西下知状写(卷子)

(卷子表題) 曾木氏文書之寫一通

(ハリ紙) 六番

〇三四八 郡山無陰書

(本文書ハ省略ス)

(雜目裏印)

〇三四九 島津義弘感状

今度美濃國関ヶ原之合戰致粉骨、從其伊勢・近江・伊賀・大和・河内・和泉ニ至り、帰国之路次傳片時茂側を不相離、抽奉公之段神妙之至、尤感入候、仍知行五十石宛行者也、

慶長五

拾月十日

(ママ) 維新

曾木弥次郎とのへ

薩摩國御家人莫称勤行養子平氏与大隅國御家人曾木五郎太郎宗茂相論、同國菱刈郡久富名内田畠屋敷并築地村及与桑田代村等事

右、如氏女訴状者、彼村々并田畠屋敷等、自本主慶阿之正文字、氏女養母若字姫傳領之間、姫若又讓与氏女之處、宗茂致濫妨上者、被沙汰付彼所々、可糺給押領物云云、因玆今年二月十三日・同四月廿日雖被成兩度召文、於宗茂無音之間、同七月十三日、以大隅國御家人税所介入道正蓮・弥寝郡可清治、就被尋問難澁實否、如同月廿八日清治請文者、相尋難澁實否於宗茂處、子息孫五郎帶陳狀令參上云云、如同月十一日宗茂奉状者、勤行養子平氏訴申久富名内田畠屋敷并築地村・采田代村等令押領由事、以子息孫五郎重宗進陳状云云、如同陳状者、彼田畠屋敷事、勤行妻女姫若女任實治二年慶阿之讓、久富名内田壹町伍

(雜目裏印)

段・屋敷一所令領知之、文永年中死去畢、而勤行稱有亡妻之讓、令知行彼跡、雖經年序、氏女為養子讓得之旨不聞及之、且當郡惣地頭名越遠江國司自弘安年中押領當名之間、宗茂於博多致沙汰之時、勤行稱地頭進止之由、雖不与訴詔、宗茂申成閩東注進之處、御裁許依違之間、經十余年申達越訴、令安堵之条、御下知明白之處、号慶阿寶治二年讓狀、構出偽書、稱有姬若女手繼、及掠訴之条招罪科欵、次築地村・采田代村等事、宗茂亡父曾木五郎光茂法師法名光蓮寶治二年得本主慶阿之讓狀、令知行久富名之處、彼村々、云姬若、云勤行、不及稀望、經五十余年畢、而氏女構今案、致偽訴之条、不足信用云云、如氏女代隆圓重訴狀者、彼村々田島勤行帶次第證文、迄于弘安年中知行無相違之處、遠江國司押領之間、惣領主宗茂依經訴詔、連々令出彼沙汰用途条、光蓮・宗茂等數通書狀炳焉也、是則宗茂蒙御成敗者、相當勤行安堵之處、給御下知之後下向、令混領之条、(條目變化押)理豈可然哉、將亦勤行得妻女姬若之讓、領知之後、讓与氏女之条、狀文見在之處、不聞及之由、雖稱申、於勤行知行之段者、宗茂雌伏之上

者、不及異儀欵、次如姬若所得寶治二年慶阿讓狀者、注載田島屋敷付付、令讓渡之處、限田一町五段・屋敷一所之旨、宗茂何可及偽陳哉、隨而得姬若之讓、勤行令知行之由、乍自稱、為偽書之旨、載同狀之条、前後參差、自語相違之至、忽令露頭畢、次築地并采田代村事、姬若・勤行等不及競望、經年序由事、件兩村者、帶文永三年・同五年慶阿兩通讓狀、相傳領掌之處、依惣地頭押領、同心光蓮・宗茂等訴詔、出沙汰用途之条、載先段畢、而何年記違期之旨、可擬申乱哉、爰如氏女所進弘安五年八月十五日勤行讓狀者、大隅國菱刈郡久富内曾木・米田代名又田島等、姬若女為曾木入道嫡女之間、所讓得也、依無實子、養子赤子殿仁可讓与之由、就申置、采田代并田島等證文二通、又勤行相傳須留築地名證文、同所讓渡也云云、以和字 摸漢字如寶治二年七月日沙弥慶阿并藤原云云、宗茂加暑讓与姬若女之狀者、久富名内一町五段坪々、又於和幾乃大午田与梨内乃田地島地於讓留云云、取要、同裏書云、又上阿弥陀佛乃本蘭崎山仁妙阿弥陀佛乃作三段渡須云云、如文永三年正月十一日慶阿地頭左近將監加證判之由載之狀者、依地頭方

年々未進、莫祢無盡米十石二斗取_三弁之間、入築地村於

彼米質至三年不弁之間、於彼村者、限永代可被知行云云、

同前、如同五年十二月十五日同人讓狀者、久富名内米田_(マ)

代村田地畠地、先仁多比_三候田一町五段加_三、久富八分

一於可沙汰、築地者先仁由緒有_三多婦也、但米田代乃永_(マ)

吉母加惠多留也、至子_三孫可領知、姫若殿云云、_{(以上以和字}

如二月廿四日_(不記マ)年号達勤行・光蓮返狀者、上太郎自鎌倉多

比_三弓用途候波奴之由申_三候、始奴御志、仁_三候惠登母、馬

於給米登申、色々仁給候事難申盡候、此御志波君達摩_三

母殘留候波牟登母仁波可申置候云云、如十二月廿六日同

狀者、馬給_三候志事難申盡候、此訴詔者二問答志_三候云

云、如九月廿六日同人狀者、申_三候甲斐候_三、小袖絹一

悅給候畢、志伊多志多留事波候波祢登母、奈仁々_三母御

阿須計候邊志云云、如五月廿八日同人狀者、此沙汰事御

使乃成敗候奴登覺候、又米五斗給候早、又孫乃童部母

相節祈登_三稻給_三候土申候、難申盡云云、如六月九日宗

茂狀者、就注進関東參上仕候、兼又今度宰府惠登候志時、

一佛房加用途給_三候志於、摩幾礼候_三不申左右候、一度

奈良須罷上候之間、度々御志無申計云云、如九月廿日同

人狀者、関東參跡仁、人々常聞繼給之由、被悅申候、始

奴御事候惠登、殊悅入云云、如十月廿五日同人狀者、地

頭代等不敘用御下知候覽事、傍例可然候、夜賀_三可罷下

候惠登母、就是_三母重御下知於申給良波夜登存候、兼又_(給目書)

米二斗給候畢、常加樣仰給、難申盡云云、_(以上取證)者、宗茂背

兩度召文、不及散狀間、仰正蓮・清治等、被尋問難澁實

否之處、以子息重宗捧請文陳狀之間、被下氏女代隆圓之

處、去八月廿六日依捧二問狀、擬下重宗之處、不令出對

經數日畢、如隆円重訴狀者、宗茂誰澁至極之後適雖差進

重宗、顧無理、即帰國之上者、可預裁許云云、加之、如

被下鎮西乾元二年六月廿一日関東御事書者、就三箇度召

文、雖參上、不終沙汰之篇下國者、可處違背云云、而重

宗令下國、至今不參決之条、難遁其咎之上、如氏女所進

證文等者、云次第相傳之由緒、云光蓮・宗茂等訴詔同心

之段、支證又以分明也、次米田代村等事、不知行經年序_(悉)

之由、宗茂雖稱之、氏女帶次第手繼上、就地頭押領、光

蓮・宗茂等訴詔之時、勤行致合力之間、難稱年記違期之

旨、隆門所申非無其謂欵、然者云儀理、云難澁、依無所

遁、於彼村々田畠屋敷者、任寶治・文永・弘安讓狀等、
(繼目裏印)

氏女可令領知也、次押領物事、宗茂令安堵惣名之後、氏女未知行之間、不及沙汰矣者、依仰不知如件、

嘉元三年九月廿六日

上総介平朝臣(花押)

(繼目裏印)

右一通之正文、就公用御記錄所江出置、去年四月 御城

回祿之時焼失、依之御家老嶋津縫殿久寛・嶋津助之丞忠

守・喜入安房久亮・種子嶋藏人久時・肝付主殿久兼遂相

談達 貴聞、此節差出扣写字畫判形如正文写置故、則以

其写写被仰付為一卷用紙七枚、繼目裏ニ加封印被下之間、正

文不替秘藏仕、可傳于子孫者也、仍為後證如件、

繼目封印(印)

元禄十_丑正月廿五日

久達(花押)

嶋津兵庫殿内

曾木新介とのへ

〇三五二 毛利強兵衛書狀

猶々上封取計御免可被下候、

一昨十七日老封差上候間、御披見被下候半、其御許様一宿久々ニ御嘶等可申承含御座候處、今宵順風ニ而乗船いたし候様申出候ニ付、乍残心背本懷申候、何れ来月初旬ニ御帰旅、其折寛々可得御意候、拙夫ニも當職来月中罷成轉役一条、其余屋敷一許等も有之、(件力) 帰府旁決定いたし、一入御直ニ切嗟(練)練身ノ含守御座候、此旨以寸猪御断為可申上、秃毫以艸々不備頓首、

寅九陽十九日

曾木弥五左衛門様

御同氏新之助様

毛利強兵衛

〇三五二 道正庵書狀

〔松平弥五左衛門様

道正庵〕
(裏書)

今日者未得貴面候、夜前之小十七之御草臥者無御座候哉、

承度候、御障無之候ハ、又々今晚大十七進申度候、後

程も於御出者委細申上、其上ニ而何れ筋と相究可申候、

乍不申御断者不被仰筈と存申候、後程御直委可申候得共、

先何分之訳御報ニ致承知度候、以上、

九月四日

〇三五三 波多野清左衛門書状

秋冷相催御坐候之處、愈以御安泰被成御坐候半と、大悦

至極御儀奉存候、随而野生ニも鳥渡旅行いたし、當月十

四日帰国いたし申候間、乍憚御休意思召可被下候、就而

者、留主中ニ者御見舞被下、難有御辱御禮申上候、罷帰

り候て直様しらせ呉候間、御沙汰之趣承居候得共、彼是

取紛、幾重ニも御用捨可被下候、今日者名代便より荒々

如此御坐候、頓首、

波多野清左衛門

八月廿日

曾木彦五郎様

〇三五四 某書状

尚々、昨夕遣置候画圖ハ、得と御覽可有之候、以上、

夜前御出ニ付而ハ、自何之品被懸御意、子共致大慶候、

適々御来臨被成候処、乍毎為何風情も無之、御残多次第

ニ候、扱但馬殿、拙者方へ御出被成度段、承知候処、兩

日中相撰、何分可申上筈候得とも、當分違心事ニ取掛居、

未五日ハ相掛事故、兎角不遠うち此方より御案内可申上

候間、よろしく御演説可給、尤其御御同伴可有之候、右

旁為可得御意、書中ニ而如斯御坐候、頓首、

卯月十六日

(墨引)

貢様

尊答

左之介

〇三五五 柏原公広書状

被頼置候一儀、角太夫殿へ申達候処ニ、御望之通書改被

遣候間、差越申候、御うけ取可被成候、委細相知候得ハ

定而御望之通ニ出来候半とハ存候へとも、若相應之儀も有之候ハ、又々可被仰聞候、猶期貴面申給、恐惶謹言、

柏原一右衛門

如月四日

公廣(花押)

曾木五兵衛様

〇三五七 曾木新介書状写

、龜姫様

、長姫様

、御部屋様

八丁堀
、御奥様

右江兵庫殿奥方より御祝物進上不被仕筈ニ御座候哉、

松沢との御新宅

御上藤御局

匠作様御乳人高輪御局など

右之衆へ御祝物不被遊ニ御座候哉、

急度申候、仍
惟新様来月四日ニ被成 御出船、同六日ニ開聞宮へ御参詣之御日執ニて候間、為心得注進申候、乍去海上之儀ニ候条、天氣なと悪鋪候者、相延可申儀も候哉、相替儀候ハ、又々可申候、御宿之儀ハ無油断掃除肝要ニ候、尚期後音之時候、恐々謹言、

曾木五兵衛

三月廿六日

判

大迫吉之允殿

人々御中

右之御人数様へ茂御祝物可被差上哉、爰元ニ而御差圖次第与兵庫殿より被申付、書付参持仕候處ニ、何茂様へ被差上御祝物調之儀ハ、物奉行所へ被仰渡候右御證文之内ニ、右之御人数様へ被差上御祝物相見不申候、弥不被差上筈ニ可有御座候哉、其儀御座候ハ、口上迄ニ而御祝儀可被申上哉、且又松沢との御局御乳人杯之儀も同前ニ奉何度存候間、以御序被仰上可被下候、

以上

五月十五日

曾木新介

前殿下様より兵庫様江之御返答、来ル九日ニ可被仰入候間、九日昼時分、堀川御殿江私同道候て参上可仕旨、只今進藤筑後守殿より申来候間、今晚明朝之間、此方へ来儀可申越候、

〇三五八 曾木某書状写

一筆致啓上候、弥御堅固可被成御座候而目出度奉存候、私無事罷在候、然ハ此度兵庫殿家譜御しらへニ付、私父子御目見仕候次第書付可差出由、上床藤右衛門迄御問合有之候故、藤右衛門より申越候間、——父子

五月六日

伊集院主水

曾木新左衛門殿

〇三六〇 蓮光院書状

此方より可得御意と存候処、預御手紙忝致拜見候、夜前ハ預御見廻辱奉存候、然者今日御殿へ御参上之義、昼午ノ刻時分ニ此方へ御出可被成候、昨日昼前と申候へとも、御献上之御菓子出来不仕、昼前後ニ者出来可申候間、其御覚悟ニ而御出被成度候、且又御供廻弥羽織ニて可然存候、上下着之義ハ最早入申間敷候、尚後刻可得御意候、

四月廿三日

柏原一右衛門様

〇三五九 伊集院主水書状

〔包紙ウケ書〕
「曾木新左衛門殿 伊集院主水」

以上、

五月十二日

(ウ八書)

(墨引)

曾木新左衛門様

蓮光院

正信 (花押)

島圖書

久通 (花押)

○三六一 島津久通外三名連署書状

(端書)
「手紙欠落人ノ事」

新納仲右衛門殿

曾木新左衛門殿

御宿所

(ハリ紙)
「加治木『写濟』
八曾木新介」

(ハリ紙)
「文書
十四」

一筆令申候、然者了順欠落之儀ニ付、圖書方迄入念、向町新右衛門口上書并馬方堅右衛門口上書被差越候、殊更栗野迄右人様子被申遣ニ付、彼地暖之來より追手被申付、於加久藤搦捕、今昼當地へ参候、畢竟各肝煎故首尾能候、此等之段、以御仕合可達

○三六二 郷原久雄書状

上聞候、恐々謹言

鎌源左衛門

二月廿三日

政有 (花押)

町勘解由

久昌 (花押)

鎌藏人

一筆令啓達候、然ハ先日御噂申置候貴様御先祖へ比志島紀伊殿より之披露状迄通、此度差遣候、ケ様成書付ハ、證書有之上ニ茂證文御座候方宜候間、別紙致書付令進覽之候、然所無紛物候間、御秘藏可被成候、為其如此候、恐々謹言、

郷原金太夫

閏五月十九日

久雄 (花押)

曾木五兵衛様
人々御中

曾木五兵衛尉殿

〇三六三 島津惟新義弘書狀

(ハリ紙)
「加治木享濟
四 曾木新介」

(包紙ウハ書)

『重要文書』

曾木文書 式通

惟新様御狀 一

〇三六四 曾木重松書狀

猶々、貴老別而御迷惑之通、從是察存候、定而可為
御下向候之条、以御面彼是可申承候、

已上

汰可在之候、就中女房方猥儀無之様ニ、小者以下ニ
至迄、能々相嗜御奉公仕候様、入念堅可被申付候、
將又寒天之時分、万事ニ不如意ニ可在之候間、銀子
百目送遣之候、

今度上洛之儀、於久見崎俄申付候處、無異儀御供申候事、
別而祝着不少候、然者宗圓御供申候へ共、如存知煩繁候
而、事闕ニ御料人も被思之由候間、近頃雖難申儀候、乍
辛勞此一節者致逗留、御奉公可被申儀頼入候、御料人へ

も此由申候間、其段可相心得候、恐々謹言、

(慶長十八年)
十月四日

惟新 (花押)

急度令啓上候、 惟新様御事、去月十一日より火急ニ被
成御煩ニ付、色々御養生御精成之儀雖御座候、永々御草
臥之故、七月廿一日之夜子之時ニ被成 御他界候、何共
迷惑可被成御推量候、 御死害之御夏も今月廿日ニ福昌
寺へ被成 御越、同廿四日ニ御葬靈相定候、誠哀成御様
子、可申上様無御座候、子細之段者堀源左衛門尉殿可被
申候間、不能詳候、恐惶謹言、

曾木五兵衛尉

(元和五年)
八月十六日

重松 (花押)

(伊丹節老)
道甫老

まいる御旅宿所

(ハリ紙)
「文書」
十一

(ハリ紙)
「加治木『浮濟』」
七 曾木新介

〇三六五 某書状

今日者不快之様子ニ候得とも、寒中殊ニ甚閑暇ニ候俣追
付一寸可参候、何も手当等者決無用ニ 此段申遣
候、早々、以上、

(裏書)

(墨引)

柳田翁江

當用

より

〇三六六 島津義弘書状

そのうちへ、はるく御をとつれうけたまへらす、御ゆ
かしく存候、をりふし、むつのかミ殿より、つかひをさ

しのほせられ候間、一ふてとりむかひ申候、その御かた
なに事おはしまさす候哉、このほうも、御はうへをは
しめ、いつれも一たんとさかしく御入候まゝ、御心やす
かるへく候、しかれば、りうきうの事、きんねんあまり
われまゝのふるまひにて、大國の儀をもつはらにもちひ
日本をおもひあなとり候て、すてにさしわたし候つかひ
もうけつけす、めんほくをうしなひ、手をむなしく罷帰
躰ニ候、しかるあひた、むつのかミ殿より、ゑと・する
かへ御意をえられ候て、當はるりうきうへ人しゆさしわ
たされ候、もとより彼くにもまぢまうけたることに候条、
ほこのはをあらそひ、なはと申ミなど、日本よりのわた
りくちよし候間、題目にあひかこひ、まかりあるよし、
もれきこえ候まゝ、このたひとかいのくんしゆに、われ
ら申きかせ候へ、彼なはのみなどへハかもはず、あらぬ
所へひやうせんををしつけ候て、うしろをとりやふり候
へ、たとひ一旦へふせきたゝかふといふとも、つひに
ハしうりをえ候へんかと申候つる、そのことく別のミな
とへ船をつけ、人しゆをおろし、在と所とのいゑともを

はうくわし、せめはたらき候間、あんちうなから、彼國のものとも、うへしたにあへてさへき、なにの手たてもまかりならず、ひたすらにかうさんをこひ、しゆくわひこと申候間、せひをもたすにおよはず、いのちをたすけ、和ほくつかまつりたるよし候、それより彼國の事、しまくいたるまで、のこらすあひしたかへ、あまつさへ、りうきうのていわうをはしめ、さんすくわんその外かしらたち候衆を、當こくのくんしゆとうせんに、さつしう山河の津へ、はやちやくせんのみし、申きたり候、かくのこくとく、日本より他こくに人しゆ御わたし候ことは、あまねくうけたまはりつたへす候、

そのうへ、いこくのくわうていを、わかつてうへわたし候儀へ、ためしなきことゝ存候、まことに、さらは、ほんりをしのき候て、くんしゆまかりわたる儀候間、かれといひこれといひ、こゝろつかいあめ山に候処ニ、おもひの外に、うちかち候事、わたくしならず、たゞ佛神の御かこ、第一ハ、大御しよ様・當^しやうくんさまの御いくわうゆへと存計候、ことさらミかたはおほくも失なひ申

さす候、やうやく、さうひやう一二百人ほともせんしつかまつりたるよし申候、かやうにいこくをしたかへ候へんにハ、一二百のせんしハ、はつかなることゝ存候、いづれもこゝもとのよろこひ、みしかきふてにつくしかた候、ついでにの折りからハ、かうちのかミへも、このよしほくおうせつたへ給ひ候へ、又申候、このほうより御とも申候しゆ、いづれもくミやつかへしんのよし、おほせきかせ候て給るべく候、こゝもと、まこさゑもん・とう七ひやうへ、一しほけなげにほうこうつかまつり候間、こゝろやすかるべく候、ことに、せんとはいと所よりのことつて、すなをにあひとゝき候、まことにゑんはうの心さし、よろこひにたへかね候、このよしほのめかし候てあるべく候、次ニとうかうの又五郎殿、なかく、こゝちれいならすましく候間、いろくやうしやうをつくされ候へとも、そのしるしもなく、ちかきほとにはてられ候、いまたなんしなともまうけたまへぬさきに、世をはやうしたまふこと、申てものこりおほきことまてに候、そもしあねこのしうたん、中く申もおろかに候、

御すいもし候へく候、かねてハちんかう一きんをくりま
いらせ候、これしきながら御をとつれのしるへを、いさ
ゝかあらハす計候、よろつめてたく、

誰ニても

まいる申給へ

〇三六七 曾木新左衛門書状

曾木幡磨(播)

右、元龜三年壬申五月四日、伊東家と於木崎原ニ合戦之
時戦死、六拾一才、新左衛門為ニハひゝ大ぢニて候、

曾木越中

右、黄門様へ御産弓上候、黄門様御存命之内、有川淡
路殿ヲ以御産弓上候ハ新左衛門先祖ニ而候哉と御尋御座
候、我等之先祖越中と申者ニ而御座候、越中跡ハ曾木利
介と申候て、我等いとこニて御座候間、帖佐迄ハ御奉公
申候へ共、于今ニ絶申候而無御座候由、淡路殿ヲ以申上
候、戦死仕候幡磨(播)と越中ハいとこニ而御座候、ケ様之儀
も入儀ニ候ハ、と存書立申候、不入儀ニ御座候ハ、不

苦候、平田清右衛門迄御尋可被下候、以上、

八月十六日

曾木新左衛門

有川長左衛門殿

「ハリ紙」
「文書」
十一

「ハリ紙」
「加治木」
曾木新介

〇三六八 島津惟新義書状拔書

二三六八の上

『慶長十八年、御下様へ爲人質御上洛之時、惟新様八月三日之御状之内
拔書』

此外上井二郎さへもんのせう・かまちひつちうのかみそ
うあん・なんかうあはちのかみ・そう木五ひやうへのせう
をはしめ、このたひの御供しんらうのいたり、中々申
もおろかに候、諸事わたくしのかへりミなく御奉公、ひ
とへに頼存よし、一々おほせきかせられ候て給へく候、

二三六八のこ

『同十月十日之御状之内拔書』

そうあんわつらひかましく候哉、めしつかはるゝ人すくなく候處、笑止存候、それにより五ひやうゑのせう一節めしとゝめられたきよし、うけたまわり候、まことに五ひやうゑ事ハくミさきにて申付、あからさまにのほせ候条、よろつ大儀に存へく候へとも、おほせらるゝ事候まゝ、その通わけて申きかせへく候条、御心得のために候、

〇三六九 曾木新介上書留

留

私先祖曾木播磨儀、 惟新様木崎原御合戦之時御供仕、

御側近罷居候処ニ、御楯持候者矢ニ中リ申候故、播磨下

人^名弥右衛門と申者走寄、御楯ヲつき申候処ニ、敵者人抽

参候而 惟新様御甲を切はつし、弥右衛門頭ニ切付申候、

其時播磨儀も戦死仕候へ共、弥右衛門儀ハ御楯持候而御

前へ罷居候ニ付、主人之射死^戦をも乍見為罷居由候、御一

戦之後疵御尋被遊、御菓拜領仕候、且又於飯野^{就夫}弥右衛門

御前ニ被召出、御酒并青銅百疋被下、於加治木も両度被

召出、御酒・青銅為被下由候、弥右衛門儀八十餘才迄存

命ニ而罷居候故、古老之者共覚咄申傳候、其外孫ハ至只

今私家来ニ罷居申候、

右之儀、何欵御用にてハ有之間敷候へ共、申傳之儀ニ

候故、書付差上申候、以上、

閏四月朔日

曾木新介印

〇三七〇 谷山角太夫口達留

〔包紙ウハ書〕
熨斗目着用之儀至殿より仰渡之写

角太夫殿御口上相添

「

写留

両家者熨斗目着用之儀ハ、無役ニ而も熨斗目ニ而

御目見仕候場所ニ而有之候へハ、可致着用候、其上与頭

之内 御目見被仰付候節ハ不洗物ニ而候へとも、右両家

ハ熨斗目着用ニ而 御目見可有之事と、彈正殿被仰候通、

谷山角太夫殿より 兵庫様江可申上之由、辰五月十五日、

濱田為左衛門承候、此旨為左衛門より田之浦へ参上仕

申上候、

〇三七二 曾木隆棟覚書

文化十年酉十一月六日

重豪尊公、長年寺江為 御參詣御船手江被遊

御光儀、隆棟并白尾間宮

御幼年之節御側相勤候御取訳を以、御内ニ而金子二疋

宛拜領被仰付候旨 今和泉

忠厚公御承知ニ而
何公より頂戴被仰付、冥加至極難有御礼申上候、

〇三七二 曾木某口上覚写

(包紙ウレ書)

「口上覚写」

口上覚 留

私事、祖父曾木新左衛門代より高六百四拾四石四斗一升
四合餘御免ニ而持来候處ニ、借銀大分ニ有之候故、本物
返ニ御物へ差上度之通、先年願出候へ共、御時節柄不相
達、無是非右高之内百五十石相拂、速御心付申。其後弟新六へ分地

をも仕候ニ付、大分ニ減少仕候、依之願ニ存申候へ、至

後年子孫代ニも買地仕合御座候へ、何時ニ而も本高之

員數六百四十四石四斗一升四合餘ニ罷成儀御免被仰付被

下度奉存候、私老身之儀ニ御座候へ、右之願蒙御免、

安儲仕度存申候条、其趣を以宜被仰上可被下儀頼存申候、

以上、

丑十月十八日

〇三七三 曾木五兵衛覚書

覚

一 享保六辛丑年二月九日

繼豊公、初而御下向ニ付、二月九日鹿兒嶋假屋へ初而御下向ニ付 御光儀之節、

曾木弥五左衛門・同姓五兵衛重衛御太刀進上ニ而 御目

見、御奏者新納左京殿、

一 享保九甲辰年八月八日、曾木五兵衛嫡子甚吉重長、

久季公御直元服加冠書ニ新助と被相改、二種一荷御太

刀馬代銀沓枚進上、其時 御脇指一腰被下候長一尺、薩州之住

國平作、長沓尺三寸

一 享保九甲辰年九月十一日

太守繼豊公御光儀之節、役人并諸役人御目見仕来候得共、別儀を以此節へ不被遊

御覽候、雖然弥五左衛門事者、於御城、御太刀進上

仕御目見被仰付者之儀候故、御覽可被遊旨被仰出、伊

集院權右衛門殿・谷山角太夫殿より右之趣被仰渡、奥

より御休息之間へ被遊 御入候節、十二帖敷にて御通

懸ニ被遊 御覽候、假名御披露伊集院權右衛門殿、

一 享保十一丙午年九月廿八日、曾木五兵衛實與家督 御目

見 御太刀進上青銅百疋進上、奏者川上縫殿久盤殿、

但奥御書院、支度熨斗目・長上下

三 享保十年乙巳年五月、重之字、實之字ニ相改、嫡家菱刈

孫兵衛實詮證文有之、

右、柏原方より相調置候也、

四月六日

曾木新介家来肩書名字願之儀、加治木役人各次書を以被

申出、評定書へ御伺申上候處ニ、結構成由緒書ニ而者有

之候へ共、此節之儀へ如本之手札可被成候、願不相違候

間、其段可被申渡候、但口上書相返候、

札奉行所印

寅

九月十七日

渋谷次郎左衛門殿

黒田勘左衛門殿

〇三七五 曾木新左衛門日帳抜書

(本文書ハ一九二号文書ト同文ニツキ省略ス)

〇三七六 島津光久書状写

(本文書ハ三〇五号文書ト同文ニツキ省略ス)

〇三七四 札奉行所覚写

覚

〇三七七 島津義弘書狀写集書

1 島津義弘書狀写

此頃者音信不通、定而弥御奉公可為辛勞与存候、然者對
妙圓寺慮外仕候伊集院之内谷口名之肝煎、何程之嘆ニ被
仰付候哉、其後菟角我等者不承候、貴所彼入組之使為被
申儀候間、様子為可承用一行候、恐々謹言、

(新納久徳)
遊吉甫

2 島津義弘書狀写

尔来絶音問背本意存候、併非心疎候、仍而越州様御普請
ニ長々御辛勞之儀共、申も中々疎ニ御座候、定而此頃者
可為御帰國哉と存事ニ候、就其、自陸奥守所以使者被得
御意候条、越州様御無音ニ罷過候通、以書狀雖申入度候、
且隠居、且極老之式ニ候へハ、彼是結句御六ヶ敷可御座
候与存致遠慮候、老躰事も今日迄ハ存命有之事候、此由
越州様へ能様ニ可預御取合候、然者忤家之儀、國習ニ而
何事も油断而已ニ押移事候条、上方之御仕合、更心遣此

御事ニ候、誠乍不始儀、陸奥守事、不被思召捨弥被懸御
目、當家無恙連續仕候様ニ御指南奉頼之外無他候、此等
之趣、可然候様ニ時々御取合所仰候、猶期後音不能詳候、
恐惶謹言、

猶々、貴僧御事、今度此元へ自然御用候而御使ニ御
下向候へ候、越州様へ得御意与存、懸御目積儀共
申承度念望迄ニ候、将又先年進入申候葉茶壺茶を持
不申候由承候間、今度一上せ進入申候、是も定而然
々ハ御座有間敷候へ共、先々如此候、若左様ニ候ハ
、又無御隔心可被仰候へ、追而上せ可申候、為御
意得候、

六月九日

正源院

伊勢大内記御傳書

御同宿中

3 島津義弘書狀写

今度者陸奥守為御見舞至遠方被成御下向、誠ニ御懇志之
段不淺存事ニ候、就其我等事、當分逼塞之時候処ニ、態

此元へも被懸御意候儀、畏悦不少候、雖然田舎之故為何

風情も無御座、御残多次第二候、然者此焼之葉茶壺内々

御望之由承候間、御用ニ者立間敷候へとも、有合候間一

ツ令進入候、將又此度得御意、任無御隔心申事ニ候、丹

波焼之本かたつき似申候へんを、何とそ御才覚候而、老

ツ下シ可給事頼入候、吳風成ハ先々可被召置候、丸壺・

ふんりんなどは望ニ無御座候、為御心得ニ候、猶口状ニ

申合候間、不能詳候、恐惶謹言、

七月六日

御使

堀小左衛門

川北勝左衛門殿

人々御中

4 島津義弘書状写

其表へ御下向被成候由、炎天之時分、別而御辛勞之儀、

不及是非候、尤自身罷越可得御意候処ニ、御存之ことく

老躰之故不能其儀候、先以是等之段為可申達用愚札候、

仍而雖輕薄之至候、緞子五端令進覽候、聊補書音計候、

猶期後音不具候、恐惶謹言、

(慶長十九年) 七月七日

長崎三原諸右衛門殿 御使之時分

山口駿河守殿

5 島津義弘書状写

今度御能付宮原主計助被召寄候間、則申付、今日伺公仕

候、然者彼者事、多年一和へ笛之儀致稽古、其驗有之事

ニ候、其付主計助連々申上候へ、別一途御用罷立儀も無

御座候間、弥笛致執心御奉公仕度旨内々申事ニ候、旁可

然事候間、一和へ其段被仰付、相傳之分聊不残指南被仕

候様ニ卒度被加御意、尤ニ存候、猶巨細ハ其身可申上候、

恐惶謹言、

(慶長十九年) 七月八日

御使

宮原主計助

(島津家久) 陸奥守殿 まいる

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」一一二号文書ト同文ナリ)

6 島津義弘書状写

猶々、一昨日江戸より到来御座候、娘孫別而勇健之

由候条、我等満足不過之候、為御心得如此候、

御登山以後御無音、心外之至候、仍我等事、又今朝七ツ

時分より九ツ時分迄寸白出候而、以之外ニ候へとも致色

々、臆而やわらぎ申候、是又可御心安候、然者其元塔之

繪書之事承候キ、何比被思召立候哉、爰元之衆も江戸御

屋形繪書ニ付秋之末ニ者可罷出候条、其内ニ其元被仰付

候哉、於其分ハ可申付候、何共御分別次第ニ候、為御心

得候、恐惶謹言、

(慶長十九年)
七月九日

霧島山
座主御房

御同宿中

7 島津義弘書状写

今度為 御上使長崎表へ御下着之由、早々被仰越畏悦不

少存候、兼而其地へ御下向之儀相聞得候条、自是も以使

札申入候間、定而可得其意候、然者隣國迄幸御下向之儀

候条、此元へも被成御見舞候へく候、左様ニ御座候ハ、

懸御目、数年相積儀共得御意度存計ニ候、猶追而可申通

候、恐惶謹言、

(慶長十九年)
七月十四日 山口殿使者東郷小内記下向之刻、鹿兒島迄
御使新納越後守

山口駿河守殿
(直支)

御報

8 島津義弘書状写

近日者不申承候、仍而今度之大風雖以之外之儀候、其元

社頭塔并寺中何も損不申由、珍重ニ存候、然者塔之繪書

之事承候条、如御日執繪書衆差上せ候、何与脇ニも御好

を以可然候様ニ可被仰付候、将又先度進入申候条書ニ申

後候、霧島御神領ニ一向宗多有之由承及候、若左様候而

ハ笑止ニ存候条、能々御法度被仰付候而尤と存候、是又

為御心得如此候、恐惶謹言、

(慶長十九年)
七月十九日

霧島山
座主御房

御同宿中

9 島津義弘書状写

態令啓入候、仍来廿五日女房衆兩人江戸へ差越申候、中

途心遣之儀候間御守給度候、次ニ犬二疋上遣申候、是も

御守かけさせ申度候条、何も御調候而可預事頼存候、然
者塔之繪之模様老岐清右衛門より書付候而差越申候、先
以手間可入様子ニ而、一段能有御座と存候、國府繪書
之事も申遣候条、御奉公可任由申候、扱者何比其地へ可
参由可申付候哉、御返事次第可得其意候、恐惶謹言、

(慶長十九年)
七月廿三日

猶々、いつも預候状、充所書ニ而候、今よりハ直ニ可給
候、為御心得候、將又御守之儀、静ニ御祈念可被成儀候
間、此使今晚ハ其元へ被召置候、明朝御守可有御持せ候、
次此かたつき此比焼せ申候条、不断之為御茶入進覽申候、
霧島山
座主御房

御同宿中

(本文書ハ「旧記雜錄附録二」二九〇号文書ト同文ナリ)

10 島津義弘書状写

其後者不申通心外之至候、先以其許娘并孫殿勇健之由、
満足不少候、扱々長々之在江戸、御辛勞之儀申も中々愚
ニ候、度々如申盡、江戸之御事ハ日本國之大名衆御差合

ニ而、諸事善ニ付而も悪ニ付而も御沙汰可有之候間、別
而被入念、人にくまれをも不被顧、他國之批判無之様何
も相嗜、御奉公疎意有間敷之由、上下共ニ堅可被申聞事
頼申候、猶重而可申上せ候間不詳候、恐々謹言、

(慶長十九年)
七月廿五日

(久幸)
町田勝兵衛殿

(本文書ハ「旧記雜錄附録二」二八四号文書トホ同文ナリ)

11 島津義弘書状写

五月十一日御料人之御文、六月十三日ニ令下着候、其元
上下共ニ無事之由、珍重此事ニ候、扱々長々之在江戸、
辛勞之至、申も中々疎候、幾度申候而も、江戸之御事者
日本國之大名衆御差合ニ而、諸事心遣之儀候間、各其意
趣を以、他國之批判無之様ニ相嗜、別而御奉公可被入精
事頼申候、此由瑞仙・包丁人、其外御供衆一人も不殘為
各相心得可被申聞事肝要候、恐々謹言、

(慶長十九年)
七月廿五日

蒲地備中守殿

上井次郎(重松)左衛門殿

猶々、就中おくおもてへ立入候中間・小者共へ、右之旨よく被申聞、聊以氣任不仕様ニ、兼日かたく可被申付事、專一候、

12 島津義弘書状写

此比者無音ニ相過候条、企一行候、先以娘孫殿御無事ニ御座候由、尤目出度存候、殊ニ御供之女房衆を始、其外何も御奉公無聊尔之由、満足不少候、弥以江戸之御事ハ日本國之大名衆御差合ニ而、諸事心遣之儀候間、各其意趣を以、乍辛勞他國之批判無之様ニ、中間・小者以下ニ至迄相嗜、御奉公仕候へと堅可被申付候、勿論御為ニ於不成儀者、傍輩知音之上たり共聊無蟲眞曲事之段可被申上候、隨而五兵衛事ハ氣相之由承、自是心遣ニ被存事ニ候、先以為替大窪備前守可差上由、御料人迄申上せ候、於御招引ハ御暇可被給候、左候而下向候ハ、中途之養生能々入念候へてわの事ニ候、此方ニ而の養生はいかやうニも可添心候、然者五兵衛於下向ハ、何篇宗圓一人之

可為辛勞候へとも、無余儀頼申事ニ候間、猶以無用捨各へ吳見可被申事肝要ニ存候、將又兩人之宿元一段静ニ有之事情条、可心安候、猶跡より可申上せ候間不具候、恐々謹言、

(慶長十九年)
七月廿五日

(上床宗門)
江田藤右衛門入道殿

(重松)
曾木五兵衛殿

(本文書ハ「旧記雜錄附録二」二八八号文書トホボ同文ナリ)

13 島津義弘書状写

此中ハ久敷不申通、心外之至候、先以其元娘并孫殿一段勇健之由、誠以目出度存候事候、畢竟貴所誠精之御祈念与満足不少候、弥乍御辛勞可被勵懇祈事、別而頼存候、猶期後喜不具候、恐惶謹言、

七月廿五日

吉祥院

14 島津義弘書狀写

山口駿河守殿
人々御中

比志島内藏允迄之御札令披見、祝着之至候、仍而長々江戸へ被成逗留、此比縣表へ下向之由、御辛勞之儀共候、

16 島津義弘書狀写

殊々江戸・駿府弥御静謐之由、早々被仰知、別而畏存候、然者左兵衛佐殿御事、其元御隙被明、近日御帰宅之由候哉、左様ニ候者、彼是其刻可申承候間、書中不詳候、恐

幸便之条用一書候、仍而其元被相越、別而御辛勞之至候、然者其表之様子如何相濟候哉、承度存事ニ候、巨細五兵衛帰宅之刻可被仰越事待入候、将又其元用所之儀ニ而、堀小左衛門兼日差越申候、是又可被添心事頼申候、恐

々謹言、

(慶長十九年)
七月廿七日

謹言、

相良内藏助殿
御宿所

(慶長十九年)
七月廿九日
御使右同

三原諸右衛門殿

15 島津義弘書狀写

自陸奥守以使者被得其意候由候間、用愚翰候、仍而其元長々御逗留、別而御辛勞之儀共、尤節々以書狀成共可申入處ニ、任無題目御無音背本意存候、然者其表相替儀無

17 島津義弘書狀写

御座候哉、如何与存事ニ候、自然我等式承候而も不苦儀ニも候ハ、其元之様子御報ニ細々示給度存候、猶五兵衛江可得御意候間、不能詳候、恐惶謹言、

(慶長十九年)
七月廿九日 長崎御使山口五兵衛

其後自是社可申入處、預御札令披見本望之至候、先以長々其表へ被成御逗留、御辛勞之儀申も疎々御座候、然者去廿六日、有馬殿其元へ御越着候而、城共御受取被成由、得其意存候、就其貴老事近日中ニ可有御帰宅之旨、尤ニ存事ニ候、将又内藏助殿事、此比御下向之由珍重存候、就中駿府・江戸弥御静謐之由、目出度奉存候、右之通、

遠方迄遮而被仰知候段畏入存候、猶期後音不詳候、恐惶

謹言、

(慶長十九年)

八月朔日

(長巻)

相良左兵衛殿

御報

18

島津義弘書状写

六月晦日之御札、八月九日ニ到来令披見候、本望至候、

先以無何事其地へ被成下着之由珍重存候、然者東國御普

請大方相調申候由、是又早々被仰越、得其意存候、乍不

申猶以其表新敷儀共御座候へ、追々可示給候、余者期

後便不具候、恐々謹言、

(慶長十九年)

八月九日

(島津忠興)

右馬允殿

御返報

19

島津義弘書状写

昨日者被相越遂閑談、本望存候、仍昨日凡如申候、夫錢

之儀惣別他所へ無之沙汰之由、風聞申候、承候分者何方

も飯米さへ相渡候へ、其分ニ而相調候由申候、實所ハ

不存候、然處ニ知行之不寄高下、一月ニ為夫錢銀子六匁

ツ、相渡候由承候、定而無親疎御談合ニ而候半間、今更

不及改易候、乍去若紀州も談合之宛儀無存候者、畢竟

御國之衰微ニ而候条、御為不可然儀坎与存事ニ候、昨日

紀州へ様子蜜々談合候へと申候間、如何承度存用一書候、

自然紀州も同心ニ而候者、陸奥守殿へ以内證貴所可有言

上候、いつもの人にくまれながら御為候条如此候、巨細

返札ニ可得貴意候、恐々謹言、

猶々、乍重言、右之段紀州も貴所も於納得者、近比人

にくまれニ而候へ共、御為候間様子可有言上候、若又

申上にくき仕合共御座候者、此書状被差出、我等申と

候而可申上候、

(慶長十九年)

八月十日

(貞昌)

伊勢兵部少輔殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」一一五〇号文書ト同文ナリ)

20 島津義弘書狀写

御家門様被成御煩之由承付驚入候、如何様之御氣色御座候哉、千万無心元奉存候、愚老儀隱遁之故、連々無沙汰雖申上候、御煩為御見廻如此候、可然之様ニ可預御披露候、恐惶謹言、

八月八日

御傳書

鹿兒島御使

進藤右兵衛大夫殿

21 島津義弘書狀写

貴札令拜見本望之至候、如仰其以來者不得御意、所存之外ニ候、且遠路故、且隱遁之式ニ候へハ、乍存御無音背本意候、併非心底候、仍駿府・江戸弥以御静謐之由蒙仰、尤目出度奉存候、猶期後音不能詳候、恐惶謹言、

八月廿日

松平(定行)河内守殿

御報

22 島津義弘書狀写

如仰其後者不申通本意之外候、仍縣表御隙被明御帰宅之

由珍重存候、就者内藏助殿、此元為見廻被相越、心静ニ申承祝着之至候、餘者追々可申述候、恐々謹言、

(慶長十九年)
八月廿一日

相良左兵衛佐殿

御報

23 島津義弘書狀写

御札令披見候、仍長門殿不慮被成遠行、各朦氣之段察存候、然者三郎殿御家督之儀被仰出、連續之由珍重存候、

就其御太刀一腰・馬代青銅千疋被懸御意畏存候、如承連

々不存隔心候へ共、我等隱遁之故、此比ハ互ニ無音申躰

候、委細御使者へ申入候条、書中不具候、恐々謹言、

(慶長十九年)
八月廿一日

秋月采女(種貞)正殿御返報

24 島津義弘書狀写

其以來餘御無音罷過候条、道甫差上申ニ付、捧愚札候處御懇報、殊ニ水指被懸御意候、此水指之事、内々為承及定而。老後思出ニ是ニ而教寄仕慰可申与御道具ニ候、可被成御秘藏處ニ被下候儀。。畏悦不少

候、謹之御事ニ見苦敷ふるひたる手前ニ而、一服進上申候ハと存計候、猶道与口上ニ可申上之通申遣候条、不能詳候、恐々謹言、

八月廿八日

(織田長益)
有楽様

参人々御中

(本文書ハ「旧記雜錄附録二」二五二号文書トホ同文ナリ)

25 島津義弘書状写

今度道甫罷下候刻、御状預り風爐被懸御意、殊更被入御念候故、成比一段見事ニ出来候て祝着仕候、仍口上ニ被仰下通具ニ承届候、扱ハ与風爰元御下向与思召候哉、先以大慶不過之候、雖然極田舎萬事不如意候事、可為御推量之外候、片時も御逗留成間敷候与存候、能々御思案無之候而者可有御後悔候、先不取最為御見廻御下向候へかし、今一度懸御目、積齋申承度念望迄ニ候、猶於様子者此使口上申含候条不詳候、恐々謹言、

八月廿八日

宗善老

まいる人々御中

26 島津義弘書状写

其後ハ不申通候、仍去年ハ道甫差上候ニ付、有楽様へ餘無沙汰仕候条、以書状申入候處、貴所道甫同心を以様子被申入候由、別而令祝着候、殊有楽様より名物之水指送給候、誠我等秘藏此事ニ候、則忝通今度書状ニ而申上候、近比乍大儀貴所持参候而、懇ニ御礼可被申上事頼存候、猶巨細ハ此使可申候間、書中不具候、恐々謹言、

猶々、道甫罷下時分、奈良漬桶二ツ被送越候、慥ニ相届畏存候、

九月三日

田邊屋
道与

御宿所

(本文書ハ「旧記雜錄附録二」二八五号文書ト同文ナリ)

27 島津義弘書状写

此比ハ久絶音問候、先以其元弥無事ニ可有御座与存候、寔長々在江戸別而辛勞之儀共、申も疎ニ存候、仍而其地御廣間出来申ニ付而、繪屋宗左衛門罷下之由候条、從爰

元も老岐伊与・伊東志摩介兩人申付差上候、然者繪師利兵衛事、對宗左衛門種々理屈共申人ニ候条、必定此度も可為其分かと存候、然間敷候、其元左様ニ無之様ニ可被申付事於我等頼申候、將又此邊無相替儀候、此比隣國之儀、吉利支丹御成敗之事稠敷被仰出、為 上使山口駿河守殿長崎へ下向ニ而、于今被成逗留事ニ候、就其彼表人数入事ニ有之候ハ、從 陸奥守殿可被仰付由御承ニ而、此元内々相誘、長崎之御注進次第可被成御張用意候、是又為心得申上せ候、余ハ期後便不具候、恐々謹言、

(慶長十九年)
九月三日

町田勝兵衛殿

28 島津義弘書状写

此比者不得御意候、仍其表長々御逗留、別而御辛勞之至候、尤節々以書状成共可申通處、隱遁且其上極老故、乍存御無音背本意存候、餘齎ニ罷過候間、陸奥守所より以使者被申入之由候条、雖無題目候令啓入候、猶追而可申述候、恐惶謹言、

猶々、琉球酒壺老ツ令進入候、聊御志計ニ候、

(慶長十九年)
九月三日

山口駿河守殿
人々御中

29 島津義弘書状写

通久不申談、仍江戸屋形之廣間出来申ニ付而、繪之儀御頼被成、遠路下向之由別而辛勞之儀共候、就其老岐伊与・伊東志摩介差上せ候条、乍不申何篇可被加指南事專要ニ存候、然者利兵衛罷下之由候、彼人事ハ如存知連々利屈かましく候間、町田勝兵衛にも今度貴所下向之事ニ候間、内々其通被相心得尤ニ存候由、御書状ニ申越候、然間貴所請取最前為相定繪之分、無異儀被相調、早々可有上洛事可然存候、猶巨細右之兩人可致口達候間令省略候、

恐々謹言、

(慶長十九年)
九月三日

松井宗左衛門殿

まいる

30 島津義弘書狀写

態申越候、仍國分之御上様、餘々御さひしく御入候由承候間、卒度當所へ申請御なくさめ申度存、國分へ其通申候へハ、御返事ニ、惣別此跡ニ相替候而可被召列女房衆なともすくなく、可被御越躰ニも無之由候、然ハ御徒然無極窮屈ニ御座候由聞候条、我等國分ニ罷越、かるくと御食を上申度候、如何可有御座候哉、紀州へちと内證談合候而、様子細々返礼ニ可承候、恐々謹言、

九月四日

御使萩原万吉

伊勢兵部少輔殿

(貞皇)
(本文書ハ「旧記雜錄附録二」二八六号文書ト同文ナリ)

31 島津義弘書狀写

為重陽之御祝儀御使札、殊ニ御小袖一重被懸御意候、乍不始儀遠路迄御心付之通、誠幾久敷可申承与祝着此事候、

一永々之御在江戸、殊更御普請ニ御辛勞之儀共、中々申愚ニ御座候、併御請取之御普請場所から能御座候而、

御手前之儀、大方被仰調之由目出度存事ニ候、左様候

ハ、早々御仕廻被成、近日可為御下向候条、旁其刻可得御意候、

一幾度申候ても娘孫之事、在江戸仕候處ニ、別而被添御心、刺節々被成御見廻之通畏入存候、此由娘方よりも懇申下儀ニ候、誠ニ辱儀共、書中ニ而御礼不申得候、弥田舎者之儀候間、諸事心遣ニ存候条、不被御心可被加御指南事頼存候、

一下野國佐野修理殿事、所替之由、此比被 仰出候哉、

是又被仰知其意存候、猶御使者可有演説之条、不能

詳候、恐惶謹言、

九月九日

寺澤志摩守殿

御報

32 島津義弘書狀写

其以来自是社節々以書狀成共雖可申入候、隱遁之式候へハ乍存押移候處、遮而御使札、殊蠟燭三百挺被懸御意候、遠路御懇情之至畏存候、然者當春以来江戸御普請ニ被成

御詰、此比御下向之由、御辛勞之段申も中々愚ニ御座候、猶御使者可有演説之条、不能詳候、恐惶謹言、

(慶長十九年)
九月十一日

松浦肥前守殿

御報

33 島津義弘書状写

其以来自是社無音ニ罷過候處ニ、遠方迄遮而預御懇札畏入存候、先以両御所様一段御息災被成 御座由、目出度奉存候、扱々長々之御在江戸与申、殊更御普請ニ御苦勞之儀共、申茂中々疎ニ御座候、併大方御仕廻被成之条、近日可為御下國之由玆重ニ存事ニ候、委曲其節互ニ可申承候、恐惶謹言、

九月拾七日

使飛脚

伊勢修理太夫殿

34 島津義弘書状写

一昨日者御使被罷越、得閑談祝着存候、陸奥守殿御咳氣如何御入候哉、承度存候、定而早々可為御快氣と存候、

將又右如之儀、昨日口柄細々聞せ申候、惣別媒介之儀共、

存候もの無之由候、只俄等之分別ニ而合申たると聞得候、

是又為心得之如此候、かしく、

(慶長十九年)
九月廿五日

(御使脱カ)
牧助市

別府舍人佐殿

(本文書ハ「旧記雜錄後編四」一一七五文書トホボ同文ナリ)

35 島津義弘書状写

其後者不申通御無音之至候、先以其地へ長々御逗留、御辛勞之儀共察存候、然者此比其表へ従方之御人数被着揃様ニ、爰元風聞申候間、如何承度存、從陸奥守使者を以彼是被得御意候条、御入魂頼存候、如御存知、梓家ニも人数等之儀、最前々より被仰付候条、此中致其用意、内々御注進相待躰候間、其涯替儀共御座候者、無御油断前廉ニ早々可被仰越儀頼存候、誠ニ隣國之儀ニ候処ニ、若御注進遲御座候而、此方之人数其管合不申候へ者、陸奥守心遣之儀、不過之候条、旁其心得所仰候、猶委細御返事可得其意候、恐惶謹言、

(慶長十九年) 右之使從鹿兒嶋龍越ニ付、兵部少輔殿迄
十月二日被遣候、使池上宮内左衛門

(直本)
山口駿河守殿

36 島津義弘書狀写

先度ハ内藏助殿内俄之煩火急ニ相聞候条、陸奥守致談合
存分之通、日野内膳正・五代勝左衛門を以申入候處、御
返事之旨細々承届、得其意申候、為右之御礼、遮而預使
札御懇勸之至畏存候、猶委敷儀者、此使内膳正を以申候
間、彼口柄被聞召届尤存候、仍鍵之柄木内々望ニ存候間、
五代勝左衛門へ才覚仕候様ニと申候處、聞付させられ、
則舎人子之鍵之柄二本被懸御意、御懇志之段、別而祝着
之至候、此比鍵を儲候条、聽而仕立可申与本望ニ存候、
餘者使者可有演說候条、不能細筆候、恐々、

(慶長十九年)
十月四日

使者犬童長介

(頼兄)
相良清兵衛殿御返報

37 島津義弘書狀写

先度者預御懇札細々令拜見候、其刻陸奥守同前ニ御報可

申入之處ニ、愚老事隱遁之故、當分遠方へ罷居ニ付不能
其儀候、誠以弥致老屈、連々乍存御無音押移背本意存候、
此等之通為可申述企使札候、猶口上ニ可申入候条不詳候、
恐惶謹言、

猶々此者若輩ニ而候へとも、幼少より召仕候間進入
之候、御用等之儀候者、不被置御心可被仰舍候、自
然我等使と候て、直ニ様子被聞召候ハ、極田舎者
之事候間、口柄被聞召分間敷候条、無御隔心人へ被
成御聞尤存候、以上、

十月九日

使大学坊

(細川忠興之)
羽越州様人々御中

38 島津義弘書狀写

尔来不申通、心外之至候、如御存愚老事蟄居之故、越州
様へ以書状も不得御意も、餘久敷御無音ニ罷過間、用使
札候、其元可然之様ニ御取合頼存候、猶此使可申入候条
不具候、恐々謹言、

十月九日

正源院床下

39 島津義弘書状写

尔来御無音背本意存候、仍去八月廿八日、其元以之外大風ニ而候由相聞驚存候、御屋敷之御普請等損不申候哉、如何、為可承企一行候、然者娘孫在江戸仕候ニ付、連々別而被添御心之由承、序次第書中ニ不得申候、殊ニ今度之大風、早々為御見廻預御使者候通、娘所より細々申下候、殊ニ于今不始御懇情之至、御礼難申謝存候、弥公儀可然様可被加御意見事、偏奉頼之外無他候、猶期後音不能詳候、恐惶謹言、

(慶長十九年)
十月十三日

使奥関介

(福島正則)
羽柴左衛門太夫殿

参人々御中

40 島津義弘書状写

其以来無音心外之至候、仍去八月廿八日、其元以之外大風ニ而候つる由相聞、寔以驚存候、御屋敷之御普請等如何、損不申候哉、為可承企一行候、然者娘孫在江戸仕ニ

付、連々被添御意之由、大慶不過之候、殊更大風之刻、

御自身早々預御見廻、別而御懇之通、娘所より細々申下候、于今乍不始儀辱段書中難申謝候、弥無御用捨公儀可

然様可被加御指南事、偏々奉頼存之外無他候、猶期後音

不詳候、恐惶謹言、

(慶長十九年)
十月拾三日

寺沢志摩守殿

(広書)
御報

〇三七八 脇指拵書

〔包紙ウハ書〕
「脇指拵書」

覚

脇指一腰 薩州住國平作
長一尺三寸

一目貫靄龜竹金銀切交

一小柄右同

一鉤一重金

一切羽鷗目金

一鮫白

一鞆黒塗

一下緒

一小刀江州高木住正真

一袋純子

以上

〇三七九 朝鮮役御供衆書上

〔端裏書〕
「朝鮮役

御供衆」

文祿元年 壬辰三月

高麗入初陣但御坐船遅参ニ付、幸侃船にて對馬迄御渡海

久保公御坐船御供衆

中野甚右衛門

五代助太郎

伊地知民部少

曾木弥五郎

平山作右衛門

大乗坊

村尾与五郎

右、同時御坐船遅参ニ付、敷根藤左衛門殿船にて、對馬

迄御渡海

兵庫様御座船御供衆

鎌田少右衛門

上床藤右衛門

土持権兵衛尉

伊勢弥九郎

大田吉兵衛

山崎助右衛門

東郷源四郎

古江新六

〇三八二 色紙

(本文書ハ省略ス)

〇三八三 墨画

(本文書ハ省略ス)

〇三八四 島津久光漢詩・和歌(卷子)

主人不相識

偶坐為林泉

莫謾愁沽酒

囊中自有錢

徳洋書

〔ハリ紙〕
〔文書〕
八

〔ハリ紙〕
〔加治木〕
曾木新介

十月十五日

〇三八〇 漢詩

(本文書ハ省略ス)

〇三八一 和歌

(本文書ハ省略ス)

心遂南雲逝

身隨北雁事

故鄉籬小菊

今日幾花開

徳洋書

去國三巴遠

登樓萬里春

傷心江上客

不是故鄉人

德洋書

雨濺墜庭翠

暈新團々匝地

似錢勾好與閑

人買吟思何須貯

積濟清貧

右青苔邦行題

問余何事棲

碧山咲而不答

心自閑桃花流水

杳然去別有天地

非人間

德洋書

鶉河

ゆふやみに数そふ

波のかより火や

月をもぎせの

鶉舟なるらむ

楓岸然と落葉

多洞庭秋水晚

事波乘興輕舟

無近遠白雲明月

弔湘娥

德洋書

命

除夜

今年纔一夜孤館

自無鷺獨對匏樽

酒燈前慰寂寥

□ (印) (印)
□ (印) (印)

千紅萬紫盛春時憐

看閑堦艷影移魏主園

中競眉黛楚王臺上鬪

腰婆葉繁家豎掃還至

枝茂邨臺打回持最是

輕風隴月夕晴香故

倍一分肌

右花影 邦行題

唐にしき

秋のかたみや

たつた山

ちりあへぬ枝に

あらしふく也

神樂

くりかへす聲も

さむけし外山なる

まさきのかつら

長き霜夜に

瀧花

桜さく峰より

落る瀧つ瀬や

みなハも花の

香に匂ふらん

□ (印)

雪中眺望

倦簾十星雪漫々

皎潔如花壓翠巒

把盞偏憐塵外趣

留飲詩就與愈寬

印
印

寄神祝

神路山立しもしるし

みやはしら

千世もうこかぬ

國のためしに

瘦骨稜層錦

鬚摧力衰神弱

正堪哀伏櫪從來

宜惠愛龍鐘何

敢比驚駘

右老馬 邦行題

印

歳旦

雪後三元日韶光

自是新更斟椒栢

酒偏喜太平春

印
印

〇三八五 曾木氏略系図(卷子)

曾木氏畧系圖

〇重知

彌五郎 新左衛門

〇慶長十五年庚戌誕生、母豊州之瀧田九郎女志賀播磨守之

外孫也、瀧田九郎於日州高城戰死之後、外祖父播磨守自豊後携來于薩州、而后嫁重松、

〇自嚴親重松從 義弘尊公移居于加治木、住于爰、

〇重知仕 兵庫頭忠朗公、補家老職、

〇重知屢 奉近謁于 大守光久尊公、蒙恩言惠賜、

〇承應元辰年霜月四日、光久尊公以齊藤監物賜

御鉄炮之雉キジ二羽、

〇明曆二年申八月廿六日、於 忠朗公之館加治木

光久尊公賜御肩衣袴御、同廿九日重知有微恙在

床褥、時 光久尊公ノミ在小村爲問其疾、遣鎌田新左衛門賜柿一籠、

○同年小春十三日、光久尊公入御於 忠朗公之

慶府館、御歸城之後則以財部淡路拜領織筋一端、忝添賜 御自筆之御書、珍拜敬戴而笥藏之、

○萬治元十二月二日、拜領 御鉄炮之雉、上使有村市郎兵衛、

○寛文九年卯二月十八日、光久尊公將令弟市正

忠廣主賜白銀壹葉、此外拜領物不遑枚記、故略焉、

○明曆元年 光久尊公以忠廣主被 高命曰、重知之三子之内一人候慶府、奉仕焉、依之使三男忠

諸奉事 太守公、故忠諸拜謁 光久尊公未幾令忠諸爲川上五兵衛忠盈之養子、

○延寶三年乙卯二月十三日死去、年六十六、法名即安徹心居士、葬吉祥寺、

○重澄

仙千代 弥五左衛門 新左衛門 二左衛門

○寛永十二年乙亥四月廿八日誕生、母白坂將監女、

○父重知及晚年訴辭家老職於 忠朗公、以故觸

光久尊公之高聞、以重澄代之守其職、

○重澄從 兵庫頭久薰公在慶府、時

光久尊公有高命曰、可改名新左衛門、市正忠廣主所傳之、故號新左衛門、

○光久尊公賜織木綿一端於重澄二般、不記其年月、

○重澄每載献上 御樽代青銅百疋于 光久尊公、奉祝

新春、或奉賀從江府 御歸國之祝禮、歲除亦奉

獻肥後織木綿一端、

○元禄八年乙亥八月十八日死、享年六十一、法號

祥林本吉居士、葬于吉祥禪寺、

頼朗

新三郎 久太郎 新右衛門 孫六 ○母同、

○桑畑久右衛門頼増猶子、

忠諸

式部卿 翁介 五郎左衛門 新兵衛 采女

○母同、
○河上五兵衛忠益養子、

仙千代

夭亡 ○母有川長左衛門貞鎮女、

○重喬

新三郎 新介 彌五左衛門 夢宅

〔ハハリ紙〕
元禄七年甲戌迄傳記在系圖

〔ハハリ紙〕
萬治二己亥六月十一日誕生、母有川長左衛門貞鎮女

○享保五年庚子六月朔日、重喬登 慶城、奉獻

御太刀一腰馬代青舛百匹、初奉拜謁 太守吉貴尊

公、川上縫殿久盤主奏達之、是非 久季公兼

日之訟、因 尊命也、自是當家子孫世賜繼日

家統之時、一宜奉拜謁 太守公、國老島津内

記久命主傳 尊命於 久季公、委錄別楮、且

進上御刀一腰無銘長二尺四寸七部半於 久季公奉謝之、

公賜金子三百匹、其外至妻子恩賚亦多可也、

○同六年辛丑二月九日、 太守繼豐尊公光賁

久季公之慶府館之時、重喬奉獻御太刀一腰馬代青舛百匹奉拜謁 繼豐尊公、新納左京久敦主奏達之、

○同九年甲辰九月十一日、 繼豐尊公光賁

久季公之慶府館、家臣諸吏有故不能奉拜謁、

然重喬者得觸 電覽、伊集院權右衛門盛央主

奏達之、

○同十年乙巳五月、家嫡菱刈孫兵衛實詮主曰、

諱字宜避重字改用實字、附與證帖、則改實直、

○同年十二月二十二日、以老訟而免容家老職、

致仕號夢宅、進上御酒肴於 久季公拜謝之、

公賜脇刀一腰治工肥後守法城寺橘吉次長一尺四寸三部

○元文三年戊午七月二十二日病死、享年八十、

法號本海湛然居士、葬于吉祥寺、

— 女子

二渡伊左衛門重昌妻 ○母同、

— 女子

市来源右衛門家年妻 ○母同、

—重矩

新六

○延寶五丁巳年三月七日誕生——母同、

—新平

夭死

○重皓

初重治 翁介 五兵衛 遊庭

〔ハリ紙〕
○元祿九年二月二十六日迄傳記在系圖

〔ハリ紙〕
○延寶六戊午年十一月六日誕生、母市來八左衛門家寬女

○享保六年辛丑二月九日、太守繼豐尊公光實

久季公之魔府館之時、重堅初重與父同奉獻御

太刀一腰馬代青峽百匹奉拜謁 繼豐尊公、新納左

京久敦主奏達之、

○同十年乙巳五月、與父同避諱之重字改實興、

委錄實直之譜中、

○同年十二月二十二日、久季公使實興賜家統

補家老職、

○同十一年丙午九月九日、於 加治木館進上御

太刀一腰馬代銀十兩、且進上同品、拜謝賜家

統與役職之忝、

○同年九月二十八日、從父實直之先躰、實興登

魔城、奉獻御太刀一腰馬代青峽百匹奉拜謁

繼豐尊公、拜謝續家統之儀、川上縫殿久盤主

奏達之、是因 久季公兼日之訟也、且進上御

太刀一腰馬代銀一葉於 久季公拜謝之、其外

進賜之品物多可也、故不録、

○同十九年甲寅十月六日、久門公相續御家統、

賀而賜脇刀一腰治工備州長船經家、長一尺八寸七部

寬延二年己巳壬巳五月五日、以老訟而免容家老職、

進上御酒肴於 久門公拜謝之、公賜肩衣袴カサキヌハカマ

及衫カサシラ一領、

○同年六月三日、實興致仕、號遊庭

○寶曆六年丙子十一月十六日卒、享年八十二歲、

法號遊庭達道居士、

—女子

江田善兵衛國昆妻 ○母同、

重年

新五郎

○元祿元年戊辰十月朔日誕生——母同、

翁助

夭亡 ○母家嫡菱刈孫兵衛重敦女、

女子

夭亡 ○母同、

女子

○母同、

○家嫡菱刈藤馬重之訟而免許為養女、

○初嫁福崎五郎左衛門重富、離縁、後嫁貴島曾

右衛門兼致、

女子

夭亡 ○母同、

女子

夭亡 ○母同、

○實弼

初重長 甚吉 新助 新左衛門 彌五左

衛門

○正徳四年甲午七月十四日誕生、母同、

○享保九年甲辰八月八日、於 加治木館甚吉首

服、久季公加冠之、改新助重長、進上御太

刀一腰馬代銀十兩二種一荷、拜謝加冠之忝、

公賜脇刀一腰治工藤州住國
平、長一尺三寸、父實興進上御太

刀一腰馬代青鉄
百匹於 公拜謝之、

○元文四年己未八月五日、吉貴尊公之君夫人

卒去、故同月二十三日實弼為 久門公之吊使

發薩府、十一月二十五日著于江都芝邸、奉窺

大守繼豐尊公之御安否也、

○寛延元年戊辰九月九日、太守宗信尊公帥疏

球使節赴江都、故 久門公陪從 尊駕、實弼

供奉勤番
頭役、公又陪從 繼豐尊公之 尊駕發

江都芝邸、同二年癸巳四月二十三日歸薩府、

○同二年六月三日、實弼續家統、同月十一日、

於 廳府館補家老職、九月二日進上御太刀目
錄於 久門公、拜謝賜家統之事、

○同三年庚午三月二日、善次郎公繼續御家統、

賀而賜脇刀一腰、治工鏡寸尺當分難相知ケ有之
候間、相知候ハ、重而可書入候、
右鉢御考を以御、（ハリ紙）
明置可被成候、三月十五日、公來賁實弼之

加治木宅、進上盛膳及御太刀一腰、青駄、 公

亦白銀十兩時服一領賜之、其外嚴父妻子拜賜
之品物各有差、シテ

○寶曆二年壬申二月十五日、實弼登 廳城奉獻

御太刀一腰、馬代青駄、 續家統之後、依家例初

奉拜謁 大守重年尊公、町田郷九郎久張主奏
達之、是因 善次郎公兼日之訟也、同月十八

日進上盛膳於 公及 萱堂奉謝前條之事、

○寶曆十年庚辰十二月十三日卒、法名自覺本然
居士、

— 女子

○母同、

○初嫁調所八左衛門恒堅、有一女、離縁、後嫁

貴島五十右衛門兼倫、有一男而病死、

— 實盈

— 彦九郎 彌右衛門

○享保九年甲辰十月十日誕生、母同、

— 女子 日野五郎右衛門資貞妻

○元文二年丁巳十一月二十日誕生、母内田仲左

衛門政壽女、

— 彌五郎

— 夭亡 ○母同、

— 女子

— 夭亡 ○母同、

— 隆棟 — 始實術 實真

常袈裟 五兵衛 貢

延享元年甲子十月十五日誕生、母同、

寶曆二年甲子十二月十三日、於加治木館常袈

裟首服、

久方公加冠之、改五兵衛實術、進上御太刀一

腰馬代青銅百匹、拜謝加冠之糸、

公賜脇刀一腰長治父實弼、進上御太刀一腰馬代

銀拜謝之、

同十一年辛巳八月二十八日、實術登 鹿兒島

城奉獻御太刀一腰馬代青銅百匹、依家格初奉拜謁

太守重豪尊公、北郷民部久傳主奏達之、

明和三年丙戌正月二十三日

太守重豪尊公 御參勤之節、大口筋御通行、

加治木館御止宿、依先例御太刀進上仕

御目見被仰付被下度、前以願書差上置候處、

此節者 御目見不被仰付候旨從御家老川田伊

織國倫主被仰付候付、新納仲左衛門時盛・實

術・日野五郎右衛門資貞、從相中一種進上物

仰被付被下度旨奉願候處、御着一折從相中進

上仕候様被仰付、翌廿四日「家格之御取分ヲ

以於奥御書院時盛・実術・資貞一同

重豪尊公 御目見被仰付候、御奏達川上龍衛

親方主、

明和四年甲丁亥正月十一日、於鹿兒島館被補家
老職、

安永二年癸巳九月十五日、「嫡家ハリ紙菱刈下總隆

邑主實術之家紋所與嫡家同様有之度旨以、竹

之輪五笹定紋許給之、」

安永三年甲午二月十八日、

重豪尊公 御參勤、久馮公陪從 尊駕、實

術從到于江都、同十二月十五日、歸慶府、

寛政十一年己未正月二日、

重豪尊公御隱居、

大守齊宣尊公御家督、

久徵公朝東都、實真陪從勤家、同年三月十四

日發芝邸、同五月十一日還薩府、

文化五年戊辰六月十八日、嫡家菱刈木工之介

隆觀主依嫡家近代諱用隆字、當家諱字可相改

旨致承知、從是諱隆字相用來候也、

文化六年己巳四月三日、

齊宣尊公御隱居、

齊興尊公御家督、久照公朝東都、隆棟陪從

勳家、同七月廿一日發芝邸、同九月二日還麿

府、

〔ハリ紙〕
一文化十年酉十一月六日、

重豪尊公長年寺江 御參詣、當所御船手被遊

御光儀、隆棟并白尾間宮 御幼年之砌 御側江相

勤候御取訊ヲ以、御内々 『。島津安藝忠厚賜』 金子二百疋宛拜領

被仰付候旨 忠厚公御承知ニテ頂戴被仰付、冥賀

至極難有御禮申上候、

一文化十一年戊十二月廿三日、以老免容家老職、御

數代多年首尾能相勤御滿祝被 思食上、賀而賜御

上下一具并御腰物一腰、冶工 薩陽土 奧平元安、進上御酒肴

於 久照公拜謝之、

一同十一年甲戌十二月廿八日、願之通隱居被仰付、

號梅淡」

喜八郎

寬延元年戊辰九月八日誕生、夭亡、母同、

女子 赤崎閑林兼雄妻

寶曆三年壬酉十二月九日誕生、母同、

女子 老山四郎右衛門正陽妻

寶曆九年己卯十二月十一日誕生、母同、

女子 夭亡

明和四年丁亥二月九日誕生、母法元休左衛門盛

尚娘、

隆 澄道一初實純 直袈裟 五兵衛

明和七年庚寅九月朔日誕生、母同、

安永九年庚子四月十五日、於治木館首服、

久徵公加冠之、改五兵衛實純、進上御太刀一腰

馬代 青銅 二種一荷、拜謝加冠之忝、

公賜脇刀一腰父實真、進上御太刀一腰馬代 青銅 百疋

拜謝之、

寬政十一年己未正月二日、依

久徵公朝東都、父實真陪從、實純亦從焉、

同年五月十一日還麿府、

文化元年甲子家老席詰御所帶方勤蒙命、

文化五年戊辰閏六月廿三日卒、法名瑞岳祥雲居士、

正辰 初清袈裟 弥助 叶次

安永三年甲午九月十七日誕生、母同、

老山四郎右衛門正陽養子、

隆則 初實則 新次郎 彌九郎

安永九年庚子正月十一日誕生、母同、

〔ハリ紙〕
○文化十三年子四月廿八日永長甚右衛門家跡相續

隆國 初實臣 勇七 矢太郎 杏山

天明二年壬寅十一月十三日誕生、母鬼塚弥五右衛門娘、

〔ハリ紙〕

〔文化六年己十一月十一日卒、法名大道香山居士、葬吉祥寺〕

女子 夭亡

寛政元年己酉四月十八日誕生、母同、

隆亮 初實休 新三郎 翁助

寛政七年乙卯九月四日誕生、母伊地知休左衛門

〔マ〕
娘、

文化四年丁卯五月十五日、於加治木館首服、

久照公加冠之、改翁助實休、進上御太刀一腰馬

代青銅百足二種一荷、拜謝加冠之奈、

公賜脇刀一腰祖父實真、進上御太刀一腰馬代青銅

百拜謝之、

〔ハリ紙〕
二文化十一年甲戌十二月廿八日、久照公相續シ玉フ

家統、號新左衛門、

一文化十二年乙亥十一月十五日、隆亮登鹿兒島城、

奉獻御太刀一腰馬代青銅百足、依家格奉拜謁

太守齊興尊公。』。拜謝家統之儀、小林仲太兵衛主奏達之、

一文化十三年丙子二月十五日、名乘

太守齊興尊公御參勤、大口筋 御通行、加治木館

御止宿、依先例新納仲左衛門隆亮・日野五郎右エ

門從相中。御着一折進上、右三人一同ニ御目見被拜謁公

仰付候

〔ハリ紙〕
一文化十年丁亥六月十四日、於鹿兒島館被補家老職

隆福 初實福 直次郎 藤五郎

寛政十一年己未十二月十六日誕生、母同、

野
辺
文
書

〇一 日向国櫛間院田畠数注進目錄案

▽^④端裏書
「あんでいのもんそ」△

地頭

御使兼留守前安藝守藤原朝朝在判
朝臣

櫛間院

注進 安貞二年御檢注田畠数目錄事

合

水田參佰捌拾柒町陸段貳丈

荒田五十二丁

加川成四反定

常荒六丁七段

年荒四十五丁三段

見作田三百三十五丁六段二丈

損田九十三丁九段中

得田二百四十一丁七段一丈中

野稻畠參段

右田畠数目錄注進如件、

安貞三年二月 日公文左近將監平在判

弁濟使僧

書生散位伴在判

〔裏書〕
地頭方檢注使宗形六郎

於正文者、為上覽請取候也、

檢注使（花押）

〔本文書ハ「旧記雜錄前編一」三五七号文書トホボ同文ナリ〕

〇二 日向国櫛間院年貢注文案

〔端裏書〕
定案 到来文永五年四月廿六日 中平次使 〔入道〕

櫛間院御年貢事

一定田三百二十七丁一段四丈

半分御免 分丁別六十五貫四百三十六文 段別廿文定

一得田二百六十一丁七段二丈

分面付百二貫七十八文 段別三十九文
〔餓肥南郷引懸定〕

半分御免 一桑代十三貫百二十二文

一色革三十枚代十五貫文一段別五百文定

以上百九十五貫六百三十六文

西方九十七貫八百十八文

東方九十七貫八百十八文

此外一方分西方

色革十枚

行騰革一懸夏毛代三貫文

杏一疋代五百文

甘藷一瓶疋

雜紙百帖五十者四月
五十帖八十二月

文永五年三月廿五日

(本文書ハ「旧記雜錄前編」一七〇九号文書トホボ同文ナリ)

〇三 野辺盛忠讓狀

(足利尊氏
花押)

武藏国榛澤郡野邊郷行貞名地頭職并日向國櫛間院地頭職事等者、以子息愛壽丸為惣領讓与早、委細之旨彼讓狀并置文別紙在之、次恩賞事、建武以来軍忠拔群之間、為津戸出羽入道奉行被經御沙汰、已被渡于所付方早、亦彼落居以後、重軍忠猶以異他、仍度々御教書・御一見狀以下

軍忠支證・讓狀等、不殘一通所副渡也、早致申沙汰、於

拜領之地者、為惣領之上者、同愛壽丸可令知行、更不可

有他妨、仍為後日讓狀如件、

貞和五年十一月八日

小野盛忠(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二三〇六号文書トホボ同文ナリ)

〇四 足利直冬下文

下 野邊野五政式

可令早領知大隅國曾於河村拾壹町嶋津上総入道地頭職

同國郡田村小地頭職貳拾町惣檢校入道跡事、

右人為勲功之賞所宛行也、者守先例可致沙汰之狀如件、

觀應三年四月廿九日

(足利直冬
源朝臣)(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編」二四三三号文書ト同文ナリ)

〇五 足利直冬感狀

於日向國致忠節条、尤神妙也、弥可抽戰功之狀如件、

觀應三年十月廿九日

(足利直冬
花押)

野邊野五殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」二四五号文書ト同文ナリ)

〇六 島津氏久書状

野邊刑部大輔盛久申日向國櫛間院・大隅國深河院北方事、
盛久相傳知行之段無相違候、安堵御教書所望仕候、可有
申御沙汰候哉、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

應安八年二月廿五日

(島津)
越後守氏久(花押)

進上 齋藤六郎左衛門入道殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二八一号文書ト同文ナリ)

〇七 平氏並北条氏系図

1 平氏系図

(前欠)

□□ (經盛力)

家盛 左馬頭從四下
母修理權大夫家記

教盛 從二位權中納言
(大脫力)
母大宮權大宮隆女

頼盛 正二位權大納言
母同家盛

□□ (經貞力)

廣盛 刑部權大輔
若狹守
經俊

通盛 從二位
□□ (二位力)
母勘解由次官資宣女
正五位能登守
教經 母同

業盛 母同
忠快 法印
母同

正四下
清經

母中納言□□

四位□

有盛 母同

備中守

師盛

同

侍從丹波守

忠房

常陸介從五位下

宗実

同左大臣經高

内藏頭從四下

基盛

母同重盛

左馬頭正四下

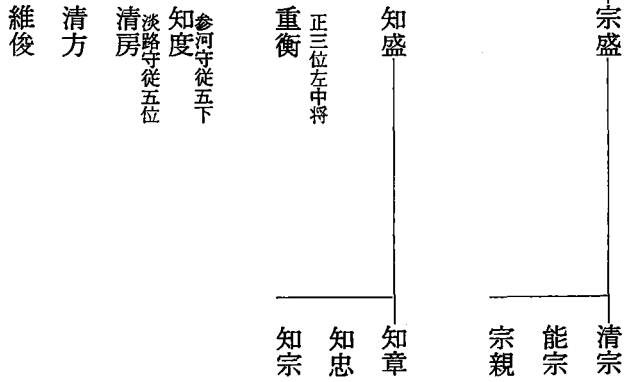
行盛

清盛女子

- 女子 中納言盛範北方
後花山院左大臣忠雅室
- 女德子 建礼門院
安德母祇
- 女盛子 從三位准后
六條攝政小政所
- 女子 大納言隆房室
- 女子 近衛院小政所
- 女子 七條修理大夫信隆卿室
- 女子 後白河院 ■■
- 女子 花山院左府
廊御方

薩摩守
忠度
母丹後守藤為忠女

贈左府範季室
女子 修明門院母儀
母同
從二位
光盛
從二位
保盛



号阿多美禪師
僧聖範

或平直方子維方弟也

或平時範

号北条四郎
時家

和田四郎
時直 時家

号北条三郎
時總
(一ノ子)

号北条四郎大夫
時兼

從五下遠江守

時政

元久二閏七廿出家
建保三正六卒

宗時

号北条三郎治承四年石橋合戰之時殞命了

從四下右京權大夫相模陸奥等守
義時
貞應三六十三卒
六十二

正四位下修權理大夫遠江駿河武威相模等守主殿
時房
或 仁治元正廿四卒
六十六

右馬助

政範 十六
元久元卒

從二位賴家実朝公母

女政子 六十九

嘉祿元七十一

阿野法橋全成妻

女子

稻毛入道妻

女子

上総介源義兼妻
女子

島山庄可次郎平重忠妻後嫁遠江守源義純
女子

右衛門佐源朝政室後嫁中納言國通卿
女子

宇津宮弥三郎藤頼綱妻後嫁天王寺
女子

大納言実宣卿室
女子

坊門中将忠清室
女子

正四下駿河武藏等守

泰時

左京權大夫修理亮
式部小丞
仁治三六十五卒 六十一

修理亮

時氏

寛喜二年六月十八卒
母駿河守平義村女
兼有出家法名觀阿

号武藏二郎

時實

左馬權頭源義氏妻

女子

母同時氏

正五下左近大夫武藏守

經時

寛喜四年四十九
出家同云四一逝去 廿三
母城介藤景女

大夫將監

時頼

五郎
相模守康元二十一廿三
出家法名道宗
母同上

号北条六郎

時定

母重

号大夫律師若宮別當

僧隆政

母讚局執行大郎女

佐々目僧都

左馬權頭

時宗

相模守
太郎母重時女

号北条三郎

時輔

母讚岐局
執行大郎女

朝時 正五下越後遠江等守
或仁治三出家
寛元三四六卒

若狭守泰村妻
女子

武藏守朝直妻
女子
後嫁越後守平
光時

光時 右馬助越後守

時章 尾張守
二郎

備前守
時長 三郎
藏使左
死去

時員 右近大夫將監

宮内少輔泰氏妻
女子
寛元四三天

右近大夫將監時定妻
女子
母同上
寛元四十八天

將軍三位中将御臺所
女子 母同上
宝治元年五十三天

時隆妻
女子

左近大夫將監

公時

号尾張三郎
頼章 逝去

備前三郎

長頼 死去

母義村女

四郎
宗政
母同時宗

七郎
宗頼

左大臣法印殿
僧時敵
忠弟子也

康元二逝去三才
女子
母同時宗

修理亮

時幸

寬元四五廿四出家同年卒

刑部小補中務大夫

教時

母修理大夫時房妻

刑部小補

時基 七郎

律師

僧公朝

寺

女子 修理亮大郎時相妻

時相 大郎

幸繼 次郎

時藤

時久

女子 始武藏次郎時実室後嫁下野守泰綱後離別也

女子 (輔) 宮内少補源泰氏室後離別了

女子 新田三川前司源頼氏妻

從四下駿河相模陸奥等守

重時

建長八二十一出家法名
觀覺弘長元年
十一三死去
六十四

從五下

時継

或母中道平左衛門入道

左近大夫將監武藏守

長時

母入道大納言家
將軍治部卿

次郎八郎後為祖父養子号陸奥八郎
長重

忠時

左近大夫將監

時茂

母女房備後局

左近大夫將監

義政

母女房小納言局

彈正小弼兼左馬權助

業時

母女房備後局

左近大夫將監公時室

女子

母同業時

教時室

女子 夭亡了

母遊女

城介泰盛妻

女子

母同□政(義之)

尾張權守經綱妻

女子 夭亡了

尾張權守經綱妻依姉死去嫁妹

女子

母同教時室

左京權大夫
從五下右馬權頭相模
陸奥等守

政村

或母伊賀守藤朝光女

時道次郎

左近大夫將監

時村

政長四郎

号大夫河内前土左大臣法印嚴忠弟子也

(中欠)

從五下右近大夫將監

時定

出家法名惠仁母同上

法師

僧房快

山母同上

女子

頼氏卿室

女子

長井左衛門大夫時廣妻

女子

城介義景妻後嫁千葉介時胤

女子一条少將云々室後離別了

母同上

遠江守遠時室
女子

実直卿室

女子

女子 出家

應安八年十二月一日書之

〇八 伊集院為久宛行狀

大隅國深川院、此内二(七)町除相殘候分之事、

為料所宛行處候也、然者早任先例領知不可有相違狀如件、

永享五年二月廿四日 (伊集院) 為久 (花押)

飢肥殿

野邊殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一一三三號文書ト同文ナリ)

之旨申之、尤神妙、向後弥可被抽戰功之由所被仰下也、

仍執達如件、

嘉吉元年十二月十二日

(細川持之) 右京大夫 (花押)

野邊(盛七)刑部大輔殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」二七四號文書ト同文ナリ)

〇一〇 某安堵狀案

(前欠)

先知行所々地、悉令改補、野邊刑部大輔入道寬柔領掌不

可有相違者也、

長祿三年七月十六日

〇九 室町幕府御教書

嶋津持久・高木孫三郎・市来太郎以下事、所被加治罰也、

早令合力嶋津陸奥守貴久、可被致忠節、就中對貴久無貳

野邊刑部大輔入道とのへ

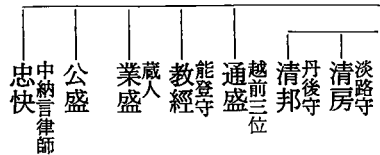
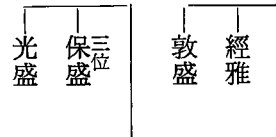
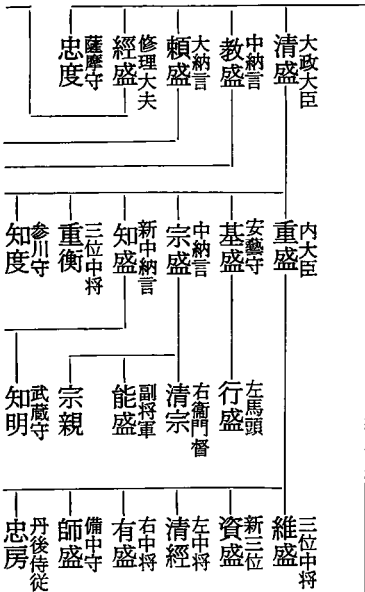
(盛仁)
 (本文書ハ「旧記雜錄前編二」一三七六号文書ト同文ナリ)

〇二 野邊盛仁一流系図

桓武天皇—葛原親王—高見王—高望王
 寛仁二年五月十二日始賜平姓

良望後改号常陸大掾國香
 陸奥守 貞盛
 伊予守 維衡

越前守 正度
 出羽守 正衡
 讃岐守 正盛
 刑部卿 忠盛



知忠
 土左守 宗實

宗平
 盛平

貞盛
 刑部少輔 盛行

左衛門佐 盛綱
 六郎左衛門尉 久盛

肥後守 政式
 左衛門尉 泰盛
 刑部少輔

薩摩守 盛在
 盛久

刑部大輔 盛仁
 良盛
 仁字依可有對
 盛之間、自一
 條殿被改下、
 仍被下良一字
 者也
 三位顯郷書之
 (花押)

〔二條兼良自筆〕
野邊刑部大輔盛仁

法名寛柔一流系圖
加一見訖、

長祿三年八月廿一日〔花押〕

〇二二 野邊盛仁一流系図写

桓武(天(皇)) □ □ — 葛原親王 — 高見王 — 高望王(仁(年) 始賜平(姓))

常陸大掾初者良望(鎮守府將軍) — 常陸大掾 — 陸奥守 貞盛 — 伊与守 維衡

越前守 正度 — 出羽守 正衡 — 讚岐守 正盛 — 刑部卿(卿) 忠盛

大政大臣 清盛 — 小松内大臣 重盛 — 権亮三位中(將) 維盛

門脇中納言 教盛 — 安藝守 基盛 — 左馬頭 行盛 — 新三位 資盛

池大納言 頼盛 — 中納言 宗盛 — 右衛門督 清宗 — 左中將 清經

修理大夫 經盛
薩摩守 忠度

敦盛
經雅

三位 保盛
三位 光盛

新中納言 知盛 — 副將軍 能宗

三位中將 重衡 — 宗親

三川守 知度 — 武藏守 知明

淡路守 清房 — 丹後侍從 忠房

丹後守 清邦 — 備中守 師盛

越前三位 通盛 — 右中將 有盛

能登守 教盛 — 備前守 宗實

藏人 業盛 — 土佐守 宗實

公盛 — 忠快

中納言律師 忠快

女子成經妻

宗平 — 盛平 — 員盛

養父野邊六郎 廣兼

左衛門尉初而号 盛行野邊
此代改平 氏号小野 氏

新左衛門尉
盛秀
左衛門尉
盛繩
六郎左衛門尉
久盛
肥後守
盛忠
政範

薩摩守
盛久
薩摩守
盛在
刑部大輔
盛仁
為上使九州
下向此代也
刑部大輔
克盛

良盛
仁字依可有爵
酌之間自一
条殿被改下
仍被下良一字
者也
三位顯郷書之
在判

野邊刑部大輔盛仁
法名寛柔一流系圖

加一見訖、
長祿三年八月廿一日 在御判之
(一条兼良)

盛長——直盛

〇一三 野邊盛季夢想歌
(懸紙ウハ書)
御夢想歌
野邊宮内少輔
盛季

御夢想歌

雲なき光をそへて月の影
照すさかりや秋の夜の空
永祿十二年九月十六日
夜々

平盛季 (花押)

盛仁の御歌とおほえ申候、
(本文書ハ「旧記雜錄後編」一五二〇号文書ト同文ナリ)

〇一四 佐土原祐音外三名連署書状

態令申候、従先度梁瀬屋しきの事、佗言御申候、致披露
候、御まいらせ候、早々御移候て御奉公候へと可申旨候、
兼又小原ニ御賣候百性、(姓)以次披露申候、悉賣免買免ハ御
計候へ共、御舍弟なども御用ニ御立候間、か様の儀をお
ほしめされ、去年以来兎角不被仰候、是をも新恩ニ御扶
持候よし申せと候、為後日細々書付進之候、恐々謹言、

三月十八日
荒武右京亮 祐音 (花押)
佐土原八郎兵衛 宗置 (花押)
落合淡路守 兼仲 (花押)

長倉能登守

祐省(花押)

野邊讚岐守殿

(ウハ書)

野邊讚岐守殿

(本文書ハ「旧記雜錄附録」一四二九号文書トホホ同文ナリ)

〇二五 細川勝元書状

今之時分雖不似合之儀候、唐鳥并可然齋所望候、自然被懸御心候者、返々可悦入候、次國之儀毎々被申合大友候者可然候、委細尚真鍋太郎左衛門尉可申候、恐々謹言、

六月十九日

(細川) 勝元(花押)

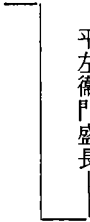
野邊刑部大輔殿

(盛E) (本文書ハ「旧記雜錄前編」二一三七号文書ト同文ナリ)

〇一六 野辺盛長系図並相伝次第書写

盛仁 二男家督

平左衛門盛長



克盛 刑部太輔

盛季 宮内少輔

盛忍 宮内少輔

盛國 久左衛門

盛次 佐市

宗育 明王院

盛房 主計

休左衛門姉北郷讚岐守忠能母、盛仁娘北郷讚岐守敏久室、盛仁長子伊豆守盛与、其子孫三郎、其子駿川守一流野邊源太左衛門、其子孫野村金左衛門之由也、

右承傳候趣如斯御座候、宗育姉妹尾仁左衛門へ嫁、女子

老人持置死去仕候、右仁左衛門女子細山田監物女房ニ而候、佐市血筋之故、監物二男主計事、佐市跡目相續仕候、

六月廿六日

〇一七 從儀師幸雅施行狀

(花押)

淨光明院領日向國柏原財部兩郷収納使職事、所被仰付也、御年貢以下無懈怠可令執沙汰給之由所候也、仍執達如件、

七月四日

從儀師幸雅

謹上 日野祖賢御房

(本文書ハ「旧記雜錄附錄一」四二八号文書トホボ同文ナリ)

〇一八 野辺盛仁所領目錄

安堵之御教書并御約束^(之)御教書被成下時節之當知行分

日向國 櫛間院一圓 飢肥之南郷一圓

飢肥院酒谷之城一圓 飢肥之大明神つるより上

悉 隈屋河内

同國 加江田郷一圓

大隅國 深川院之内二十町 串良之弁分二十五町

下大隅田上半分

飢肥院之内所々親類越中入道令押領、嶋津持久仁同心、仍乱世之間者相違了、屬無為而即如初知行了、

盛仁(花押)

(本文書ハ「旧記雜錄前編一」七一〇号文書ト同文ナリ)

〇一九 某書狀

十三日のよ、きりあひの候て、まこ三郎たちうちにあひ候、めてたく候ことにてなんともおおハす候、めてたく候、よろつ又々かしく、

(切封ウハ書)

(墨引)

いもりの^(おカ)□ちへ もり□

(本文書ハ「旧記雜錄附錄一」四三〇号文書ト同文ナリ)

〇二〇 某安堵状案

盛仁一跡之事、平次郎盛覚仁相續不可有他之妨、一家之為惣領上者、盛仁拜領悉可知行也、仍状如件、

(本文書ハ一旧記雜錄前編二一三三四号文書ト同文ナリ)

〇二二 武蔵国野辺郷・日向国櫛間院地頭

職相伝系図

1 武蔵国野辺郷地頭職相伝系図

(端書裏) 『系圖』

〇二一 日向国櫛間院本主次第手継系図

日向国櫛間院本主次第手継系圖

郡司尾張守 是助 嘉應三、本家御下文并目代施行給
尾張伴中子

安元二、本家御下文并目代施行給
小石衾丸名主

治承二、本家御下文給 永曆元、御下文給、無實子之間讓兼任
尾張氏 別當散位伴兼景

文治二
散位伴兼任

寛喜四 兼澄 建治二 湛睿 元亨三 觀睿

元弘元 通睿 建武元 久盛 地頭職勲功給 盛忠

系圖

一 武蔵国榛澤郡野邊郷内地頭職相續分 以前依事繁略之 就于當要抜記之

野邊太郎左衛門入道 野邊六郎入道 野邊孫六郎左衛門尉

成願 阿念 久盛

野邊孫七 盛忠 愛壽丸 今者野邊孫太郎 泰盛

2 日向国櫛間院地頭職相伝系図

一日向国櫛間院地頭職相傳分 開發由緒以下外戚糞祖等暫略之 就于當要祖記之

河野大輔法橋 同大貳法眼 通睿 觀睿

野邊六郎左衛門尉 野邊孫七 盛忠

先朝御代申披本領之由緒 久盛 愛壽丸 同前 訴人

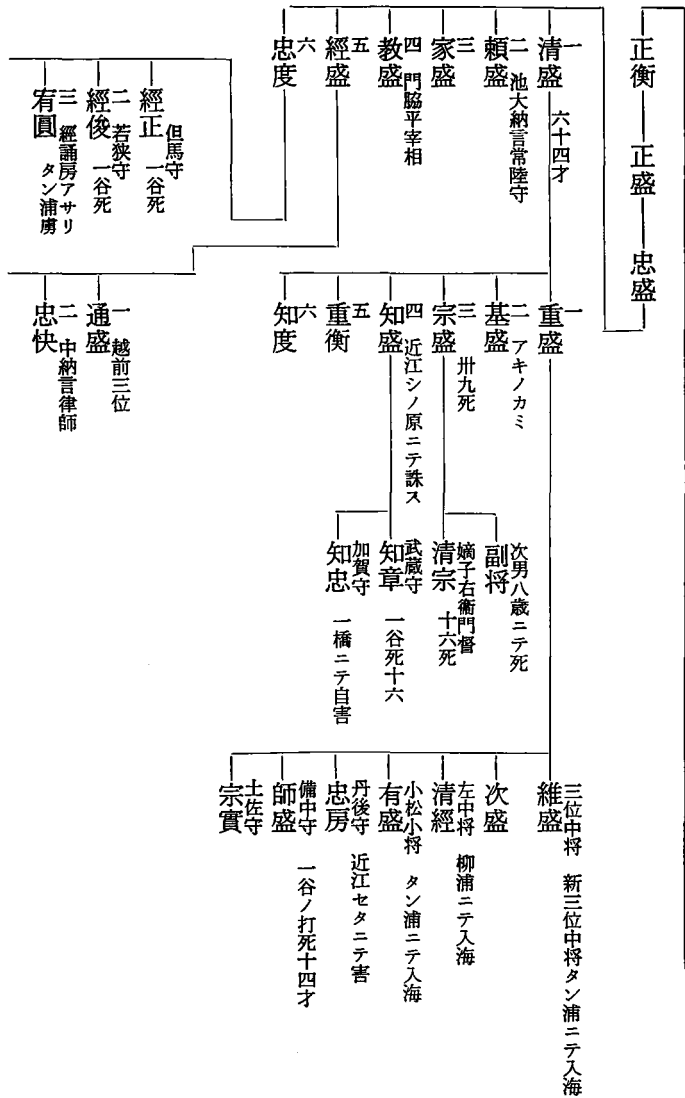
建武元年三月廿一日為
勲功之賞令拜領之

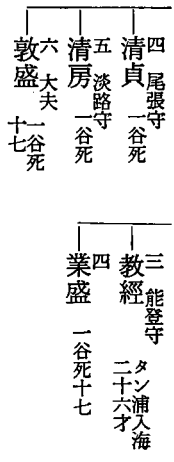
同孫八
盛政

野五
政範
鶴壽丸
女子
女子
女子
女子
女子
女子

〇三三 平氏系図

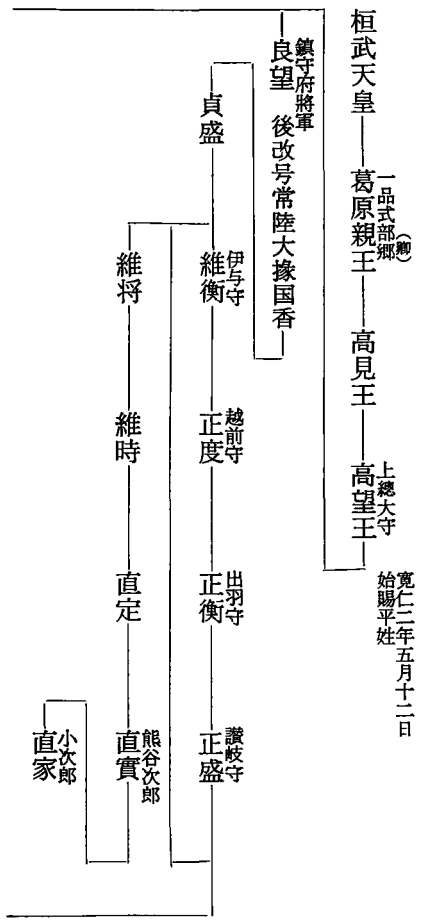
五十代 桓武第五王子 一品式部卿平ノ性ヲ給ル
 正衡 — 正盛 — 忠盛 —
 恒武天皇 — 葛原親王 — 高見王 — 高望 — 國香 — 貞盛 — 維衡 — 正度

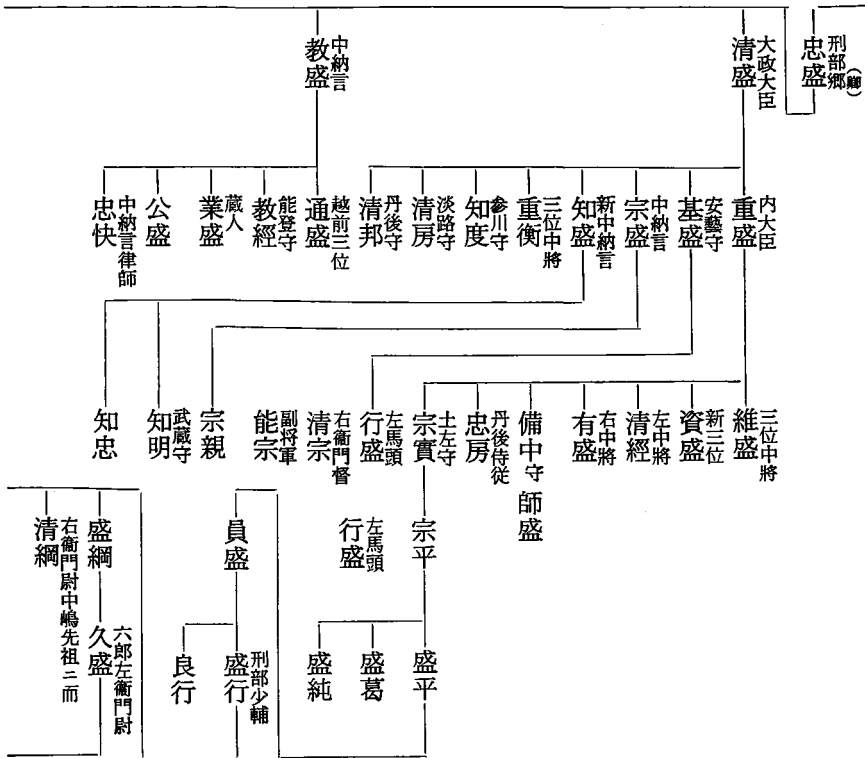


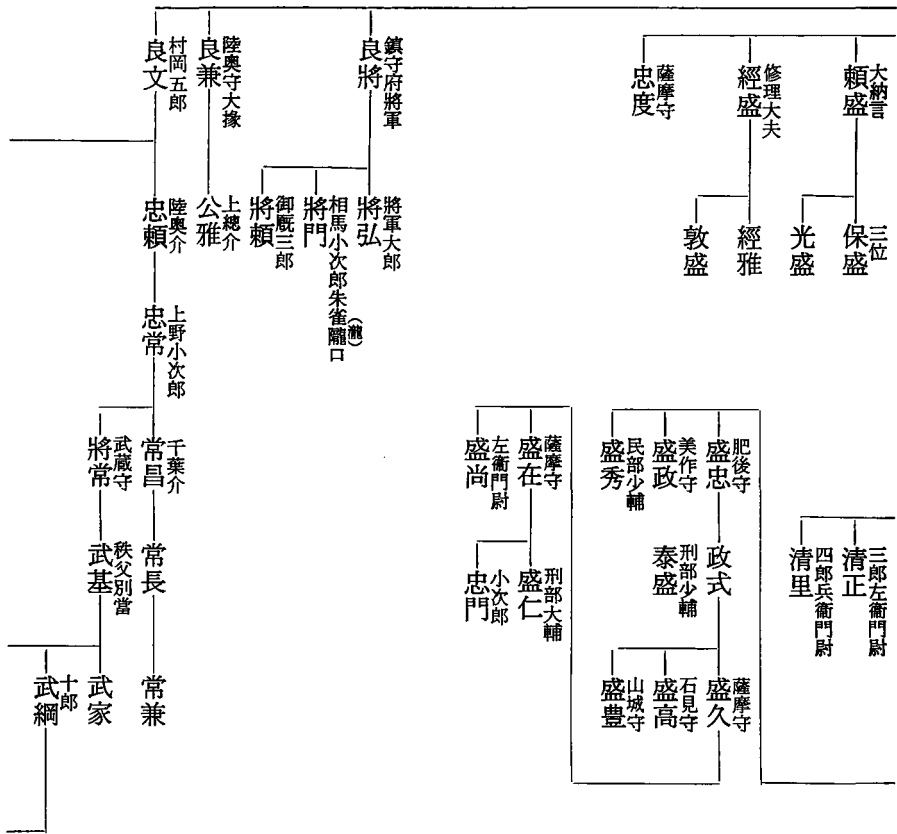


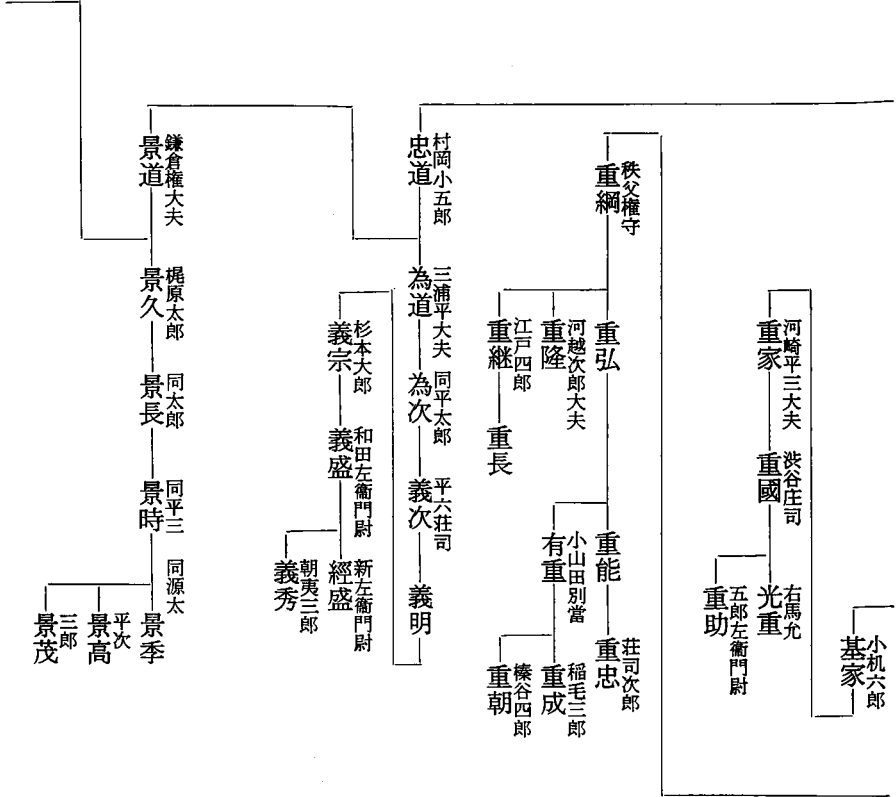
橋氏ノ初、
 天智天皇ノ時桂木ノ皇師兄卿歌ヲヨミ橋氏ヲ給ル、
 其歌ニ、タチハナハミサヘ花サヘ其ノハサヘエタニシモヲキトマシトキハナキ常繁木

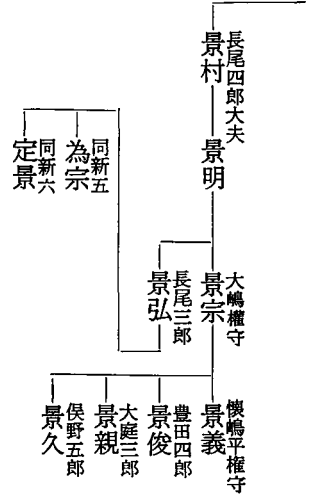
〇二四 平氏野辺家系図



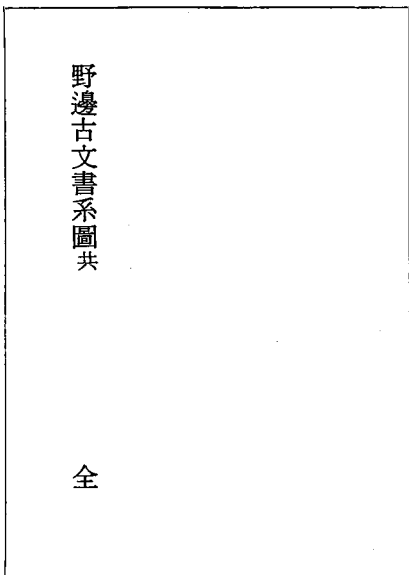








(原表紙)



野邊古文書系圖共

全

○ 野辺盛忠讓状写

(本文書ハ三号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

○ 伊集院為久宛行状写

(本文書ハ八号文書ト同文ニツキ省略ス)

○ 室町幕府御教書写

(本文書ハ九号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

○ 細川勝元書状写

(本文書ハ一五号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

○二五 野辺克盛和歌写

巻通
試筆

詠春祝言和調

伊勢太郎刑部大輔平克盛

雲かせもおさまる

やまをいつる日や

みちある御代の春

をてらさむ

文明十二三天壬寅正月元三

奥ニ押札アリ

○ 野辺盛仁所領目錄写

(本文書ハ一八号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

○ 某安堵状案写

(本文書八一〇号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

○ 日向国榎間院年貢注文案写

(本文書八一二号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

○ 某書状写

(本文書八一九号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

○ 佐土原祐音外三名連署書状写

(本文書八一四号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

○ 某安堵状写

(本文書八一〇号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

○二六 野辺家由緒問状写

壹通

一 雲雨御親父御名乗并受領官途等如何、

一 北方・南郷・深河向等誰より相分候哉、區々申説候、

○ 從儀師幸雅施行状写

(本文書八一七号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

并次第之

一 二方・中嶋ハ當家之家之子ニあらさるとも申候、又

如何、

○ 野辺盛季夢想歌写

(本文書八一三号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

一 隠岐者野邊親類候者、尊氏へ参陣申候時、天王寺に

て隠岐に被任下候より申習候て、小名字之様ニ候けると、かこ嶋の隠岐殿ハ被申候キ、又此方下向之時、

○ 日向国榎間院田島教注進目錄案写

(本文書八一号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

豊後より行合候て、隠岐國ニ人見候を同道候によて

隠岐殿と申習候て、年来之賞翫有ける由、盛与など

ハ堅被申候、如何、

一幕之紋之事、あけ羽蝶、或火扇之内ニ桐葉、或幡之字いつれを用哉、庶子家者扇計をも可用欵之由申談候、如何、

○ 日向国櫛間院本主次第手継系図写
(本文書八二号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

一 當家より出候に名字之方々誰々に候哉、先条々申候外ニも有へく候、

○ 武蔵国野辺郷・日向国櫛間院地頭職相伝系図写
(本文書八二号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

一 一条大閣様奥書如何、系圖同者書写大望候、不然者奥書計令写給度候、

○ 野辺盛仁一流系図写
(本文書八一号文書ノ抜書ニツキ省略ス)

一 刑部少輔殿名乗如何申候哉、

○ 足利直冬感状写

(本文書八五号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

○ 野辺盛長系図並相伝次第書写
(本文書八一六号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

○ 足利直冬下文写

(本文書八四号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

○ 島津氏久書状写

(本文書八六号文書トホボ同文ニツキ省略ス)

〇二七 野辺氏系図写

宥通

以前略之
野部六郎
廣兼—盛行—盛秀—盛綱—久盛

同左衛門六郎
同六郎左衛門尉

元弘三年十一月七日於鎮
為英時被召捕、被預上総掃部助高雅畢、
(規矩)

[此不知]

同孫七 有五宮御右謁、大隅國深河院
盛忠 御下向之間、奉繪量之

同三年四月廿九日舉
義兵、打平凶徒等、

久邦 八郎

親父久盛同時被召捕、被預
置釜利屋上総介師政、同五
月廿五日於住吉被誅畢、

菱刈文書

〇一 菱刈氏古文書写(卷子)

.....(継目裏印).....

1 足利尊氏御教書写

肝付八郎兼重以下凶徒誅伐事、随守護催促、可抽軍忠之状如件、

建武三年三月廿八日

(足利尊氏)
(花押)

菱刈藤平殿

.....(継目裏印).....

2 島津氏久書状写

大隅國菱刈院地頭職事、雖可為御知行候、以別儀、依口入申候、馬越對馬知行分者、彼方へ被進渡候条、悦入候、於此替者、祈所出来之時、可致其沙汰候、恐々謹言、

五月廿一日

(島津)
氏久(花押)

.....(継目裏印).....

3 島津元久宛行状写

日向國求仁郷内十五丁、為祈所相計處也、任先例、可被

致沙汰状如件、

應永六年十二月三日

(島津)
元久(花押)

菱刈殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」六三四号文書ト同文ナリ)

.....(継目裏印).....

4 島津元久書下写

大隅國横川院上村事、依為忠節、為兵粮祈所相計也、任先例、可被領知之状如件、

應永七年二月十日

(島津元久)
陸奥守(花押)

菱刈安藝守殿

.....(継目裏印).....

5 島津元久書下写

大隅國菱刈院之内、曾木伊賀守跡并横川院事、任相良殿状、為祈所可被知行之状如件、

應永九年八月十六日

(島津元久)
沙弥(花押)

菱刈安藝守殿

..... (雜目裏印)

6 島津元久宛行狀写

大隅國菱刈院内、本領并新恩當知行事、不可有相違者也、
早任先例、可有領掌狀如件、
應永十七年十月廿八日

伊東和州方ニ遣候狀の返事、たゞいま到来候、就者我等
か狀之返事そへ候て進之候、御きけんをもて令披露候者、
可為悦喜候、恐々謹言、
十二月三日
菱刈殿

(相良)
前續 (花押)

應永十七年十月廿八日

(島津元久)
沙弥玄忠 (花押)

(墨引)

菱刈又太郎殿

菱刈殿

前續

..... (雜目裏印)

..... (雜目裏印)

7 島津用久書下写

嶋津御庄大隅方菱刈院内馬越對馬守跡事、依為本領所宛
行也、早任先例、不可有領掌相違之狀如件、

9 大内義興書狀写

永享七年十月廿八日
菱刈殿

公方様至分國就被遷 御座候、被成 御内書候、尤御面
目之至候、此時一段之抽忠節候者、可為肝要候、此等之
旨、猶巨細對伊東大和守被仰下候之条、御相談可然候、
萬端併期後便候、恐々謹言、
十二月十三日

..... (雜目裏印)

(大内)
義興 (花押)

菱刈右兵衛尉殿

8 相良前統書狀写

..... (雜目裏印)

10 島津忠昌書狀写

就肝付之事進使者候之處、丁寧之御心底之通申候、喜悅候、重而以伊地知周防守、爰本之時宜、相良方間之事申候、可有傳達候、故実憑入候、馳而可有出陣之由承候、期面謁候、恐々謹言、

十一月廿日

(島津) 忠昌 (花押)

菱刈殿

(本文書ハ「旧記雜錄前編二」一七一四号文書ト同文ナリ)

..... (雜目裏印)

11 島津忠昌書狀写

先度以楠原飛驒守懇承候、喜悅候、隨而為國北郷讚岐守無為之調法共候、未相定候、就中從大友方伊東間之事、和与之儀被相調候之由、東堂同慈寺為使節下向候之間、山東へ遣使僧候、兼又長輔其界被越候之由聞候、幸候、從最前如申候、今度之弓箭之事憑入候之由、可期御心得候、仍彼方へ遣狀候、可有傳達候、恐々謹言、

十二月廿日

(島津) 忠昌 (花押)

菱刈左兵衛尉殿

..... (雜目裏印)

12 島津忠昌書狀写

就歳暮之悦使者喜悅候、隨而承後々弓箭之立柄從為續被申越候、得其心候、其後時儀共承度候、就中寄期此間色々雜說候、存置早晚之事候處、從肝付出手形候之由、鹿屋注進候、旧冬之弓箭任為國之意見無為候、然者存國家無事之儀刻被執起弓箭候、曲事候、其界之事、自然之儀憑入候、委細者伊地知周防守可申候、諸事可申合由申合候、恐々謹言、

十二月廿六日

(島津) 忠昌 (花押)

菱刈殿

..... (雜目裏印)

13 島津勝久補任狀写

加官之事承候畢、然者宜被任大和守者也、仍狀如件、

大永八年三月廿九日

(島津) 勝久

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二二二七号文書ト同文ナリ〕

（繼目裏印）

大隅國栗野院百廿町

依為望所宛行也、早任先例、可被知之状如件、

永祿四年拾月二日

（島津）
貴久（花押）

14 島津勝久宛行状写

〔ハリ紙〕
「二勝久公ノ御下状ノ事」
菱刈実近

〔本文書ハ「旧記雜錄後編」一八九号文書ト同文ナリ〕

（繼目裏印）

薩摩國牛尿院之内、青木・長尾兩名之事、依忠節宛行所也、早任先例、可有領知之状如件、

大永八年九月十日

（島津）
勝久（花押）

17 島津義久宛行状写

〔ハリ紙〕
「修理大夫義久公之御下状ノ事」
菱刈実近

〔本文書ハ「旧記雜錄前編」二二二九号文書ト同文ナリ〕

（繼目裏印）

大隅國平院之内、本城并曾木之事、所宛行也、永々無

二抽勲功、可被守此旨之状如件、

永祿拾貳年己

八月廿六日

（島津）
修理大夫義久（花押）

菱刈鶴千代殿

15 島津貴久補任状写

加官之事承候早、然者宜被任大和守者也、仍状如件、

永祿三年霜月十一日

（島津）
貴久

（繼目裏印）

〔本文書ハ「旧記雜錄後編」五一七号文書ト同文ナリ〕

（繼目裏印）

18 島津久達奥書

16 島津貴久宛行状写

右十七通之正文、先祖以來相傳之處、就公用御記録所江

被出置、去年四月

御城回祿之時燒失、依之御家老嶋津助之丞忠守・嶋津縫殿久寛・喜入安房久亮・種子嶋藏人久時・肝付主殿久兼遂相談、達 貴聞、十五通者正文臨寫之扣寫、二通者似寫之扣寫、此節被差出ニ付、則以其寫共臨寫被仰付為一卷用紙十、繼目裏加封印被下之間、正文不替致秘藏、可被傳于子孫者也、此卷中勿論 御記錄ニ被寫載置五通之御文書者、引合校正早、仍為後證如件、

繼目封印〇_(印)

元祿十_丁正月廿五日

豐前久達_(島津) (花押)

菱刈孫兵衛殿

〇二 菱刈氏古文書写 (卷子)

1 時任土岐右衛門外二名連署覚写

覚

阿弥陀堂卷字

四敷式間茅葺板鋪
佛壇ノ前組子障子卷間大破

御本尊、秘佛 御圖師、組子圖師之由

一佛壇之脇、切戸杓枚 のし立杓尺 大破

一右同断卷間 右同断

右堂爪峯山無量寿院と申寺也、旧跡と申傳候所江安置有之候処ニ、段々及破壞候得共、當時迄ハ村中之者共致修覆、御茶立と申而知行仕来候段、此程も申上候、右之所より四五十間曳退、雞頭庵と申所江菱刈殿家々廟所有之候、石之銘左之通、
永祿七年甲子九月十八日
一天岩道祐大禪伯
同九年丙寅霜月十八日
一舜山道堯大居士

右兩石此程書付差越候処ニ、本城大林寺ノ位牌見合申候得ハ、左之通文字相替り申候、

- 一掩粧大林妙心大姉 淑靈
永祿七年甲子九月十八日
- 一前相州太守天麩祐公大禪伯尊靈
- 一智嶽寺殿永公居士 尊靈

右智嶽寺ト申ハ本城曹源協寺之由申傳候、
右同所曹源寺ト申寺江御位牌左之通、

- 永祿七年甲子九月十八日
- 一天麩祐公大禪伯
- 同九年丙寅霜月十八日
- 一舜山堯公大居士

右寺江段々位牌為有之由候処ニ、十余ヶ年以前出火有_(マ)

之、皆共致焼失、右式本之分當時有之候、

右外ニ茂御由緒承傳、又ハ槌成書付等も所持為仕者も可有之与存申候得共、別ニ為承御儀も無御座候之間、右之通書付差上申候跡ニも承付候儀有之候て可申上候、以上、

海老原休兵衛

未
正月十八日

伊福茂右衛門
本城
時任土岐右衛門

加治木喜右衛門殿

2 菱刈藤兵衛口上書写

口上

去々年私所持仕候文書、御用ニ付可差出之旨御記録所より被仰渡候付、不残差出申候處ニ、御類焼之砌於御記録所致焼失候、右之内ニ天文八年三月廿三日左兵衛尉重苧被任相模守口宜案正文老通、^(永)文祿十二年己巳八月廿六日民部太輔重廣へ御家老三原遠江守重秋・伊集院右衛門太夫忠金より起請文写老通之文書も同前ニ焼失仕候、右両

通之文書私家肝要之物之儀ニ御座候、最前差出申候写ニ

無御座候故、式通ハ去夏御写不被下候、拙者方へ留等も無御座候得ハ、如何様共難申上候へとも、式通之文書之儀合申儀ニ御座候ハ、被仰上、御證文御申請被下度存候、尤系圖ニ茂右式通ハ題目ニ記置申候ニ付、至子孫御證文ヲ以引合申候様ニ仕置度御座候、先比申上候節同前ニ申上候筈ニ御座候処ニ、拙者不案内故遅り申候へとも、何とそ奉願筋ニ被仰付被下候様ニ宜頼存候、

正月廿七日

右之通田中五右衛門殿へ申達候処ニ、五右衛門殿より承候ハ、右式通之文書私方へ覚無御座候、御方覺為被成儀も可有之候間、^{御覽候ハ、}○證書相添可指出之由承候、右式通文書差出置、致焼失候段別条無御座候ハ、御次書被成可給候、其趣ヲ以申上度御座候、以上、

二月

菱刈藤兵衛

伊集院助右衛門殿

3 足利尊氏下文寫

尊氏卿之
在御判
下 菱刈一族在交名
注文

可令早領知大隅國菱刈院半分地頭職事

右一族等、為勲功之賞所宛行也、早任先例可致其沙汰之
如件、

建武四年卯月廿八日

少輔太郎入道殿

6 柏木平次兵衛書付寫

西華蓮船公大禪定門

勇務天岩道祐大禪伯

永祿七甲子九月十八日

重盛舜山道堯大居士

永祿九乙亥十一月十八日

重副 智嶽永公居士道力

五月七日

興覺寺

柏木平次兵衛

寫

4 島津勝久補任狀寫

加官之事承候早、然者宜被任大和守者也、仍狀如件、

大永八年三月廿九日

勝久御判

5 高師直施行狀寫

〔ハッ紙〕
〔うつし添〕

大隅國菱刈院半分地頭職事、任御下文可致沙汰付于菱刈

一族之狀、依仰執達如件、

建武四年六月十六日

〔師直〕
武藏權守
奉之

7 湯之尾御料鱒口之銘文由来

湯之尾御料鱒口之銘

奉桂鱒口之事、為爰大旦那藤原朝臣相模守重劬 御子孫

如意武運長久砌也、于時天文九庚子十二月廿二日敬白、

同社庭石燈炉年號天文五丙申

8 藤原資將奉口宣案寫

上卿 按察大納言

天文八年三月廿二日 宣旨

左兵衛尉藤原重躬

宣任相模守

藏人頭左中辨藤原資將奉

大膳大夫岡成卿勅使

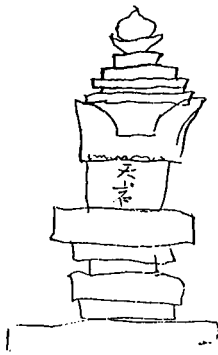
9 菱刈重州・同重猛墓碑銘

永祿七年甲子九月拾八日

天岩道祐大禪伯

永祿九年丙子霜月十八日

舜山道堯大居士



10 某覚書

大口之内湖邊村朝日寺門長兵衛与申者格護仕、長兵衛先祖同前ニ取持仕候右御位牌ハ、菱刈左兵衛殿与申御牌之由申傳候、私罷越段々見申候得共、法名文字相見得不申候、以之外破損仕有之候、當暮ニハ右長兵衛罷越御宅へ罷出、委細御咄仕候様申付置申候、

一大口之内花北村へ石塔三塔同所ニ有之候、法名
天正拾二年甲申三月十八日

梅 松林妙香大姉

林 右二塔法名相知申(候力)

一塔ハ結構成石塔ニ而御座候得

共、法名相知不申候、二塔共ニ菱刈殿

(後欠)

〇三 藤原資將奉口宣案写 (卷子)

1 藤原資將奉口宣案写

上卿 按察大納言

天文八年三月廿二日宣旨

左兵衛尉藤原

重劔

宣任相模守

藏人頭左中辨藤原資

将奉

大膳大夫岡成卿敎使

(繼目封印)

2 島津久達添書

右 宣旨正文一通 天文八年三月廿二日左兵衛尉、藤原重州宣任相模守 先年、就御

用御記錄所江被差出置之処ニ、元禄九年四月 御城回祿之節、右正文於官庫焼失、然處ニ頃日右 宣旨之寫一通相求、此節被差出之畢、因茲御家老島津中務久貫・島津將監久當・島津帶刀仲休・種子嶋藏人久時・肝付主殿兼

柄各遂相談、以右 宣旨之寫、字畫・判形無相違令臨寫之、繼目加封印與之間、正文ニ不替令筒藏、可被傳于子孫者也、仍如件、

寶永七年庚寅五月九日

菱刈孫兵衛殿

(島津) 佐豊前久達 (花押)

繼目封印〇(印)

3 肥後盛香・市来家年連署書状

覚

御方文書、先年御記錄所御用ニ付被差出置候、然處元禄九年四月廿三日

御城御類焼之節、古文書惣様確火災候、其内口宣案沓通・神文寫沓通有之候、我々見覚御座候者、覺之分書付可進之由被仰聞候、右文書之内口宣案并神文寫為有之儀者、覚罷居候得共、何某被下、又者文段之趣者覚無御座候、右之旨任御望如斯御座候、以上、

市来源右衛門

元禄十一年戊寅三月廿八日

家年 (花押)

盛香(花押)

1 某覚書写

菱刈孫兵衛殿

(前欠)

一地ふくの事、一□嶋等守後代之事、此外能事なく候、

一反米御かけ候無理にて候、是も御老中・奉行所、私ニ罷成可申候、然者去年うき所ニ稻数万把御座候、此三所物過分ニ御座候を帰處、我まゝに召失候、かやうに科なき御内衆を寺社迄米をかけ候、如此にて候ハ、國をくつかへし可申候、為後日御届候、

一國家諸役人等書置にて境目ニ分別可有候、殊ニおくれの後地下ニ六ヶ敷事限なく候、一弓箭之義をハ伊豆大炊助・同彈正忠・佐土原撰津守・落合若狭守、此衆を御頼候て可然存候、一長倉かけゆ左衛門尉指人にてハなく候へとも代々之事にて候間、衆なニ能候するか、第一つよくせわろく候、一つよき衆仰候事、人々笑申候、一殊ニ黒貫寺之御扱悪候、

一落合越後守、是ハあしをけかたけにて候、兼役御佞言可有候、一野村吉次方、是ハかつけ御添候て可然候、

ちやうりも物ハ持申候、一鷹師衆地下ニ無理非道を申候、御法度可然候、一奉行所より名々役銭つなかせ候事、又我家作等をさせられ候間、地下つかれ申候、一細々間別棟別御つなかせ候事可然候、一日記付ニ事かけ候とも、弓削平左衛門尉・崎田掃部左衛門尉、此つれに佐土原衆ニ御日記付させ有間敷候、

一人ニ事かけ候共、あや新左衛門尉・作田次郎右衛門尉、此つれの衆ニ何にても候へ、御拵かせ有間敷候、一平嶋方國中ニ銭をなほし、十二合ますにて弥ましに年々米を買申候、御米不届候ハ、御公領を御加候て可然候、其上こま・大豆等迄も買申候、一金銀米銭ノ類、國余程御所持候共、弓箭ニおくれ候ハ、徒事ニ可罷成事、御心え迄候、一女中方より詔訴許、又國家之義御拵候事、さかしまことにて候、御分別たるへく候、一威勢之衆ノ披官・佐土原衆役人ノ披官衆余多候、國ノ為ニ成間敷候、一科錢御引せ候事、よその聞えも口惜候、其上人ニ依而さし置候事無念候、一代々の御奉公之跡をめしかき候事非道条々、一一印弓箭之内ハ他行仕候

て、今作つゝ仕候衆ニ目を御かけ候事口惜候、一威勢之衆ハ本々ノ田数にて役しかく不被召候事非道に候、一目よハき者ハあかり田数にて、山成河成をもうわせ賢役させられ候事無念候、一何事も目よハき者の身つめに罷成候、

一おひにせいを御入候て日向を御捨可有事、分別たるへく候、一物内ニテ銭なくし御遣候事、非本意候、御心得可為候、

一伊東と嶋津殿の弓箭之事、たとへは鷹トきしとのことくにて候、御分別可有候、御家の細り初りにて候、能々御心え專要候、一此落書、都於郡・佐土原ニ十落し申候、

右此条々、一ハ御家之為又ハ國之為ニかき外し申候、御見候人々ハ、御上、御大將中・御老中方々以下百姓等迄御披露可有候、自然披めなく候ハ、國家くつかへり可申候、諸神諸佛ニかけ申候、すこしも慢心にてハ不申候、是を妻八幡之御神託とおほしめし候て可然存候条々如此、

ゆかむへき道へさなから直ニして

すくなる道のゆかミこそすれ

天正五年丁丑霜月廿四書之、

目よへき物ニ付、

みな人なミたの雨のふる時ハ

御上も笠をめすとこそ聞け

2 某起請文写

起請文之事

一就弓箭ニ、薩劔一味同前之事、

一於當城ニ敵可絡時、身違有間敷事、

一從他所何雖有謀策、其安中努々入間敷事、於背此旨、

奉始 梵天帝釈四天王 惣日本國中大小神祇、

別而九劔鎮主彦山三所大権現 阿蘇十二宮、

殊ニハ當國鎮主湯須良八幡大菩薩 緒方庄三社八幡

大菩薩、

別而薩摩國新田八幡大菩薩 大隅國正八幡大菩薩

日向國宇土 狗留孫 霧嶋六所大権現 愛宕山大権

現 戸隠 飯綱大明神 弓箭撰守護大聖摩利支天

天満大自在天神 神罰冥罰可蒙身上者也、仍如件、

天正十五年三月十一日

3 豊臣秀吉禁制写

禁制

大隅國

一軍勢甲乙人等、乱妨狼籍事、

一放火事、

一對地下人等、不謂族申懸事、

右條々堅被停止畢、若違犯之輩於有之、可被處敵科由

者也、

關白殿

天正十五年五月日

御書音

御下向之時

於菱刈院伊集院右衛門大殿

参り候、

より

4 阿蘇弓箭之事ニ付某覚書写

阿蘇弓箭之夏

ましハる道のさハリヤハある

兼年

天正拾三乙酉八月十日阿蘇衆依花山攻落、則從薩劬嶋津

赤崎和泉守

忠平為大將、八城豊福續厥勢数万騎、同廿九日於于響原

月さえて松の木かけもくからからす

御船衆打出処ニ、薩劬人衆出向、手始之合戦御舟衆六十

ころまかせのみちのましハリ

三人、第一衆打取、潤八月十一日於熊莊動二万餘人打取、

三河守重經

同十三日高左・難田攻落、同十五日御舟・熊莊知行厥内

取人数千人、廿日之内如此、

5 菱刈重經外二名和歌写

6 某覚書写

薩州重榮、法号曰玉英、諱曰宗清、予入室之徒、示這一則因縁、井底得秤鑓矣、

天智天王之臣下、宇治之左大臣末孫之菱刈半右衛門尉、

於日劬莊内之内山田城為御番手シテ銚合之砌、伊集

7 某禁制写

院源二郎殿手之衆指合候而、

禁制

実ニ慶長四年己亥霜月八日、懸出被成、鎧被申、則戦死

一今度其しよさふらひ中、から入に付て 御公やくをと

ニ而候砌にて候へ者、餘事ニ、

ちめす、ちぎやうをすて、他方へはしるへき者、即可

なきあとにむかひてとへはあたし野の

加成敗事、

身は冬草のたえをしそ思ふ

一他所よりはせ来る者ありといふ共、うけつけまじき事、

前勝学寺快全

一渡唐につゐて、ひやくしやうい下、御公役をいたミ、

照す月いつくもをなしくもりなく

たとへ遠國まで令逃散共、たつね出し次第 殿下様の

御法義ニまかせ可被處罪科事、

右如件、

天正廿年貳月十二日

文祿二年十一月

御朱印

一町人百姓ニ對し非分等不可申懸事、

右於違背族者、可被處嚴科者也、

品川主馬首殿

熊谷半五殿

垣境見孫太郎殿

太田小源五殿

8 某坪付写

坪付

肥後之内

熊莊所

三百五十町

御重恩

菱刈民部大夫殿

天正十二歲甲申正月吉日

10 豊後取人之請人覚書写

大隅國桑原郡一山名より豊後取人賣候者

一むくりうか畑之者年十七下女名ミやつる、年不知候、うり手

馬場茂右衛門、南郡之内大田いつミ川と申在所ノ人か

い玄番うけ申候、

一小川之者下女名千代、年十二、親うけ申候、名次兵衛

大口名主羽月備前うけさせ候、

文祿三年甲午貳月十九日

9 豊臣秀吉朱印状写

條々

豊後国

一去天正十四年於當國大隅・薩摩・日向へ亂妨取男女事、

婦國之儀被仰出候条、得御意、若不立帰族於在之者、

代官かたへ為其地下人可申理事、

一男女之賣買一切可令停止事、

11 高麗立之人數渡錢覚書写

文禄二年閏九月十一日

やしき錢
高麗立之人數渡錢

一 五百文 井手籠弥六

一 五百文 赤崎神七

一 五百文 竹田三次

一 五百文 陣藤介

一 五百文 松長二郎太郎

一 五百文 赤崎神介

一 五百文 圓田源四郎

一 五百文 御中間忠左衛門尉

一 五百文 源左衛門尉

一 五百文 藤左衛門尉

一 五百文 大圓坊人足

一 五百文 御役人人足

一 五百文 宮嶋左近兵衛尉

此外五百文ハ玄番充渡し申候、

閏九月十一日

六貫五百文十三人渡申候、

一 閏九月廿二日

唐立之人衆へ

御役人所へおひて
二貫八百文渡申候、

一 閏九月廿九日權大夫・万介へ

やしきせんの内
五百文渡し候、

つかい竹藏

一 十月十日やしき錢之内

四百文京都ノはかせニ引物申候、

12

福昌寺僧堂上葺之切符写

福昌寺僧堂上葺之切符

菱刈本城の分

一 木舞 二十丁

長 一丈四尺

ひろさ 四寸 あつさ

一寸五分の木

福昌寺

菱刈殿

参

13 諸法度之事ニ付某達写

諸法度之事

一 狼籍停止之事、付一紙半錢之引違茂於在之可被處罪科事、

一 放火停止之事、

一 諸下知被相背問敷之事、

右條々下知之事、北郷讚州・川上参河入道・新納武蔵入道被仰付候間、各以一味入魂肝要、

14 菱刈重妙下向ニ付問合書写

保元元年十一月

頼朝ノ御時

建久保元元年より三十五年

建武四年保元元年より百八十歳

重妙大隅國御下向之事

保元元年十一月トモ有之、

保元元年より三十五年

建久トモ有之、

同元年より百八十年

建武共有之、

右何れ実正にて候哉、承度候、

15 龍造寺勢島原在陣人数賦写

(天正十二年)
三月廿四日於高来嶋原表ニ隆信戦死(世)使候人数付之事

一 龍造寺山城隆信

同 常陸 手五十

同 家成 手五百

同 備後 手六十

同 (同左衛門大夫) 右衛門 手五十

同 (同治部少輔) 治部 手七十

同 (同式部少輔) 三郎兵衛手五十

同 式部 手千五百

一 納留能登 手千

是ハ龍造寺家ノ老衆也、

(同小山) 一 河武蔵 手千 是も老衆也、鍋島手也、

(同高木) 一 高来兵部 手五百

一 同三郎兵 手五十

(同大字) 一 大柴 手三十

一 鍋嶋淡路 手百

一 大田隠岐 手三百

塚

一犬塚形部(刑部少輔) 手百

一成松遠江 手五十

一百武志摩隆信頼切被申候者也、 手三百

一馬場同名三人手百

一(小田九郎左衛門) 小田原左衛門手五十

一(小河) 小川玄番 手三十

一同近江 手二十

一倉町左衛門(左衛門大夫) 手二百

一次郎兵衛 手廿

一石井寄相五十六人手二百

一原口對馬 手三十

一西岡美濃 手二十

一土肥佐渡 手三十

一田原伊勢(美州) 手廿是ハ勢州へ連々被登使者也

一勝一軒隆信惣役人也、手三百

一茂木式部手三十 是ハ政家ノ用筆也、

一志摩上野(上野親子) 手二百

一鴨池常陸 手三百

一(渋谷) 洪屋 手五十

一副嶋寄合五人手二百

一大田左衛門(右衛門大夫) 手五十

一同伊与 手四十

一馬渡堅斎 手三十

一綾部土佐 手三十

一日賀嶋惣衛門手三十

一北嶋左衛門 手七十

一成留下野 手七十

一朽井主計 手二百

一前田伊与 手二百

一(加勢) 賀嶋美濃入道手七十

一水町四郎右衛門手廿

一同治部(治部少輔) 手廿

一(江利口左衛門兵衛) 白利日左衛門手廿

一大坪四郎三郎手廿(次郎三郎)

一幡内露田寄相幡方、家中ヲ我心問々ニ仕者なり

一江上内執行越前是も同前也

一鍋島飛彈外延候、(逃) 鎖を直候者、

一龍造寺政治家逃延候、手負候、

一田尻常陸海(常陸入道)ニ入候て死候、手五十

一西牟田紀伊 手廿

一同美濃 手十五

一蒲池鎮運・内下河撰津手五十(内物下河)

以上、戦死三千余、手負候人衆一百余にて候、何某か(分)

手いかほとと申候、(ハ脱カ)東陣之時の人数つもりにて候、(在カ)

天正十二年甲申

三月廿四日

(本文書ハ「旧記雜録後編二」一四〇四号文書ノ異本ナリ)

〇五 菱刈氏重書(卷子)

1 島津義虎書状

今春之御慶千祥不易重疊、雖申事舊候、尚更不可有休期、萬歳珍重々々、抑為此等之儀用慶翰候、何様永日中自他之御吉兆倍可申承候、好事、恐々謹言、

正月廿四日

藤原義虎(花押)

謹上菱刈殿 御宿所

2 豊臣秀吉禁制写

禁制

薩摩國

一軍勢甲乙人等、乱妨狼藉事、

一放火事、

一對地下人等不謂族申懸事、

右條々堅致停止早、若違犯輩於有之者、忽可被處嚴科

由者也、

天正十五年五月日

御書音

(本文書ハ「旧記雜録後編二」三二〇文書ト同文ナリ)

3 某書状

芳翰之旨即致披見候、如仰御用段之儀、去十四日五日ニ
雖可令調達候、無其儀候、於爰許者從地頭於普之身可扣
申由承候条、猶々委敷承償、追而可致注進候、此旨御分
別專用候、事々、恐々謹言、

五月拾七日

長普 (花押)

山田能登守殿

御報

4 某書状

石田治郎少輔、伊集院右衛門大夫用段之儀候て、彼者共
差遣候、少不審之儀不可有之者也、

五月廿五日

諸軍衆

参

5

眼界常明庵主追善供養和歌

奉 眼界常明庵主三十三回追善

けふはなをいとゝむかしそしのはれて
すきにしひとをとふとおもへは
おもかけもしらてわかれしあとなへハ
いとゝなみたのそてしほるかな

なみたなりあとな法のたむけをも

三十三とせのけふにおくりて

武蔵野にきへにし人ハむかしにて

三十三とせのかけをとふかな

とふこともまたハあらしとおもふにそ

なをしのふかよ人の面影

6 伊達政宗書状

以上

初鮭到來仕候、則致進上可給様、御披露所仰候、追々可
申伸候、急候間不能詳候、恐惶謹言、

松陸奥守

(伊達)

政宗 (花押)

八月廿四日

本上州様

(人々御中)

7 某書状

猶々此帛有次第、先々作あるへく候、以上本拾書

頃ハ草氣之様ニ聞候欤、如何々御座候らん、承度候、次

ニうたひの本そうし作候て給候へ、急度頼申事候、恐々

謹言、

九月拾九日

(菱刈重広カ)
廣

其後御床敷奉存候、先日之儀重立聞候、思めし入ニ替
たる事も無之候、廿三日之月頃ニ定而御出座可被成候

間、以貴面萬々可申伸候、

一吾等口入仕候御借銀三口、當月限之由申来候間、別紙

ニ書付進之候、御返事被仰處候、

一内々御申入候、いつにても大徳寺へ御出之刻、御供仕

度候、猶期貴面候、恐惶謹言、

十月廿日



9 相良頼寛書状

(上書カ)

より

圓田三河守殿

是

(墨引)

まいる御宿所

8 某書状

猶々、新奉行衆ハいつ比御上京候へん哉、是又承

度候、以上、

猶以、御氣色如何被成御座候哉、乍不申御養生可被
遊候、内々如申入候、老母氣色不具合可申候間、三
日ほとハ自力ニ成共令逗留、廿五六日之比出船可仕
候、左様ニ被成御心得候而、乗船之儀被仰付可被下
候、萬々御入魂所仰候、以上、

昨晚者可被召寄之由、兩度迄御使被下候處、難去隙入申
儀候而不致伺公、慮外千萬ニ御座候、仍我等事早々出船
可仕候へ共、老母氣色すきくと無之候故、今夕見合可

申覚悟候、其内ニ我等事高野ニ可参与存、今朝罷立候、

三日中ニ罷帰候間可奉得尊意候、将又乗船之儀、萬事被

添御心可被下候、偏奉頼候、恐惶謹言、

十月廿一日

(相良)
頼寛(花押)

10 長岡景則書状

以上

一書申入候、三齋被申候ハ、大隅守様御茶入之袋之切、

此方ニ而尋出、はや被申付候間、其許にて被成御尋間敷

候、御茶入之家、今迄之ハちと氣ニ相不申ニ付、此方に

て香合ニ被申付候、可有其御心得候、香合之塗出来次第、

自是御左右可申入由被申候、恐惶謹言、

十二月三日

景則(花押)

(包紙ウハ書)

長岡河内守

(墨引) 菱刈半右様

御宿所

景則

11 長床坊書状

猶々先日被仰越候伊与殿御百味、奉備御札俗物差越

申候、其元可然様被仰達可被下候、

一筆令啓上候、然者歳暮為御祝儀、炭式荷・木綿足袋三

足令進入候、聊御祝意迄候、中納言様弥御息災之由、

大慶存事候、猶此二慶可得御意候、恐惶謹言、

十二月十三日

(長床坊)
花押

〇六 菱刈氏古文書写(卷子)

2 落合新八禁制写

1 某書状並落合新八禁制写

御鷹之巢是有山々外定られ候通、巨細心得存知候、一切出入不仕候様ニ堅申付へく候、若有背者成敗可仕候、為其一書申上候、

九月三日

落合新八殿参

文禄二年八月廿九日ニ大口ヨリ此方へ御着にて候、御

宿雲臺軒、九月三日ニ栗野へ御渡しにて候、

禁制

一このやまにたかの巢これ有につゐて、一切出入つかまつるましく候、若於背者堅成敗可仕者也、

文二年 九月二日

落合新八(ママ)

2 落合新八禁制写

きん制

一此やまニたかのすこれあるにつゐて、一切出入つかまつるましく候、

若於背者堅成敗可仕候、 右如此候、

文禄二年九月二日落合新八

3 落合新八書状写

以上

任御定申置候、然者鷹之す是有近邊山之事、東山ハ一曲之境、南ハ四郎木場しほうり神、西はこの尾之道境、北田ヲ境、此内へ鷹す見立候者より外ニ一切出入つかまつるましく候、若於背輩者可成敗仕候、用其如此申定候、

恐々謹言、

落合新八

九月三日

(花押)

菱刈半右衛門尉殿

留主中

菱刈尾張守殿

井手籠越前守殿

山田丹波守殿

竹下玄番允殿

竹内飛驒守殿

圓田三河介殿

4 落合新八書状写

任御定申置候、然者鷹之巢是有近邊山之事、東山ハ一曲之境、南四郎木場塩賣神、西銚尾之道境、北ハ田界、此内へ鷹之す見立候者より外ニ一切出入仕間敷候、若於背

輩者可成敗仕候、用其如此申定候、恐々謹言、

文祿二年癸巳
九月三日

落合新八之(ママ)

菱刈半右衛門尉殿

留主中

菱刈尾張守殿

山田丹波守殿

井手籠越前守殿

竹下玄番允殿

竹内飛驒守殿

圓田三河守殿

5 内田重経・山田重年連署書状写

追而令申上候、たいのやより申せにて候、われ々前ヨリ御き念無油断申候、早々御帰朝之事、望敷こそ申上候へ、御長文被下候、則城内ふもと寺社各々へ披露申候、御座下之柏手まで迷惑千万とこそ被申上候へ、いかさま昼御目候て、彼是御祝言可申上候、恐々、以上、

今春之御慶賀、重畳目出度申上候、仍御文被下候、忝令拜見候、御前御辛勞之儀難筆紙尺候、御帰朝之義相聞申

候、一段目出度奉待申候、將又御内之土下共ニ無何事候、可御心安候、今程之御栖ふりとにて候へ者、我々心懸申候事無是非候、御馬飼御たる之事、御火番衆・はきさうち等ニ至まで、少茂無油断申候、題目御祈念之儀、禿衆油断不申候、子細之旨、立重之人衆可被申上候、賀事、恐惶謹言、

山田丹波守

貳月吉日

重年(花押)

圓田三河介

重經(花押)

菱刈兩御納所中

申給へ
参

萬端重而可申入候、以上、

御懇札令快覽候、隨而至肥州表續可有之様風聞候哉、就夫水俣舟二艘程可被成借由得其意候、乍去左様之砌者、從爰元茂各可罷立事可為勿論之条、駢可有御用共難申候、殊水俣者未不有着候間、舟茂様々二三艘有由候、然者水俣者可為御察之前候、萬端追而承合、様子次第可申入候、心事、恐々謹言、

八月六日

(鳥押)
義虎(花押)

菱刈民部太夫殿

御報

6 島津義虎書状写

追而連々可申越候處、仍無題目如心疎經過候事、慮外候、然共無御等閑間候儘心安存候、將又先刻者竊御望之由にて候間、小五郎へ申付候、可相届候哉、

7 梅北国兼書状写

猶々彼麦之事者、蘭田名字之人ちか／＼申候、縦税ハ御仕ちかい共候て彼所領召上候共、麦之事ハ別人格護候条、可預事專一候、貴殿御上洛之御留守へも下々悪事共出合候ハ、乍惶御大事御女房衆迄内儀を得へく候、菟角本城・湯尾

之事入亂候之条、無心可被仰聞事可目出候、彼状度(アヤ)

尤候、

此趣御靈江所領御付候欵、然者頃被召返候就彼儀被申事候、随而ハ麦ヲ散候之處、三日前如其元かり取之由、其聞得候、爰許之衆ニ付、本城茂湯尾内へ下々麦ヲ散候条、かり取へき由被申候へ共、拙者申候へ、貴殿様少茂御存知有間敷候、何邊従下々惡事共出合候へ者、後日者とかく六ヶ敷罷成候、殊更此前茂拙子湯尾懸持候へ者、不入事共出合候、當時ハ耽罷居候条以内状御談合可申候、彼儀も貴殿御存知候而被取候へ、不苦候、定而御存知有間敷かと存候、先者無等閑儘申入候、恐々謹言、

五月六日

梅宮

國兼(花押)

菱民様

人々御中

8 新納久延書状写

猶々申候、彼科人町へ罷出候、頻々宮之城より御書状被下申候、殊々彼者之親類餘多町ニ罷立候間、若

彼者へ告申落行候てハ笑止ニ存候条、如此候、乍重

言別當科可被指置事、偏たのミ存候、恐々謹言、

急度令啓入候、仍而於其方之町ニ別當へ理申、科人搦させ候、左様之儀、從別當別御方などへ御談合不申候欵、曲事之様被仰之由傳説承付候、尤候、雖然從金吾様彼科人之事急儀ニ爰可申之由被仰付候間、依無時剋申後候哉、彼科被對曾木ニ可被差置事、可目出候、恐々謹言、

仲秋十八日

久延(花押)

(墨引)

新納八郎四郎

丸田參河殿

岩川佐□殿

久延

御宿所

9 某書状写

猶々兩人此方へ被罷越候事、限庄行故候、御不審有ましく候、別用途可申談候、御札令披見候、越中殿新介方限庄之儀に付候而内談可申

事候而、彼方へ令申候、明日方角へ同所にて候間、別用

途可申談候、御不審有ましく候、隈本衆御同前ニ御さ候

ハ、可目出候、餘者以御面可申候間失敬候、恐々謹言、

十一月一日

寛栖（花押）

菱刈孫二郎殿

御報

新納駿河守殿

10 本田親貞書状写

阿蘇境致手替、就夫追々加勢之由申来候、即刻續衆如御

船可罷被立事、御油断あるましく候事候、恐々謹言、

本田下野守

十二月廿八日

親貞（花押）

菱刈殿

猿渡越中守殿

市来下総守殿

平泉衆中

御宿所

〇七 菱刈氏古文書（卷子）

1 喜入次兵衛書状

先頃番代伊知地権左衛門二男権之介嫡子ニ相立、脇腹之
直子ヲ二男ニ可仕之旨被申上候、達 上聞候処ニ、直子
ヲ嫡子ニ相立、権之介儀二男ニ而番代相勤可然候、立願
之儀共仏神へハ申替様も可在之由被

仰出候間、可奉得其意旨、御老中任御差圖如斯ニ候、已

上、

巳 六月十六日 喜入次兵衛（印）〇

菱刈孫兵衛殿

2 某寛書写

寛写

一御先祖御むしくひ大口之内溯邊村朝日寺門長兵衛と申
者格護仕、長兵衛先祖同前ニ取持仕候右御位牌ハ、菱刈
左兵衛殿と申御牌之由申傳候、私罷越段々見申候得共、
法名文字相見得不申候、以之外破損仕有之候、當節ハ右
長兵衛罷越、御宅へ罷出、委細御咄仕候様申付置候、

一大口之内花北村へ石塔三塔同所ニ有之、法名

天正拾三年甲申三月十八日

桑全妙富大姉

梅

松林妙香大姉

林

右二塔法名相知申候、一塔結構成石塔ニ而御座候得共、
法名相知不申候、三塔共ニ菱刈殿、

右ハ大口へ菱刈家位牌所持仕候者有之由、先年彼表
尋見廻咄之由、坂元安右衛門殿承候ニ而大口嚙衆私
宅ニ老人相招申候、段々預候由候処ニ、右之通書付
来申候ニ付、追而相糺答也、

巳 七月十七日ニ候、

3 大林寺其阿書状
宇治悪佐久左大臣

重妙様下向之年号月日付ヲ書付候て被下候へ、頼入候、

八月廿日

圓三河守殿まいる

大林寺
其阿

以上

4 人数賦寛書

文祿四年十貳月五日

上神殿之人数

本城荷運ニ付

かく井 孫二郎一人

帖佐へ指之口 助兵衛一人

中その □兵衛二人馬

平¹ 四郎右衛門尉馬人

にし 清衛門尉馬人剛右衛門尉一人

上¹のその 孫七郎馬人

名¹子 孫十郎一人

上¹ノそのゝ助兵へ一人

入組川村中 岩下主馬一人

馬七疋

引しかり 助十郎一人

同村¹ 主計一人

同村¹ 助左衛門尉一人

同村¹ 善八一人

御荷夫丸

引地 馬一疋

入組中馬 かけゆ兵衛一人

同 助七郎一人

山下 勘七一人

南 三郎五郎二人

帖佐へ なる満

畠中 仁右衛門尉一人

此外御荷夫并 柳田 新十郎馬人

帖佐へ馬人 引地 助十郎馬人

入組内 孫左衛門尉一人

入江田 孫八郎馬人

同所¹ 助七一人

以上 人 廿五人

5 菱刈次兵衛覚書写

覺

家嫡善次郎重秀之御事ハ、

義久公江殉死被成候處ニ、跡目相續被成候男子無之候ニ

付、私祖父越後隆豊江家督代被仰付、善次郎殿領地伊集

院之内神殿江被移、家督代相勉申候、其以後家督代を辞

シ申候ニ付、善次郎殿妹留守式部殿次男之儀ハ、血筋

之甥ニ而、善次郎殿江身近倅なく養子ニ被相定、半右衛

門尉重榮与被為名乗候、依之隆豊事ハ重榮江家嫡を継渡、

旧領大口之内花北江立帰申候、右通ニ御座候故、隆豊事

家嫡之儀ニ召載、旧記も御座候、此度諸家之系圖再撰被

仰付事ニ御座候間、隆豊事家嫡之儀被召載被下度候、左

様御法様次第ニ被成可被下候、以上、

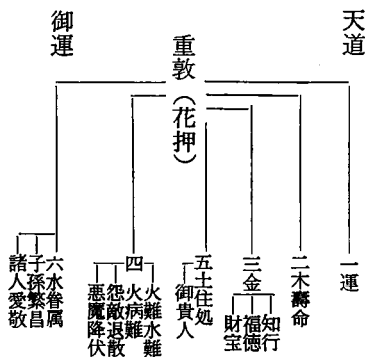
十月十一日 菱刈次兵衛印

菱刈孫太郎殿

6 五性六点極意書

五性六点之極意

御判形筆法點畫無相違如此御居可被成者也、



天文司(朱印) 安部博士八譽誌(朱印)
 于時承應三歲正月吉日
 午
 菱刈孫兵衛殿

7 某覺書

一湯尾之内おやち松と申所へ、菱刈家御懐石とふ有之、

柏木平左衛門尉へも先祖祀いたし毎年被參候由承候事、

一うりの峯山むりよふじとて寺壱ヶ所有之、本城ふもと

近クニ而候、右寺へ阿ミた御立被成居候、右寺當日ハ

無之候、右ぢうぢハ當分ハ然処ニかんろ寺と申寺へ罷

居候出家、右むりふ寺之下ニ隠居いたし、右之阿ミた

山之内ニ御座候故、自分寺ニ相立て被申候由、右出家

ハ當分いふすきへ罷居被申候由、

一けいとふ庵、右むりふ寺と申寺と一度ニ相立申候寺ニ

而、當分ハ無之由ニ御座候、菱刈家寺ニ而候由申傳候、

一位はい大れん寺申所へ有之由候、

8 長上下部兼英裁許状

鳥食用之事

八幡宮參詣之時者、三日可憚之、於八幡在所之外、食用

裁許申候也、

慶長卯廿年七月吉曜日

神道長上下部兼英(朱印) (花押)

菱刈大膳亮殿

〇八 当家諸書付(卷子)

(卷子表紙)

當家諸書附

1 菱刈孫右衛門覚書

『菱刈孫右衛門より古系圖ニ相添差出ス覚書、此方系圖ニ引合候而致添書ニ付、右書付此方へ留置也、後日見合ニも可成歟、』

元禄八年亥正月八日

重之 (黒印)

覚

一 弥兵衛養子親菱刈孫右衛門事、加治木より中郷へ為罷移由承候様子者、右孫右衛門父孫右衛門若輩之砌被相

果候ニ付、中郷衆中田原五郎左衛門と申人ニ母事致縁

与参候節、孫右衛門儀茂母召列候而中郷へ罷居、其節

中郷喫役三年程相勤為申由承候得共、いヶ様之由緒御

座候而役儀為相勤事不存候、

一 孫右衛門限之城へ罷移候者、嶋津弾正殿御地頭被遊候

節、中郷より被召移候得共、いヶ様之由緒御座候而被

罷移候儀不存候、

一 孫右衛門女房弥兵衛はきニ而御座候ニ付、弥兵衛事ハ

鹿兒嶋ノ江川弥左衛門二男ニ而御座候得共、養子ニ為

罷成通承候、弥兵衛女房者鹿兒嶋衆野村太郎左衛門娘

ニ而御座候、

一 孫右衛門實名不存候、弥兵衛實名重治、

庚辰九月廿九日ニ相果申候、

一 花翁淨蓮居士

孫右衛門法名 同人 女房

寛文元年辛丑ノ九月六日ニ相果申候、

一 花室妙佛大姉

孫兵衛同 同人 女房

真享四丁卯十月五日ニ相果申候、

一 念願院觀阿居士

孫兵衛同 同人 女房

真享元年申子ノ八月七日ニ相果申候、

一 月秋光仏大姉

當 孫兵衛同 同人 女房

一 正保二乙酉ノ十月十七日ニ出生之、菱刈孫右衛門 金重

一 孫右衛門女房串木野衆中小佐忠左衛門娘ニ而御座候、

一 寛文七丁未ノ二月十五日ニ出生之、

同人嫡子 甚七 元重

一 寛文十庚戌年出生之、

同人 娘

右者同所ノ木原源右衛門へ縁与申候、

同人 娘

一 延寶四丙辰ノ十月十七日ニ出生之、

川内

右者山田衆永吉定右衛門へ縁与申候、

同人二男 半三郎

一 天和二壬戌ノ正月九日ニ出生之、

重次

一 貞享四丁卯ノ十月十五日ニ出生之、

同人 娘

一 元禄二己巳ノ九月廿六日ニ出生之、

甚七 娘

一 元禄七乙戌ノ八月廿五日ニ出生之、

同人嫡子 生子

一 慶安二己丑ノ十二月廿三日ニ出生之、

孫右衛門弟 善助 重興

一 貞享三丙子七月廿五日ニ出生之、

善介嫡子 善吉

一 元禄二己巳ノ九月廿三日ニ出生之、

同人 娘

一 元禄五壬申ノ六月五日ニ出生之、

同人 娘

一 明暦二丙申ノ二月元日ニ出生之、

孫右衛門 妹

右者水引衆寺田甚賀へ縁与申候、

右者御差圖之通書付差出申候間、御覽可被遊候、以

上、

九月廿八日

菱刈孫右衛門

菱刈孫太郎殿

(繼目裏印)

2 藤原姓菱刈氏庶流曾木氏系圖写

『曾木仁左衛門より差出ス系圖写、本書ハ御記録所へ差出候、於向後此趣ニ相違於有之者可遂詮儀也、但古系圖写此末軸ニ有之、』

元禄八年亥正月八日

重之 (黒印) ○

藤原姓

菱刈氏庶流

曾木氏系圖

菱刈重妙之三男

重茂

重澄所筒藏古系圖以貞重系重茂之子、今考之、於

交名注文、彦五郎重政者元弘・建武之比之人也、
 貞重非重茂之子明矣、疑重茂與貞重之間三四代闕
 之乎、貞重亦重茂之嫡流之證筒藏、系圖之外可徵
 之然明也、重茂之嫡庶難明考之於嫡家之古譜及家
 々之舊記則可證明之矣、

重英考之、

貞重

彦太郎

忠重

或忠茂 彦五郎

(繼目裏印)

重政

藤五郎

重

(44)

下野守

曾木没落之時戰死

重勝

左衛門尉

祇答院頼申相列御奉公ノ忠ニヨリ、女房ヲ給リ候

荻野名宇

重益

加賀守

建瑞

平五郎

戰死於曾木

重信

越後守

重愛

若狹守

重賢

左近將監

重昌

兵部少輔

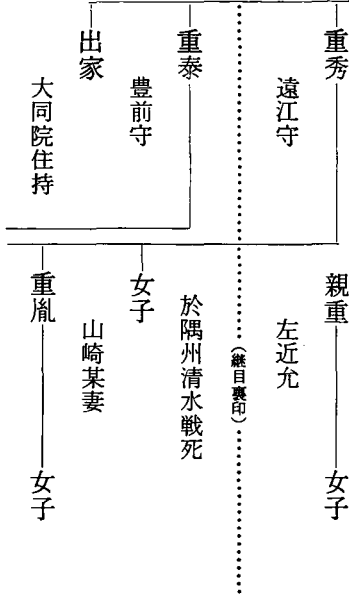
重治

播磨守

永正十癸酉年誕生、

傳稱、重治少年之際、有故去曾木流浪於入來禰答院之際、而後永祿年間候于飯野、始奉謁兵庫頭忠平公、訴為臣僕、尔来不離 公之膝下而勤仕焉、

元龜三年壬申五月四日 義弘公與伊東氏會戰于飯野木崎原三角田、重治進 公之馬前遂戰死、鎌田大炊助・野田越中坊・富永刑部左衛門亦同死、忠之譽名猶在人口矣、年六十一、法名家翁祖珍禪定門



圖書允

於日刃高城戰死年三十五

重村

右馬助

重長

中務丞

於隅州清水

戰死歳廿二

女子

東郷某妻

重兼

重憲

女子

新助

平侃

重道

平五郎 慶長五年庚子九月十五日、於濃州關ヶ

原戰死

重公

右近允 幡磨守

天文八年己亥誕生、

義元公(久)・義弘感父重治忠死賜新恩地、重公従少壯

奉仕于 義弘公勞軍務、 太守義久公攻討於三笏

凶徒及豊肥・筑前後六州、重公從 義弘公無不臨

其戰場、且又供奉 義弘公移於栗野・帖佐・松（金殿）・

加治木、

寛永六年己巳閏二月六日死去、享年九十一、法名

花雲道春居士、

重松

弥五郎 後五兵衛尉

元龜元年庚午誕生、

天正十八年庚寅之春、 殿下秀吉公征伐相州小田

原城主北条左京太夫氏政及氏直、時 又一郎久保

公為從軍出陣于關東、依台命不引率多勢、撰勇敢

之士拾五騎、重松預其撰可謂榮也、其所撰兵北郷

作左衛門三久・大野治部久高・佐多越後忠増・伊

勢弥五郎貞昌・五代右京友慶・其子勝左衛門友

泰・梅北宮内左衛門國兼・平山作右衛門忠續・福

島半助忠辰・木村主殿時益・河野玄蕃通親・上床

吉右衛門國寄・重松等二崎、其外至步卒五百許也、

此時拜領御脇指上州住正重作長一尺一寸一分於重松時廿三歲、

文祿元壬辰供奉 義弘公渡海鮮國、此時勤仕御納

戸奉行矣、 久保公病卒於朝鮮國巨濟陣中、故奉

隨遺骸歸朝、其後從 忠恒公再航朝鮮國勞軍務、

就中慶長三年十月朔日、大明之大將盤老爺董一

元・裨將孟考爺茅國器率二十万兵進逼泗川新寨、

既近于城兵放鉄炮擊、殺敵兵不知其數矣、大炮忽

打破敵之棄器、黑煙覆天、乘其變城兵同時突出、

重松從 義弘公有軍功、其外七年之軍勞不遑舉記、

帰朝後賜采地百二十石、且頂戴感牘、今紛失不存、

可歎惜是也、

義弘公慶長三年筑州直上京、重松供奉矣、同五年

公依石田三成之催促、諸將均八月朔日陷伏見城、

其後師于濃州關原、九月十五日傳稱此曉重松候、義弘公

大戦于 内府 公之軍争勝敗于一舉、比及筑前中

納言秀秋忽變心、逆才擊破大谷吉隆之軍、自是諸

將之軍擾騷、時東兵交隔于 義弘公之旌本與先鋒

於是公勵衆振威而戰爭、以死期中務大輔豊之（公）・長

壽院(盛)清淳其外戰死者夥矣、東兵別左右追敗軍、又西國勢赴伊吹山、公獨整軍列通敵軍中向駒野行軍、同廿一日着撰州住吉暫躊躇于田頭、時田邊屋道與奉 公奉迎住吉宅、伊勢平左衛門貞成・桂太郎兵衛忠助・大田吉兵衛忠綱・相良吉右衛・白坂與竹・矢野主膳・重松潛奉見送御駕、而供奉矣、及日暮以矢野氏徵・伊集院半五郎・長山半六及重松之弟重貞於御旅館、令其外軍士赴大坂焉、廿四日解纜於堺浦歸國、重松終不離 公之膝下尽粉骨、故歸國之後賜感狀及采地百斛、此證判亦紛失焉、義弘公賜御掛物一幅花枝置於重松、其外拜領物不違枚舉矣、寬永三年丙寅二月九日死去、法名柳室芳紅居士、享年五十八、

女子

湯田與七重成妻 母同

重貞

弥次郎 弥兵衛 母同

慶長元年 義弘公再航高麗、屢勞軍務而供奉尊駕、直在伏見矣、同四年有微志歸國、時伊集院源二郎忠實叛 太守公據于日刃莊內、 忠恒公治罰之、重貞豫其役於志和知城下被傷焉、同五年夏聞上方事、依之伊勢平左衛門貞豐・長壽院盛淳以下軍士慮 義弘公之危急、舉鞭於隅州帖佐、重貞為其列、然八月廿日着伏見、九月朔日參着于 義弘公之濃州大垣陣、軍中勵戰功、從是迄歸國之期不離行軍而供奉、故感狀及采地五十斛拜領、其證狀箭藏焉、重貞與兄重松同從義弘公移居於所々、而慶長十二年移加治木、子孫住于茲、

女子

前田喜兵衛妻 母江波權右衛門女

重公

伊右衛門 母同

仕兵庫頭忠朗

重利

筑兵衛 母鈴木讚岐女

女子

北村三左衛門國治妻 母同

女子

白尾與右衛門國頼妻 母同

女子

壹岐主水妻後離 元禄三庚午正月十日死、法名

鏡心貞明大姉 年九十

重知

弥五郎 新左衛門

慶長十五年庚戌誕生、母豊州之瀧田九郎女志賀、播磨

守之外孫也、瀧田九郎於日刃高城戰死之後、外祖

父播磨守自豊後携來于薩州、而后嫁重松、自父

重松從 義弘公移居加治木、住在于爰、重知仕兵

庫頭忠朗補家老職、重知屢奉近謁于 太守光公、

蒙恩言惠賜、承應元年霜月四日 光久公以齋藤

監物賜御鉄炮之雉二羽、明曆二年申八月廿六日於

忠朗之館加治木 光久公賜御肩衣袴紋、同廿九日重知

有微恙在床褥、時 光久公在小村隅為問其疾、遣

鎌田新右衛門賜柿一籠、同年小春十三日 光久公

入御於忠朗之麿府館、御帰城之後、則以財部淡

路拜領織筋一端、忝添賜御自筆之御書、珍拜敬戴

而笥藏之、萬治元年十二月二日拜領 御鉄炮之雉

上使有村市郎兵衛、

寛文九年卯二月十八日、光久公將令弟市正忠廣

賜白金一葉、此外拜領物不違枚舉故畧焉、明曆元

年 光久公以忠廣被高命曰、重友之三子之内一人

候候魔被高府奉事焉、依之使三男忠諸奉仕太守公、

故忠諸拜謁 光久公、未幾令忠諸為川上五兵衛忠

盈之養子、

延寶三年乙卯二月十三日死去、年六十六、法名即

安徹心居士

重澄

仙千代 弥五衛門 新左衛門 二左衛門

寛永十二年乙亥四月廿八日誕生、母白坂將監女、

父重知及晚年訴辞家老職於忠朗、以故觸 光久公

之高聞、以重澄代之守其職、重澄從兵庫頭久薰

在魔府時、光久公有高命曰、可改名新左衛門、市

正忠廣所傳之故号新在衛門、光久公賜織木綿一

端於重澄二度、不記其年月、重澄每載獻上御樽代

青銅百疋于 光久公、奉祝新奉成、奉賀從江府 御婦

國之祝禮歲除亦奉獻肥後織木綿一端、

頼朗

新三郎 久三郎 新右衛門 孫六 母同

桑畑久右衛門頼増嫡子

忠諸

式部卿 翁介 五郎左衛門 新兵衛 采女、母

同、川上五兵衛忠益養子

仙千代

早世 母有川長左衛門貞頼女

重喬

新三郎 新介

萬治二己亥六月十一日誕生 母前

寛文十一年辛亥三月朔日 太守光久公・綱貴公入

御于加治木、時重喬獻御太刀并青銅百疋始奉拜謁

光久公、改名新介、本田右衛門新平被申次之、綱

貴公代于 光久公見之矣、同二月參候於國分小村

之御旅館、獻上御太刀・馬代而奉謁 見于綱貴公、

此般亦親平為申次、

女子

二渡伊(左)在衛門重昌妻 母同

女子

市來源右衛門家年妻 母同

重矩

新六

延寶五丁巳年三月七日誕生 母同

新平

夭亡 母同

—重皓

始重治 翁介 五兵衛

延寶六戊午年十一月六日誕生 母市來八左衛門家寬

女

元禄二年巳三月五日 網貴公所寄 尊駕於久住之加

治木館、重治初奉拜調于 網貴公、奉獻御太刀并青

銅百疋、鎌田後藤兵衛政展所申次之、時改幼名名五

兵衛、

—女子

母同

—重年

新五郎

元禄元年戊辰十月朔日誕生 母同

(雜目裏印)

『此文書ニ通曾木仁左衛門先祖へ被成下由ニ而差出故、御記録所へ差出候留也、後年見合ニも可入歟、

重之〇(黒印)

猶々其元夜白辛勞之儀推量申候、めしつかはれ候衆

すくなく候条、弥御奉公方之儀頼申候、

當春之嘉悦万幸々々、先以中途無何事江戸へ早々被成下

着之由、目出度存候、然者幾度申候而も、在江戸之儀者

諸國之着合にて候間、諸事御取沙汰可在之候、就其

御前之出合者如何様ニ可在之事も更難量候条、自是心遣

千万候、涯分入念可然候、題目男女猥出入無之様ニ堅可

被申付候、勿論如置目何も小者共ニいたるまで、むざと

町あるきなど不仕様ニ、連々穉可被申渡事肝要候、余者

期後便候、恐々謹言、

(慶長十九年) 正月四日

惟新(花押)

江田藤右衛門入道殿

曾木五兵衛尉殿 (重忠)

4 島津惟新義弘書狀写

猶々江戸之儀者、諸國之着合にて、善悪ニ付取沙汰
可在之候、就中女房方猥儀無之様能々相嗜、御奉公
仕候様入念堅可被申付候、将又寒天之時分、万事ニ
不如意ニ可在之候間、銀子百目送遣之候、
今度上洛之儀、於久見崎俄申付候處、無吳儀御供申候事、
別而祝着不少候、然者宗圓御供申候へ共、如存知煩繁候
而、事窺ニ御料人も被思候由候間、近比雖難申儀候、乍
辛勞此一節者致逗留御奉公可被申儀頼入候、御料人へも
此由申候間、其段可相心得候、恐々謹言、

拾月十日
惟新〇(印)
曾木弥次郎殿

十月四日

維新(花押)

曾木五兵衛尉殿

5 島津惟新義弘感状写

『曾木筑兵衛へ被成下候文書、此節曾木仁左衛門より差出故、御記録所
へ差出ス留也、
重之』

今度美濃國関ヶ原之合戦致粉骨、從其伊勢・近江・伊
賀・大和・河内・和泉ニ至り、帰國之路次傳片時茂側を
不相離、抽奉公之段神妙之至、尤感入候、仍知行五十石
宛行者也、

拾月十日

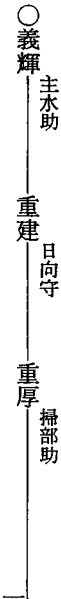
曾木弥次郎殿

6 大口曾木弥介系図写

〔端裏書〕
「大口住人曾木弥介系圖写」……〔雜目裏印〕……

『曾木弥介より古系圖ニ相添差出候系圖留也、御記録所へも右之通ニ而
差出候故、留置候、
』

留大口木曾木弥介系図



義元 日向守

源次左衛門

萬治二年己亥九月十七日
正右衛門卒
重長
法名一山了貫居士

重持

八郎右衛門、猿渡為左衛門二男猶子ニ入、延享
九年辛酉九月朔日卒、法名脫山宗圓居士

女子 種子嶋喜左衛門妻
母松平長右衛門女

重治 曾木弥介、延享三年乙卯二月廿七日誕生
母同腹

右之通書記差上申候、私儀幼稚ニ而親ニ離申候故、家
ニ付而何ぞ巨細之儀存知不申候、併先祖より傳置申候
系圖御座候を見合、如斯相改申候、以上、

戊 十月十五日 大口 曾木弥介

7 曾木家伝ニ付曾木甚之允覚書

「曾木甚之丞より差出系図也、甚之丞之後曾木甚右衛門為二男家之由に
甚右衛門申出、其證書見届、依無別条、甚右衛門系圖ニ書加、此節御
記録所へ差出候、於後年甚之丞家之儀別家ニ相分レ候儀へ、甚右衛門
差圖次第ニ可申付也、
元禄八年亥正月七日
重之〇(黒印)

曾木家傳之覚

- 一 曾木者菱刈之三男曾木三郎与申人より初申候与申傳候、
- 一 藤原氏ニ而、宇治左大臣之子孫ニテ候与申傳候、
- 一 幕之紋者、嫡家ハ竹之丸、曾木家者二本竹之子与申傳
候、
- 一 私先祖鹿兒嶋ニ罷居候処ニ、曾木甚右衛門弟勘解由重
綱与申者、北郷左衛門尉時久を頼、庄内江參候由申傳
候、重綱墓者都之城西明寺与申寺ニ御座候、從是上世
之儀者相知不申候、親次右衛門幼稚ニ而、祖父彦右衛
門之家を継申候ニ付、家傳等茂然与承置不申候、
.....(雜目裏印).....
- 一 勘解由兄曾木甚右衛門と申人者、鹿兒嶋ニ而茂別而武
功為有之由候、乍老鉢都之城北郷源左衛門親兄弟切腹
被仰付候時分、為檢使被差越、甥彦右衛門處江立寄被

申候儀、于今覺為申者御座候、甚右衛門子權之助、其子甚右衛門代迄ハ互ニ立入為仕由申傳候、

重綱
重親

曾木勘解由
龜介 彦右衛門

正保二年癸酉正月八日卒
法名孟軒常春

女子

坂元勘右衛門利意妻

○延宝二年甲子三月十五日卒、法名明秀常光

重次

源七郎 早世

重供

始重賢 源藏 二左衛門 次郎右衛門 次右衛門、實者坂元勘右衛門利意嫡子也、源七郎依早

世繼外祖重親之家、

○寛永十三年丙子六月十日誕生、

重治

虎松 甚之允 母ハ川野加左衛門通隆女

○寛文四年甲辰五月廿九日誕生、

重興

甚介 母池袋甚兵衛宗益女

○貞享元年甲子五月廿九日誕生、

女子

母同前

○元禄二年己巳八月廿二日誕生、

女子

母同前

○元禄七年甲戌七月九日誕生、

.....(經目裏印).....

右者、此節菱刈家系圖御改ニ付、御用之間系圖文書等於有之ハ差出可申旨被仰渡候、系圖文書等無御座候、家傳

之通書記差上申候、已上、

戌
拾月十九日

曾木甚之允

菱刈孫太郎殿

.....
(雜目裏印)
.....

8 隈之城曾木半七系図写

鎌足大臣ニ四代相隱藤原重妙ヨリ十二代カ、菱刈没落之
後屬祁答院平良重ニ、移榮ス伊佐郡鶴田ニ、永祿年間良
重没落之後属于嶋津中務大輔家久公ニ、移居ス日州佐土
原ニ、中務家久公御卒去以後、移于薩劬隈城ニ、

.....
(雜目裏印)
.....

号曾木兵部少

藤原重昌

寛永十九年壬午十一月八日死去、

法名梅窓信香上座

○重廣

号曾木源左衛門

明曆元年乙未七月廿七日死去、

法名永翁源春居士

重高

号柴野五兵衛

一女子

山内正左衛門源義近室

元和五年己未十一月廿八日誕生、

重勝

貞亨二年乙丑六月廿六日死去、

号曾木神左衛門 法名月山及海居士、

母重田六郎右衛門女、法名實宗妙貞大姉

一女子

中原新右衛門室

匡重

号曾木伴七、寛永十九年壬十三日誕生、

母山口十郎左衛門平重昌女、法名花雁妙蓮大姉
 正保四年丁亥五月四日死去、
 重次 勘十郎 明曆三年丙子十一月十四日誕生、
 母川添覚右衛門女

廣重

号曾木兵右衛門 寛文七丁未六月卅日誕生、
 母須賀徳兵衛女
 法名長円妙久大姉
 延寶八年庚申十一月七日死去、

女子

母同 寛文十二年壬子十一月十九日誕生、
 松崎与左衛門室

女子

母江口為左衛門女、貞亨二年丙子十二月七日誕生、
 生、

重安

母同 元禄三年庚午四月廿九日誕生、

『元禄八年亥正月七日』

曾木半七殿系圖

「古系圖此與「有之」

「後年此表ニ相違候ハ、可遂詮儀、

重之〇」

(黒印)

(雜目裏印)

9

曾木甚右衛門差出系図写

系圖並文書、延寶八年庚申正月十二日類火焼失故、
 中絶、不詳、

重正

源七 権之助 甚右衛門

寛永十六年己卯正月十四日卒、享年八十三、

法名月江宗心居士

重綱

曾木勘解由

重親

(雜目裏印)

龜介 彦右衛門

正保二年癸酉正月八日卒、

法名益軒常春

女子

坂木勘^(子)衛門利息妻

延寶二年甲寅三月十五日卒

法名明秀常光

重次

源七郎 早世

重供

始重賢、源藏、仁右衛門、次郎右衛門、次右

(繼目裏印)

衛門、坂木實者坂本勘右衛門利息嫡子也、源七

郎依早世繼外祖重親之家、

寛永十三年丙子六月十日誕生、

重治

虎松 是之丞

母川野嘉左衛門通隆女

寛文四年甲辰十一月廿九日誕生、

重興

甚助

母池袋甚兵衛宗益女

貞享元年甲子五月廿九日誕生、

女子

元禄二年己巳八月廿二日誕生、母同

(繼目裏印)

女子

元禄七年甲戌七月九日誕生、母同

女子

町田弥兵衛妻

重次

源七 權之助

寛永十一年潤七月十七日死、

法名秋雲常春居士

重(ママ)

主膳

爲肥後氏養子

重長

.....
(雜目裏印)

源七 甚右衛門 母五代勝左衛門友泰女、

萬治二年二月十二日死、

法名明心如月居士

— 女子

母海江田十兵衛綱秀女 重寛妻

— 女子

市來次郎左衛門家長 母同

重寛

十助 甚右衛門

寛永廿一年甲申四月五日誕生、

母町田甚兵衛久守女

重長女子二人、無男子、故嫡女嫁重寛爲後嗣、

.....
(雜目裏印)

實者東郷十左衛門重仍二男也、

— 女子

肥後九右衛門盛升妻、

母重長女

— 重好

源七

天和三年癸亥九月廿三日誕生、母同

『曾木甚右衛門より差出ス系圖写、如此御記録所へ差出置候、

亥ノ正月七日

重之〇(黒印)

.....
(雜目裏印)

10 菱刈戸右衛門差出系図写

『菱刈戸右衛門系図、此度自分之證書相考、御記録所へ差出候、於後年

此表二相違有之間敷候、尤戸右衛門方へも如此写遣置候、

重之〇(黒印)

元禄八年亥正月七日

隆秋

彈正大膳亮 入道兵露

大口地頭

兄重猛嫡子鶴千代幼稚之隆 太守龍伯公尊命爲
家督代勤宗領職矣、鶴千代成人之後則讓與者也、

軍三郎

於高麗病死

軍四郎

病死

重秀

善四郎

家督重廣戰死故爲後嗣

女子 留主氏妻

.....
(雜目裏印)
.....

女子 本田助左衛門妻

重治

縫殿助

文禄四年六月十日誕生、

重秀爲重廣後嗣、而隆之後断絶者多年也、家督重

時訴 太守家久公、而以相良駿河入道二男爲隆秋

後嗣也、

延宝四年午七月廿日死去、

法名休山宗罷居士

女子

中村早太義昌妻

母長野十郎左衛門女.....(雜目裏印).....

重州

縫殿 戸右衛門

寛永十一年丑二月朔日誕生、

母竹内六右衛門女

道重

彦右衛門

河野道映入道為養子

久寛

久左衛門

南郷右京忠清為後嗣

重寛

四郎兵衛

重宣

仲藏

延宝元年 辰十一月廿六日誕生、

母細江武左衛門女

女子

女子

三原仲左衛門妻

女子

(雜目裏印)

(雜目裏印)

重(マ)

大市

天和四年 子正月九日誕生、

母町田弥兵衛久隆女

女子

(雜目裏印)

11 三原重秋外二名連署書状

『菱刈治兵衛家文書、此度差出入留 重(風印)之〇』

菱刈四郎との曾木就被差上、當時在所等無落着

候、就夫即達 上聞候、然者從最前抽披成御奉

公候、為其忠花北一所先々可被差遣之由被仰出

(雜目裏印)

候、早々可被仰達候、追而御加扶持之段 上意

候、聊疎儀有間敷候、恐々謹言、

十二月廿日

(伊集院)

忠金 (花押)

(川上)

意鈞 (花押)

(三愿) 重秋 (花押)

新納刑部太輔殿
御宿所

忠金

川上上野入道

伊集院右衛門尉大夫
(ママ)

三原遠江守

新納刑部太輔殿

御宿所

忠金

(本文書ハ「旧記雜錄後編一」五三二号文書ト同文ナリ)

12 菱刈某差出系図写

『此度御記録所差出写、此外後年相考儀有之間敷候、

元禄八年亥正月七日

重之〇(黒印)

菱刈氏十三代家嫡大和守重副之二男
重政

次郎 伊勢守

父左兵衛佐重時命重政補大口地頭職、在城于大口矣、

法名徳翁道盛居士

女子

比志嶋氏妻

重根

兵庫頭

相續被補大口地頭職

法名天真龍公居士 葬天龍寺大口

重清

右衛門大夫

花北氏之猶子

戰死於肥州久木野

(雜目裏印)

重昌

四郎 越後守

家嫡大和守重猛獻所知於 太守公之旗下、故
義久公賜曾木一所於重昌而為履蹶、后改曾木賜花

北住焉、國老伊集院右衛門大夫忠金・川上上野介

忠克入道意鈞・三原遠江守重秋所賜於新納刑部太輔忠元之書簡委記之、今笥藏之、法名英心良雄居士、葬花北、

女子 肝付彈正忠兼盛室 越前守兼等之母也、

女子

母高城備前守重誠女

比原氏妻

隆豐

孫三郎 越後守 源兵衛 休兵衛

天正三年乙亥誕生、母右同

文祿元年丙辰 義弘公・久保公渡海於朝鮮國、隆

豐以自力加供奉之列在陣、屢勞軍務、慶長二年丁

酉和平之時、憑上井仲五兼政請歸國暇、

因茲 義弘公使新納伊勢守久饒入道遊甫有高命、

隆豐父祖奉仕之勤勞且隆豐軍功異于他、御歸朝之

後約賜采地三百斛焉、隆豐忝事高命、遊甫奉謝厚

意、

朝鮮七年之在陣、江原道敵國及南原之攻城、唐嶋番船破之之、

時有軍勞不違牧舉、就中慶長三年巳戌十一月十八日、^(唐嶋)康嶋之番船交戰太急也、切乘敵艦蒙疵矣、

因茲從壹岐嶋賜公暇歸國、

慶長四年伊集院源次郎忠真叛逆、而籠居庄內、

少將忠恒公賜暇下國攻擊忠真、隆豐始終勞軍務和

平之後參候伏見、同五年秋石田治部少輔三成奉對

家康公相為盾、九月十五日大戰于濃州関原、

義弘公應三成而奮戰、

隆豐在公之旗本技戰功、雖然離其列無所投托、流

浪于諸國而數年之後歸本國、

頃年家嫡善四郎重秀狗死于

龍伯公、而無繼子、隆豐奉嚴命而為家督代移居于

伊集院神殿勤仕者也、雖然半右衛門重榮者善四郎

之甥也、以是為重秀之後嗣、隆豐辭當家復本家、

再任花北矣、

再任花北矣、

慶長十五年庚戌琉球國入 太守公手裏、是故為正
 經界、鹿嶋河駿河守・市來小四郎・面高連長坊・
 瀧聞傳右衛門・毛利内膳正・伊集院地知少左衛門・隆
 豐相共奉高命渡海于琉球、將渡琉國詣加治木、
 義弘公使鎌田与兵衛賜御鍵、
 元和二年丙辰三月、愁訴於朝鮮、御約諾之加增本
 地事、公在江府故不達上聽、
 隆豐亦同四年戊午七月廿七日死、法名孤山良舟居
 土、葬 成就寺大口之内

隆豐 四郎 早世 母同前

(雜目録印)

重種

龜松 四郎 越後 久右衛門 九兵衛 九左衛門
 慶長十五年庚戌六月廿五日誕生、母町田新左衛門
 久直女
 寛永十五年戊寅 光久公賜暇、看 家久公之御病、
 且攻撃嶋原凶徒下供奉、翌年又御上洛亦供奉、同

十六年己卯 光光久公巡見領國、于時重種蒙嚴命
 為大口諸士之衆頭、

萬治三年庚子八月奉高命移居麿城下勤仕、是兼所
 奉愁訴、被侵疾養老於加久藤者有年、

寛文七年丁未十月二日死去、法号真室清見居、(土脱之)
 葬德泉寺之内

女子

高城氏妻也 母同

忠充

甚介 才左衛門(才) 仲右衛門 母同

外祖父阿多源左衛門忠利猶子、

女子

荒田氏妻 早世

重利

新四郎 早世

母伊地知彌右衛門重延女

重高

彌右衛門 母同前

外祖父伊知彌右衛門重延養子

女子

川上彦四郎久張室

重興

龜松 久左衛門 次郎兵衛

明曆三年丁酉十一月九日誕生、母同、寛文七年丁未

二月六日元服、家嫡、

同十二年壬子二月十五月初拜謁拾遺綱久公、

(雜目裏印)

13 菱刈孫右衛門系図写

〔端裏書〕
一隈之城 菱刈孫右衛門系圖写

女子

甌殿妻

女子

相良殿妻

重劬

重任

クマ殿

女子

原殿

女子

入来院殿

重良

尾張守

入山本地頭

十郎

孫右衛門

(マ)

孫右衛門

孫右衛門

重治

法名花翁淨蓮居士

弥兵衛

孫右衛門無實子

故、江川弥左衛

門以二男為養子、

法名念顔院觀阿

居士

妻野村太郎左衛

門女

金重

三郎兵衛 孫右衛門

正保二年乙酉十月十七日誕生、

重興

善介

女子

寺田志賀妻

(繼目裏印)

永吉立右衛門妻 母同

重次

半三郎 母同

(父)

貞亨三年丙午七月廿五日誕生 母

女子

女子

『此系圖、自分證文相考、此度相改、御記録所江出ス留也、後年此表ニ相違有間敷也、
重之○(黒印)』

(繼目裏印)

元重

甚七

寛文七年丁未二月十五日誕生、母小佐岡左衛門

女

女子

木原源七左衛門妻 母同

女子

14 大口曾木弥助差出古系図写

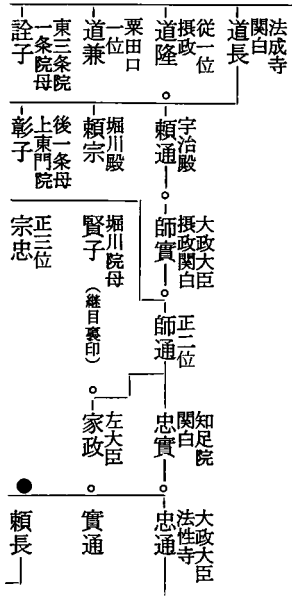
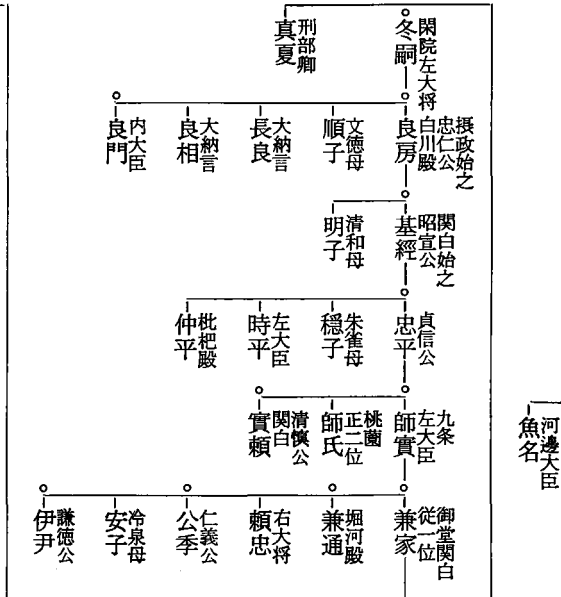
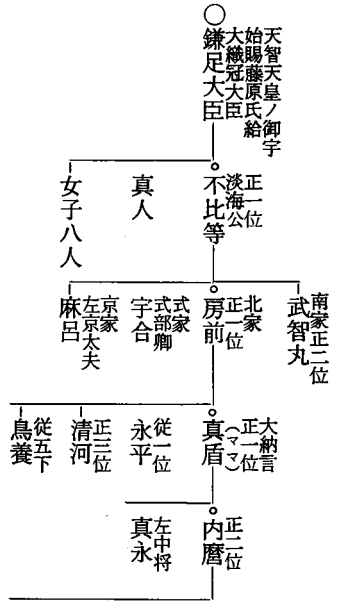
大口

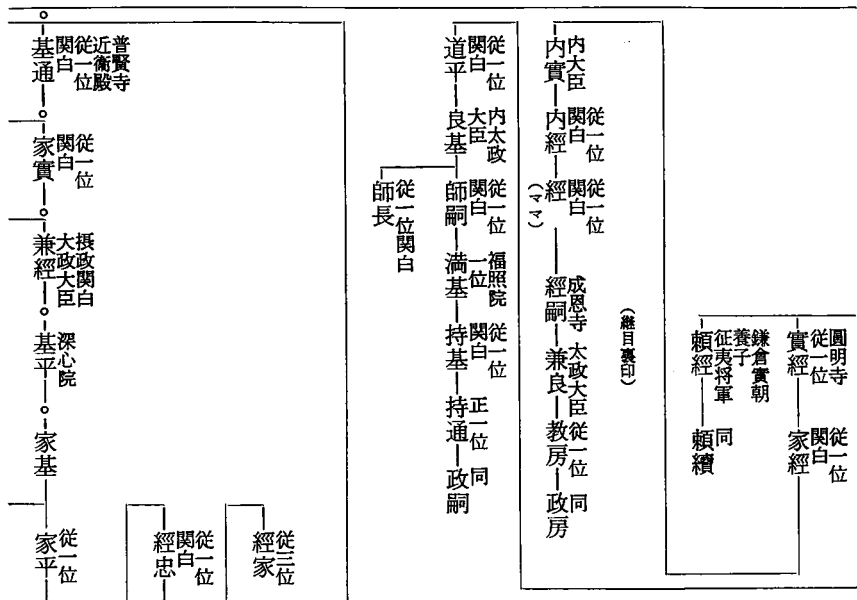
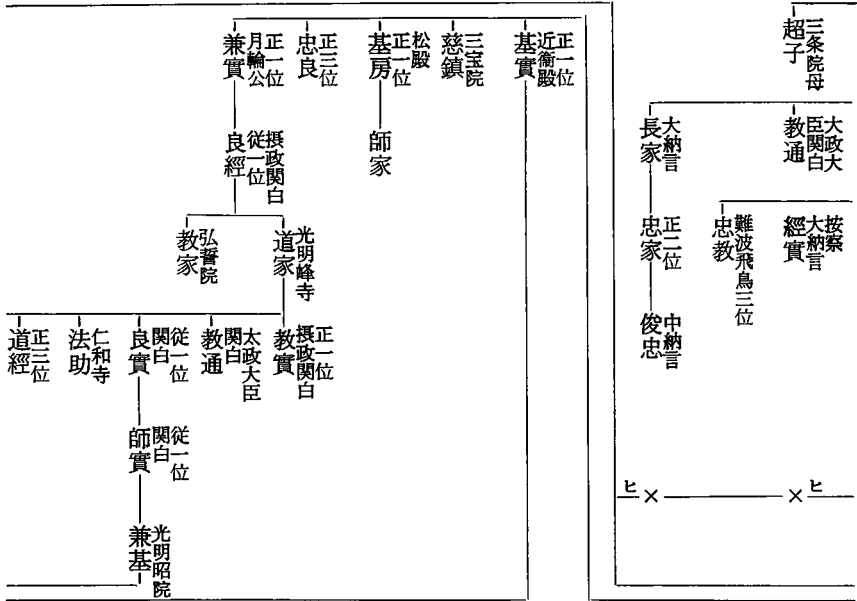
曾木彌助より差出ス古系圖写

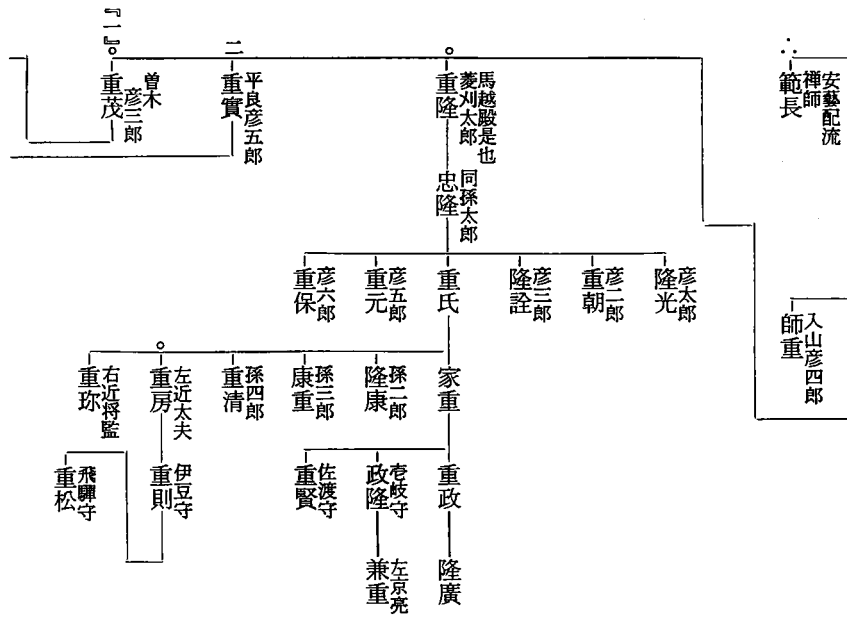
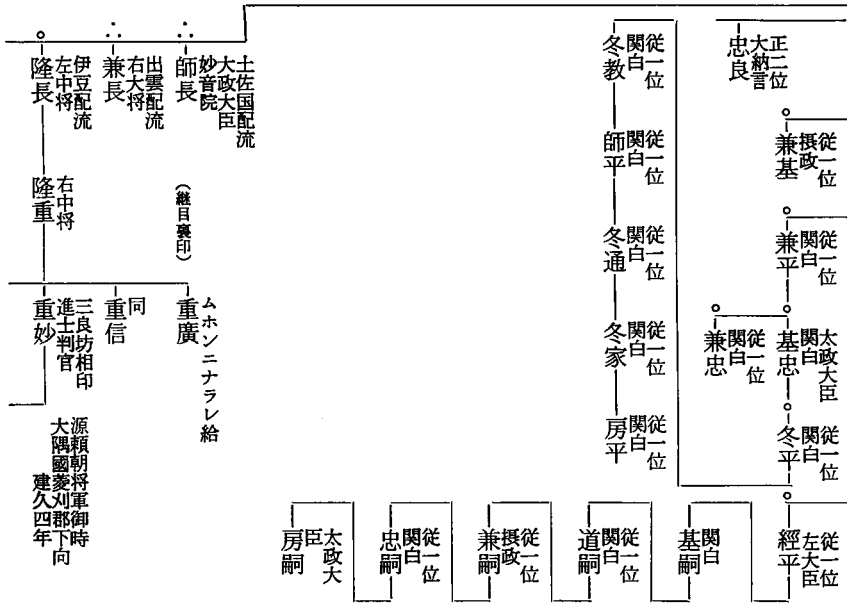
右此曾木一門之繼圖者、鎌足大臣十六代知足院殿撰政関白大臣忠實公ノ三男、宇佐之悪左府ノ後胤也、彼左大臣保元合戦之時、上皇新院第一之御味方也、其故中納

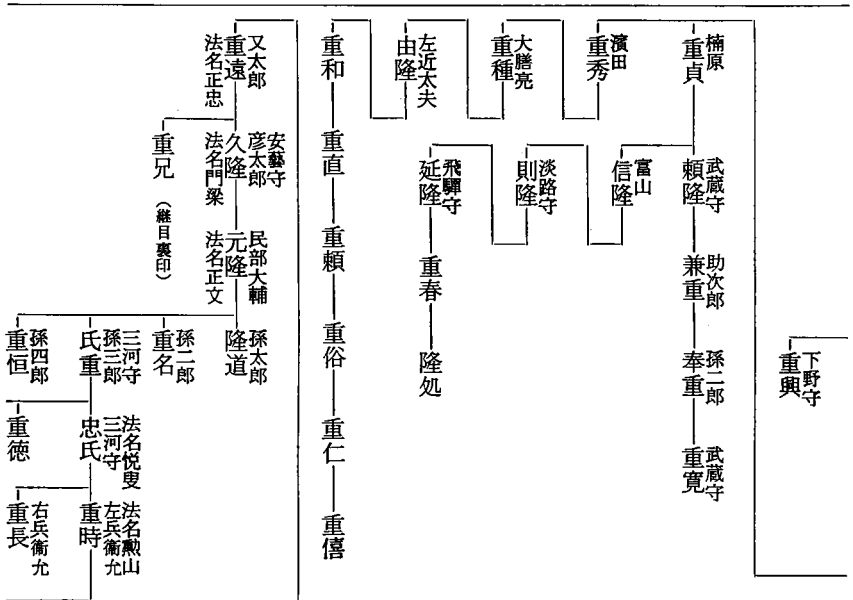
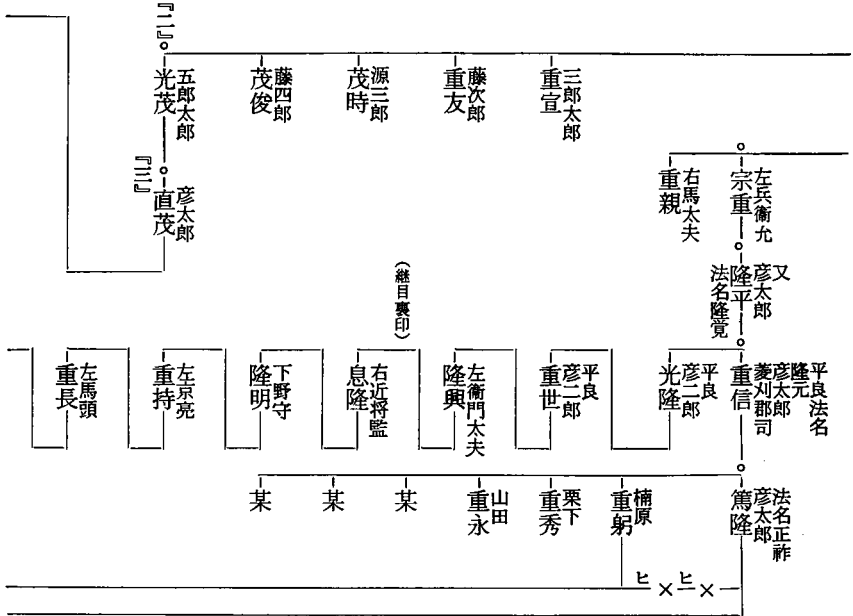
言入道信西彼悪左府奉ル誅者也、同御子四人茂配流ス諸國云々、其後治承年号之時、高倉院ノ御后建礼門院御難産アリシニ、彼頼長悪盡ノ御恨深故、為皇子誕生、大政入道清盛悪左府之子孫尋出シ奉ル赦免者也、然者無程皇子御誕生アリ、安德天皇是也、其後頼朝將軍之御時、彼子孫諸國ニ知行給ケリ、同三郎坊相印大隅国菱刈郡ニ建長年号時下向有者也、彼相印ノ御子曾木重茂ヨリ如此候家之字者重也、後ニ茂シケト誦ナシ用之也、此重モ茂モ同前候、

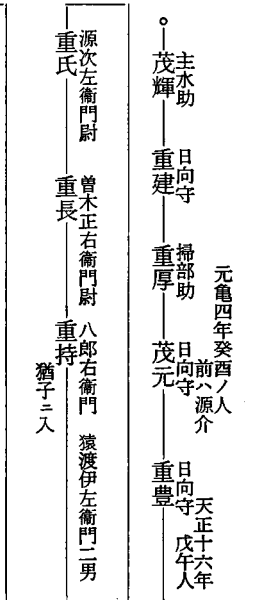
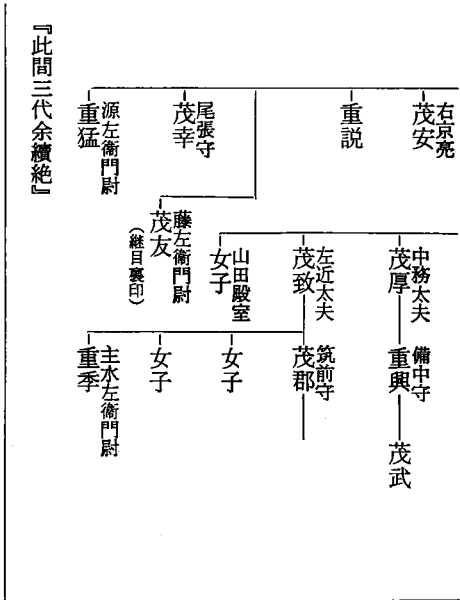
..... (継目裏印)





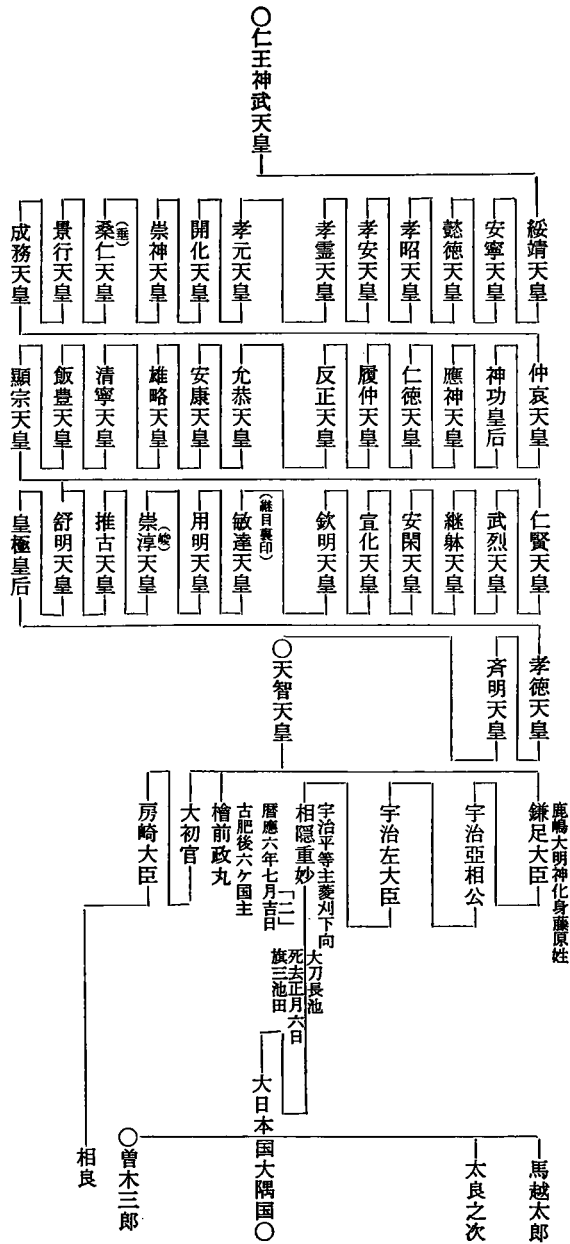


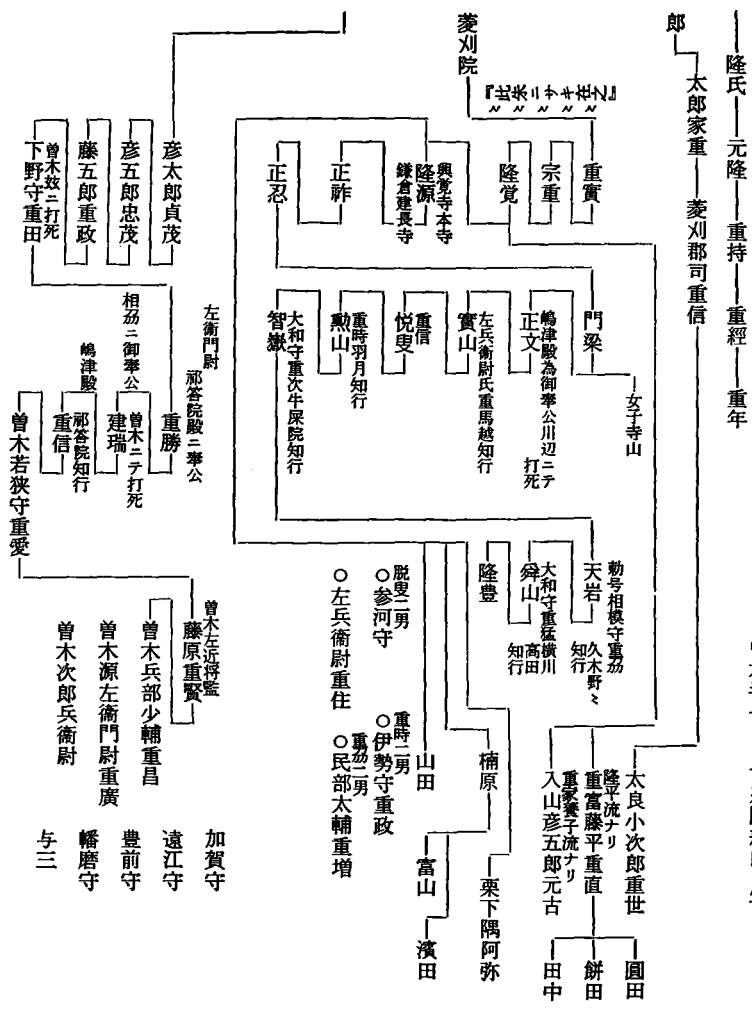




重治 曾木弥介

(繼目裏印)

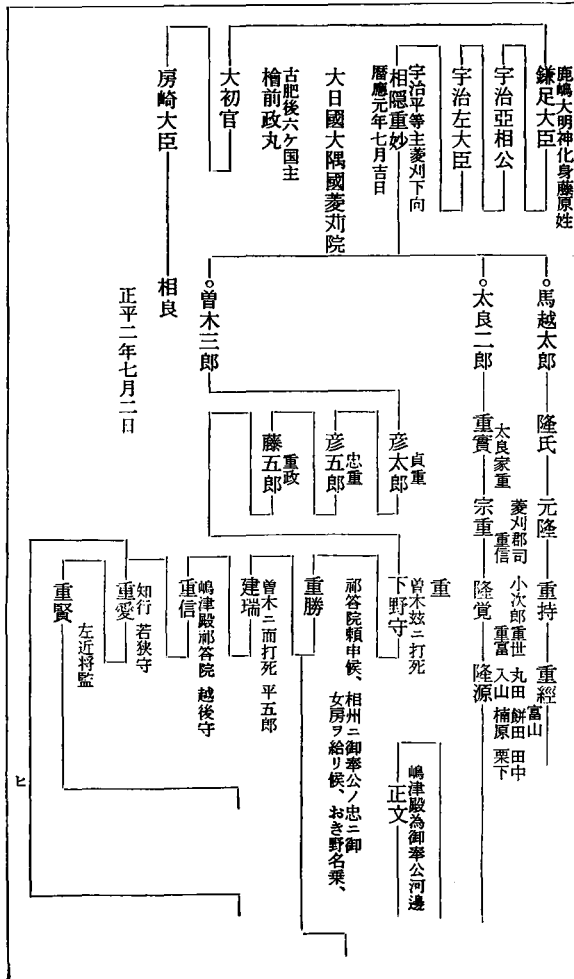




限之城 曾木半七より古系圖差出ス

(繪目裏印)

16 加治木曾木仁右衛門差出古系図写



加治木

曾木仁左衛門より差出古系圖写、纔此分相残、

『後ニ亦古系圖雖出不實、子孫可知之也、

元禄八年正月七日

菱刈孫太郎重之(黒印)

○九 菱刈大膳亮口上覚草案(卷子)

1 菱刈大膳亮口上覚草案

(前欠)

被成御頼之由承候、連々も御奉公方不奉存別儀候之条、
向後存別心間敷之由、御請之起請文差上申候、其砌先
之為御手付本城・曾木両所被下候間、本城へ罷移候、
然共近所ニ兩城格護候事憚多奉存候間、曾木之事ハ其
後差上被申候、其返地于今不被下候事、

一 右之旨弥不存別心、堺目之御奉公種々被入精候之条、

鎌田尾張守殿・宮原筑前守殿ヲ以渋谷家調儀可申之由

蒙仰候、悴者牛屎監物丞へ申付致才覚、無程申調、鹿

尾嶋へ御左右申上候間、龍伯様隈城ニ被成、御光儀

即おふぢ・大膳亮致安内者、入木院又五郎殿・東郷弥

次郎殿御目見得被申候、勿論川内無残所御手ニ参候事、

一 大閣様御下向已後、伊集院上神殿一名被下罷移候處、

半右衛門尉事高麗へ罷渡、三年相詰候而帰朝申候へ共、

又奥陣入之由被仰聞、罷渡被成御帰朝之時分致御供、

直ニ京都へ相詰候而三年ニ罷帰候事、

一 高麗・京都・庄内まで数年与頭被仰付致御奉公、既於

庄内戦死仕候、其後善次郎御侘被申上ニ付知行百斛被

下候へ共、半右衛門尉已来方々御奉公方ニ付、借銀仕

置候返弁ニうり被申候間、于今高五百石役ニ罷成候事、

一 菱刈跡として永々可致御奉公候之處、数代召仕候悴者

へ少扶持をも可遣躰無之、殊去々年御支配之時分一

所被下罷敷候へ者、知行方悪地にて候、殊ニ遠方へ被下候、

ヲも不被下、悪敷知行四ヶ所ニ被成御配分候、今分に

てハ向後御軍役相勤申事迷惑ニ存候、若輩として難申

上候へ共、以前より数代御奉公申来候筋目被思召合、

此節被成御手付候様御披露奉頼候、
元和二年八月廿日 菱刈大膳亮

別符信濃守殿

鎌田左京亮殿

市來八左衛門殿

2 利岑周易之本卦書付

(花押)

周易之本卦

誕生¹
寬永四季¹丁¹〇〇¹八月十七日¹ 生時戌
卯¹ 以上 三月死居¹

『.:』當
 坤下¹ 乾上¹
否初六¹

繇曰、否之匪人、不利君子貞、大往小來、

¹本義、否閉塞也、七月之卦也、正与泰反、故曰匪人、謂非人道也、其
后不利於君子之正道、蓋乾往居外、坤來居內、文自漸卦而來、則九往
居四、六來居三也、或疑之、匪人三字衍文、由此六三而誤也、傳不特
解其義、亦可見、

象曰、否之匪人、不利君子貞、大往小來則是天地不交
而万物不通、上下不交而天下无邦也、内陰而外陽、内
柔而外剛、内小人而外君子、小人道長、君子道消也、
象曰、天地不交否、君子以儉德辟難、不可榮、以祿、

¹本義取斂其德、不形於外、以避小人之難、人不得以祿位榮之、
初六拔茅茹、以其彙貞吉亨、¹本義三陰在下、當否之時、小人
連類、而進之象、而初之惡、則來形也、故戒、其貞則吉而亨、蓋能如
是、則變而為君子矣、象曰、拔茅貞吉志在君也、¹本義小人、
而變為君子、則能以愛君為念、而不計其私矣、

元龜云、天地不交之課、人口不圓之象、¹春正月凶¹夏凶¹
¹秋平冬吉¹

〇〇¹重也
子丑¹〇〇¹年月日時可慎¹十一月¹十二月¹正月¹

奉信 毘沙門 藥師如來 釈迦如來 大吉

一歲凶 九才厄 廿五慎 卅三大慎 四十一難 四十九凶 五十七厄
六十五厄

于時正保四年丁亥十二月吉日 利岑考之^(采印)

〇一〇 菱刈本城ヨリノ書状等(巻子)

1 某書状

かへすくもそなた御しあへせき申たくこそ候へ、
おやとりもち候ハ、このせつもま事にミもしか
かんにんのやうたいさへもなるましきほとてをつく
し、わのかたにてかみてを又わか物にと心かけ候つ
る、物くちおしく候、何たるくハいふんをこゝより
とり候ても、しよ人にめんほくをとりそこない候ほ
とに、何もかもいらぬ事とハかりおもひ候、おかし
くこそくめてた、かさねくこのふんにてハやか
てこのたよにもたせらるへく候、

ことしのよろこひめてたく候ぬ、そなたおしあへせい
かうけ給度こそ候へ、まつくちやう衆中までと候ては
れかましく候のよし、身つからにきかすへきのために
や候らんと、をしハかり候まゝにこもし二ツもたせ候、
たかもしへかしまいらせ候のよし、心え申されへく候、
さりなから身つからしかるへき物ならずとも、孫三郎か
ところ、おやハおやのやう候、をそれはうけんをなし候

におひてハ、ほんしやうにて誰そ身つからにをそれさら
ん物有へきや、このせつ一しほくハいふんをふかくく
ちおしくおもひも申へく候へは、おやこのあひたとたか
もしよりおもひ候こそ、しよしんなる事にて候へ、おや
にははちをかゝするかほんいにて候や、よめむかへの時
分もことハ事と、太輔とのなとハ、やくのハひをなし給
ひ、何事にもいろうましくとのミもてなし候つるヲ、
女なら身つから一人か分別までにてよめとり、このうへ
のまんそく何か候ハ、さてハ又こゝより本りやうの七
十五町そろふへきくハたちをうつたち候ハ、行すゑか
けてのくハいふんしちをと心かけ、御時分をもつてまい
り御そしう申上候ハ、孫もしか千百度まいり申上たら
んにもますへく思ひ候つれとも、とこくまでもたかも
ししよりやうにえんなく候やおもひまいらせ候、され
共いかさまくたされ候すらんや、めてたく、又まかしく、

三月三日(墨引)

た
しきも□へまいる ひしかり
本しやうより

2 某書状

何事もようしんハみかたと申ならハし候ほとに、よ
くく心かけしかるへく候、

御ふミめてたくこそよき御はん所にて候哉、一しほめて
たさく、まつく御しゆまいらせ候、いわうてしやう
くはんめされへく候、こさいのこと共かいふんひこ所に
もたせ候、又これのちやう衆共、かわるく御はんニた
て候やうにと候、けにもその事にてこそ候へ共、かれ共
二人たち候ならば、そなたのはんものとりつきハたれ
そ申候するや、あまり心なきうけ給事いかゝに候、はん
ものとりつきを、ひこかふんニ申候ならば、かわるく
たて申へく候、くハしくハしきふニ申きかせ候、しきふ
か事ハにあへせ、かんきんを申候まゝ、あら所の御はん
おそろしく候まゝ、そのためとして、なかつたたいかれ
これにやというけまいらせ候、これはへつして何事も身
か分別にてたてまいらせ候、ひこかおんハ有ましく候、
かいふんくきねん御させ有へく候、めてたさ、

又々、かしく、

御返事

(墨引)

久木□くへまいる ひしかり 本しやうより

3 某書状

返々もきよねん二百日御はん申候さへも、よしとら
のかけまてにてとちめ候つる、よしとらこそ御はん
たちにて候へ、さのミおひをちも申候ニ、ようハか
りハ申にくう候、こゝを御きゝハき候て有へく候、
八代の御番ハつくしつも申上候ハんとさし心して申
候へ、

さすけ物かたりニこそきゝ候へ、くまもとへハつゝきと
候てそのまゝ御はんと聞え候、そのきにてハとてもかな
ひかたく候まゝ、はやつかいをのほせ候、三河方かの井
のあらまき四もたせ候て、ゑもんたよふとのへまいる、
いゝゆのふんハ、ミンふのたよふくまもとへ御つゝきあ
たり申候、何へんもかしこまり候とこそ申上候へ、又こ
ゝよりもきよひほうたいニこそまかりたち候すれ共、き
よねんことしかけ候て、二百日の御はんを申、やうく

五月十比まかりくたり候、くりの三川とのなとも、きよねん中ハさやうの御はん御ゆるミのやうに候共見え申候、

しかれば、我々もしはらくハ、かやうのとをき御はんハゆるミ申候すらんとそんし候ハ、ハしろの御はんさへことしハたいきとぞんし申候へ共、ハしろの御事ハ何となりともとそんしまかり上り申候、くまもとへ御はん二百日申候つるも、しつかいよしとらのかけまてにてこそとちめ申て候へ、このたひかやうにハしろへつめ申候も、よほと又々よしとらの心をせへられ申候ふんにて候、にしんないと申ても、さのミハようをも申されず候まゝ、くまもとの御はんの事ハ一えんニおわひ有候、いくたひもくわひを申上候はん、たのミ上候よし、大はうのまへより、三日ハをわひのつかいたのミ申され候と、こまくゝ多もんもしへ申上候へ、それにもなるまじと候ハ、よしとらへたのミ候て申上させ候へ、御わひもたさうに候つるなるを、ミンふきまかせに候からかやうにて候、そうきちとうたれへもたんかう入ましく候、をハリとのくちか何事もよく候へく候、さてこそおとなし

き人をめしつれかね候からにて候、なんほう事ハよく申候やと申上候へ、よろつめてたさく、又々、かしく、

十二月廿三日 (墨引)

まるた

三河との□まいる

ひしかり

本城より

4 大に書状

なをく二日に御参、めてたくこそ申まいらせ候へんすれ、

御よろこひ目出度申まいらせ候ぬ、先々としのうち

御きた様へ御いけん申候へはきこしめしわけ候、御めてたくおほしめし候、二月二日に御上り候て、御ふし御目にかゝりあるへく候、又きよねん御つくり候て御あけ候やうの御かうかひ御たのミとの御意にて候、出き候ハ、たよりをもとめ、御あけ候へ、待まいらせ候はんする、うちかたへも御よろこひ御心へ候へ、めてたく、かしく、

正月廿三日

ひしかり本城内城より

圓田平兵衛とのへまいる
申給へ

大に

5 菱刈大二書状

(端裏上書)

ひしかり

まるた
平ひやうへのへまいる 大に

なをく申まいらせ候、二日に御ちへまでたるへく
候、

いつそやの返事給候、目出度申参らせ候、二日に御参之
事、大せん殿・兵部殿・ふかまちとのなとも御うけ給に
て候まゝ、御心もとなかるましく候、ちやたまはり候、
めてたく申まいらせ候、まことや、内かたの事ハ此度ハ
なるましく候、くハしくハ御見参の時申可承候、御まい
り之時者、あかくらもしまてこやとあるへく候、かしこ、

正月廿九日

たいに

6 菱刈大二書状

かへすくひましく候之事、御まいりあれと申せに

て候、内々へも御心えたのミ申候、

わざと御ひきやく給はり給ひ候、こん月六日に二三日とうりう
として御参り候へ、御参りの時分ハ、かねはさミをもち
て参り給ひ候への仰事に候、たとへ二三日のとうりう
をひましくそんち給ひ候ハ、一夜とまりニなりとも御
参り候へ、かちきに御あきなひめしまいらせ候、それ
つきて、御いそかしく候まゝ、いそきて御参り有へく候、
めてたくく、かしこ、

九月四日

大二

まるた
(墨引) 平ひやうへ殿まいる ひしかり 御内より

7 某書状

かへすく、早々御移候ハ、めてたく存まいり候

其い後者不得御意候處に、御てんこんうけ給候、祝着此
事ニ候、年内けんちへ罷越候間、急度移之よしうけ給候、
早々目出度候、此方へ御越折節ハ、先々すなハしりをか

し被下之由 御意にて候ほとに、まつくさきに人をこし候て御されため可然候、かしこ、

ふかまちの

(墨引) まる田しきふ殿へ

御申給へ

紀昌

8 たいに書状

かへすく、御しんらう共をし計まいらせ候、くはしく申候すれ共いそきまいらせ候、十七日にハさうく御いとま御申有へし、たのミまいらせ候、本田きやうふとのに御たのミ候へく、

そなた御しあへせいかゝ候らん、はやくうけ給度候、しかくまつく御へんちの事、上原とのまで御ひま候てもやよく候すらん、あハちとたんかうめし候て仰わたし候へ、憑入まいらせ候、何事も此度く事ハきまいらせさうにおもひまいらせ候、御分別しかるへし、この方にて申入たく候つれ共、ひそくしく候ハ、くハしくも申さず候し、たんかう候て御申上たのミまいらせ候、又孫三郎か何事も物しらすに候はんこと計おもひまいら

せ候、され共御身つからのとすこし心もとなからず候、よろつたのミそんし候く、めて度く、かしく、

より

(ひかり)
(墨引) 大もしへまいる

人々中

たいに

9 たいに書状

かへすく、おのくそはにハかりたのミ候、ひやうふとのたちハ夜るくハこ屋ニ有へし、しきふ・うこん・きやうふ・ぬいなとハ、しかとそんし含候、中にもしきふ・うこん二人ハよくく身もとはなれ有ましく候、何事にもこゝろつかひしかるへしく、あハちにも大もしとたんかう候てこの度御へんちの事、長とのへいゝわたし候へと申度候く、道すから何事なふまいりつき候哉、万くめて度こそく、おのくしんらう共さなからすいりやうに候、御いとまの折からハ馬に計ハたいきにて候、わかき中間衆共、かハすくもりさせてしかるへく候はんする、夕暮に外にてあそひ候いする事かたく有ましく候、ひるはしうく

も夜るくハおのくはんにしかくひきもとはなれ有
ましきにて候、孫三郎ハたふねくせあしく候てねひえか
ちに候、しきふ・うこん、こゝろそえて物めさせ憑候、
又あハちへさけしんさくあれと申たく候、御しゆすぎ候
へハ誰くもわろく候、しきふ・うこんまでひかへ有へ
し、又御前にさしして候しあハせいにか候哉、はやう聞
度候ハ、ひきやくこし候、くハしくこの返しまち候はん
く、いそき候まよめましや、めてたくく、

又々、かしこ、

まる田

しきもしへ

たいに

10 某書状

又、のとはしめふいしやうにて、なかつめたいきに
て候、いま十日ともとうりう申候ならば、たよふと
のへかハし候へ、ちやう衆などもおのくそのふん
によかるへく候、のとな□かれこれいゑもちこ
もち人なともたす候に、心なくなかたひ、いか

く、

上計ミやうの事、川きりと申上候なる山野までもすこし
あひかけす、一きよくにと申上候とも、五ちやう十ちや
うめしかゝる事も有へく候、なしよにさハ申上候哉、か
みてハ三十町とハ候ても、しかくの所しらぬよしと候、
そう木うちめなどは十五ちやうといふならハし候て、九
十ちやう計ハ有よしと候、

御ゆた様のたつとさにこそ御はんの所をさしをき、上計
くくとハのそミ申候へ、川きりにかミてのむらく、や
うくゝゑこくゝのしよりやうとも、すこしつゝくたさる
ふ分ならハ、中くゝにそう木を申上候へ、それも三十町
と申候てこそ、うらノ分も有候するかにて候、くしまめ
しおとし候時分、ワひヲ申上候、御返しをうけ候事ニ御
のそミの所あひのこり候、いかさまきつとおもしろき御
事有へく候、その時分くたされ候はんするとのうけ給事
にて候つる、ほ□たちたゝす申上てよかるへく候、め
てたく、かしこ、

しきもしへまいる

ひしかり
本

11 某書状

たくく、かしこ、

又いつれもさきらもなふ夜るもひるもさるき候て、
とかなき物にふしん共かゝり候へぬやうニ、しかる
へくふんもしかんようたるへく候也、そのふん心え
候へ、又孫三郎へ、

御ゆたのまつりのあさハ、いつもなからとくおき候
て、こほりかきおかミ上候へと申候く、おのく
もさやうニしかるへくこそ候すれ、

ふミくハしくとゞき、見まいらせ候、二人ニ申きかせ候
へく候、御めにかかり候、御しあハせよく候や、一しほ
めてたくよろこひすもしく、又なか入こそて、すもし
へもたせ候、さむう候へんまゝたよりうれしく、こそて
一ツ・たつな一すちもたせ候、たしかに上候へかし、い
つもたもしハにないにあたらしく入させ候へ共、このた
ひいそき候て、忘れ候まゝことかけ候らん、さうく上
候へく候、又ちやかもしう候へ共、すゝせかありあひた
るまゝにて候、さふかはゝの事にて、よへたよりあるよ
しきかせ候まゝ、やうくせゝかい候てこそく、めて